

# Fortune Ties 1

草村 悠太

## ■タータ＝ロゼリーとザッツ＝コールドサイン

---

「古来から、英雄の傍には往々にして美しい女性がいた。彼女たちは、あるいは英雄の伴侶であり、相棒であり、守護の対象であり、時には非業の運命によって別たれた敵同士だった。

これをして、女性は得てして壮健な男性に惹かれ、自ずから英雄の周りには女性が多く、その中に混じる際だった美女だけが後世に語り継がれたに過ぎないと言う者も多い。確かに、そうした面による影響は大きいと考えられている。

――でも、ひとり一人の英雄達の足跡をつぶさに追っていくと、それだけではない何かによって引き合わされた二人もいることが分かるんです」

春の陽射しを受けて街道を進む、一台の二頭立て馬車。その窓を開けて柀木に軽く片肘をついた女性が、言葉を紡いでいた。口調は穏やかで、ちょうど馬車の歩みと同じように、少しゆっくり。

開け放たれた窓からは雪解け水を滑り抜けてきた風が馬車の中へと迷い込み、女性の長い琥珀色の髪をそよがせる。緩やかに波打つその毛先が、豊かな胸元を包む、愛らしい刺繍のワンピースドレスをなでた。

「それだけじゃないっていうのは？」

馬車の歩調に合わせて馬首を並べた騎馬の上から、若い男が問いかけてくる。横に向けた彼の顔の高さは、馬車の窓のある位置のだいぶ上。

鶯色の髪を短く刈り、嫌みでない程度に整った顔立ちと均整のとれた身体つきは、目にする人に闊達さと人なつっこさが同居した印象を与えた。一方で、彼が着込んだ武具はずいぶんと年季が入っていて、騎馬の歩みにつれて小さく金属音を立てている。

水を向けられて、女性は微笑みながら先を続けた。

「英雄になってから、美女を得た者も多い。でも、まさに戦場でその名を知られようとしていたその時に、端麗なパートナーを得た英雄も、確かに無視できない数、いるのです」

「かわいちゃんと仲良くなれるわ有名にはなるわ、うらやましい限りだ」

かすかにやっかんだような言葉をおどけ半分で口にする彼に、女性は弟を見る姉のようなまなざしで、小さく笑った。

「そうですね。でも、そうと望めばあなただって、憧れのまなざしで見上げてくる女の子達を選び放題でしょう？ コールドサイン隊長殿」

「よしてください。ロゼリー先生」

「先生だなんて。タータ、でいいですよ」

「なら、俺のこともザッツで。」

そりゃ、英雄ともなれば女の子も寄ってくるでしょうがね。しがない部隊長程度じゃ、騒いでくれるのは近所の世話焼きおばさんぐらいですよ」

あら。と、女性が――タータ＝ロゼリーが、意外さと申し訳なさが入り交じったまなざしを年下の武人に向ける。イーグリア国軍の年若い部隊長、ザッツ＝コールドサインはその顔を見て、苦笑いを浮かべた。それから、

「で、その端麗なパートナーが、タータの言う戦女神だってことですか？」

先ほどまでと同じ気さくな口調で、先を促した。馬車の中から、うなづくタータ。

「ただ一人の運命の英雄を守護し、彼らがその持てる力全てを意のままに操れるようにする。それが、戦女神の天命。」

戦女神の庇護を受けた勇士はもはや戦場に敵はなく、剣を揮えば一薙ぎで十人を吹き飛ばす万夫不当の戦士となる――」

「そして英雄になる、ってことですね」

「……信じられないでしょうか」

後を引き取ったザッツに、タータは窺うような視線を向ける。馬上の部隊長は軽く頭をかいて

、

「ま、俺たちはタータが戦女神を捜し出せるように手伝うだけです。そのために俺たちはここまで来たんだし、見つけ出せればイーグリアのためにもなる」

そう、答えた。

二人の間に、しばらくの間沈黙が下りた。蹄と軍靴と馬車の車輪とが整備された街道の土を踏む音だけが耳に残る。

やがて、タータとザッツ、そして彼が率いる部隊が向かう街道の先に、さほど大きくない町並みが見えてきた。ザッツが馬車の中のタータに目線でそれを告げると、彼女は窓から少し身を乗り出して前を見た。足運びに合わせて大らかに上下する馬首の先に、素朴な町の外観が浮かんでいた。

「ザレスス」

タータが町の名前を呟く。「そういえば」と、ザッツが口を開いた。

「どうしてタータは、あの町にだけ同行することにしたんです？ 軍役でもないし、王都から近いわけでもないのに」

「……スィーフード＝ローエンウェイリー」

少し迷ったような仕草の後で、タータは答えた。イーグリア国軍部隊長の表情が、少し曇る。

「彼が、あの町にいるんですか？」

「いたという記録があるんです。もう十年近く前のものですが……」

「スィーフードといえば、名の知られた英雄だ。彼がイーグリア国人だったらいいのにと思うぐらいに。」

彼にも戦女神の守護が？」

「……確信があるわけではありません。でも、その可能性も低くない。」

彼の足跡を追っていけば、どこかで、彼が戦女神と出会った場所と瞬間との手がかりに行き当たるかも知れないのです」

答えて、タータはもう一度顔を上げ、街道の先へと視線を向けた。ザレススの町はのどかな空気をまとったまま、そのいかにも田舎町然としたたたずまいを近づけつつあった。

## ■レイル＝エウリオンとアティア＝セスレイン

レイルは誰かに名前を呼ばれたような気がして、剣を揮っていた手を止めた。頬を伝う汗を二の腕で適当に払いながら、辺りを見回す。

今自分がいるのは、山の中の、少し開けた場所。新緑が芽吹き、リスや小鳥の気配がだいぶ多くなってきている。木立の間からは山裾を回り込む街道が見下ろせる。その周りに寄り添うようにして建つ家々が織りなす町並みが、自分の住むザレスだ。そこから五キロほど離れた山の中で、レイルは木々に渡したロープでぶら下げた何本もの丸太を相手に、剣技の稽古をしていたところだった。周囲には誰の姿も見えないし、木の実も獲物もないこんなところにわざわざやってくる人はいない。旅人が迷い込むような場所でもない。

気のせいだと思って揺れる丸太にもう一度向き合おうとした時、木立の後ろから顔馴染みの少女がひょいと姿を現した。

「今日はここだったんだ。レイル」

屈託なく笑いながら、少女が声をかけてくる。アティア、と、レイルは彼女の名前を呼んだ。王都の同年代ならお化粧や装身具に興味を抱くはずの十七歳。レイルと同じ年の幼なじみは、化粧っ気も飾り気もなく、身にまとうのも動きやすさ優先のチュニックだった。栗色の髪が、はつらつとした動作に合わせて軽やかに踊る。

「どうしたの。珍しいね」

手にしていた剣を脇に挟むと、近くの木に引っかけておいたタオルで汗を拭った。幼なじみのアティア＝セスレインが剣の稽古だけ見に来たはずはない。以前はずっと一緒についてきた彼女だが、こここのところそれもなくなってすでに久しかった。

アティアは軽く頷いただけで彼の隣を歩みすぎ、さっきまでレイルが打ち込んでいた丸太に手をかけると、

「うわあ。しばらく見ないうちにぼろぼろになっちゃったねえ」

感心半分驚き半分の声を上げる。それからレイルの方に歩み寄ってきて、彼が脇に挟んだ剣の柄に指を触れた。

「重いよ」

刀身を支えながら、彼女にゆっくり手渡すレイル。「うえ」と幼なじみはその重量に顔をしかめた。

「レイル、いつからこんなの振ってるの？」

持ち上げているのも楽ではないようで、アティアは刀身を両手で抱えるようにしてその鉄のかたまりを胸元に収める。レイルは苦笑いを浮かべた。

「それでも軽い方だよ」

「えー。うちのお父さんが使う斧より重いじゃない。こんなので動く丸太に当てられるの？」

「練習すればね。正しい身体の使い方」

「スウィード先生の教え通り？」

自分に剣を返ししながら幼なじみが口にした師匠の名前に、レイルは自然と微笑んだ。

「そう」

「いつか先生にまた会う時まで、ちゃんと追いついてなきやいけないんだもんね」

見透かしたように、アティアが言葉を続ける。ちょっと照れくさそうに、レイルは頭をかいた

。

「それで、何の用さ。練習を見に来てくれたの？」

「あ、そうだ。レイルを呼びに来たのよ」

「僕を？ 何で」

にわかに、不吉な予感がよぎる。レイルもアティアも家の仕事は手伝うが、まだ働く年齢ではない。レイルの家は父が早くに亡くなったので彼と母の二人だけ。幼なじみのアティアがなにくれとなく手伝ってくれているので二人とも大いに助かっているのだが、そのアティアが自分を呼びに来たとなると、母に何かあったのではないかと思えた。

が、彼女がきらきらした子犬のような瞳で口にしたのは、そんな心配とは全くかけ離れたことだった。

「すごい綺麗な人がレイルの家に来ているの。スイフィード先生のことを聞きたいんだって。

もうね、すごいすごい綺麗なのよ！ 先生の奥さんなのかな？」

「さあ……先生は放浪者だし、奥さんなんていたのかな」

とりあえず危惧したような内容でなかったことにほっとしながら、同時に釈然としないレイル。先生のごことはとても尊敬しているが、家庭的な人だったようには思えない。奥さんや家族の話を聞いたこともない。

先生は少なくともこの町に五年も留まっていたからその間は家を空けていたことになるし、ふらっとやってきて、ある日またふらっと去っていったような人だ。

「……もし奥さんなんだったら、苦労してるんだろうな……」

剣を鞘に収めてタオルを巻き付け、帰り支度をしながら、思わずそんな言葉がレイルの口をついて出ていた。

## ■レイルの家

タータ＝ロゼリーは供してもらったお茶に口を付けながら、失礼にならない程度に居間の中を見渡した。こぢんまりとした家の中では一番広いのだろうこの部屋は、それでもやはりかなりコンパクトだ。部屋の中では大きく見える一脚のテーブルも、タータが持ってきた装丁本を置くと、それだけで天板が半分近く見えなくなってしまう。

タータの前にお茶のポットを置いて、レイルの母親が彼女の向かいに腰を下ろした。

「わざわざ王都から来てくれたんだって？ 疲れたろう」

明るい笑顔で、そうねぎらってくれる。歳は三十代半ばに見えた。レイル＝エウリオンが十七歳だったはずだから、ずいぶん若くして彼を授かったのだろう。ごく質素な印象ながら、若い頃は一スウィードがこの町を初めて訪れた頃は、きっと魅力的な女性だったに違いないと、タータはそんなことを思っていた。

「ありがとうございます。急に押しかけて申し訳ありません」

頭を下げるタータ。にっこりと笑って、かまいやしないよとレイルの母親が答える。

「しかしあんた、綺麗だねえ。あんたみたいな美人が探してるなんて、スウィードの奥さんなのかい？」

彼女の言葉に、思わずタータは目を丸くした。

「私が？ ああ、まさか、違います」

「そりゃよかった。こう言っちゃなんだけど、あの居候は旦那にすると苦労させられるからね」  
なんだか実感がこもっている。タータは一口喉を潤してから、問いかけた。

「スウィードは、この町にいる間、ずっとこちらで？」

「そう。ちょうど五年間ぐらいかな？ 町のためにはいろいろしてくれたけど、うちには食費一つ入れるでもなかったよ」

カラカラとたくましく笑いながら、レイルの母親が答える。

「いろいろ、と言いますと？」

「自警団を作ったり、彼らに町の守り方を教えてくれたりね。あとは、うちの息子に山の中の駆け回り方を教えてくれたり」

レイルの母親は、少し昔を懐かしむような表情になった。目の前のタータに向けられている視線が、その実、タータではない遠くを見つめている。

「ま、父親代わりではあったのかもねえ」

旦那代わりにはならないけどさ、と、彼女は視線を自分のお茶に戻して一口付け、そう続けた。

「失礼かも知れませんが……スウィードはなぜあなたの所に？」

ためらいがちなタータの問いかけに、レイルの母親は「ん？」と軽く視線を向けてから、  
「まあ、旦那が亡くなって不用心だったし、部屋も空いてたしね。

しばらくしたら追い出してもよかったんだろうけど、あの子がなついちまったから」

大したことはないというように答えてくる。

「このザレソスに彼が来た理由は、ご存じですか？」

「流れ者がやってくるのに理由なんてあるのかい？　あたしは聞いてみようとしたことはないなあ。

レイルなら何か聞いているのかも知れないけどね」

「では、町を出て行った理由も？」

「この町で自分ができることはなくなったからだって言ってたよ。確かに自警団も軌道に乗ってたしね。

ただ、元が根無し草の放浪者だろう？　野っ原が恋しくなったのが本音じゃないか」

そうですか。と、タータはテーブルに視線を落とした。記録では、スイフィード＝ローエンウェイリーは十年前から、この町に五年強留まっている。彼にしては例外的に長い。

この長い逗留期間と、その期間のほとんどで行動拠点とした家とに戦女神との邂逅の手がかりがあるのではないかと思ったのだが、どうやらこの女性からその情報が得られる期待は薄そうだった。

「彼が町を出る前後に、人目を引くような美しい少女が尋ねてきたり彼の身の回りに現れたり、ということはありませんか？」

ダメ元で尋ねてみる、タータ。今度はレイルの母親の方が目を丸くした。

「この十年間、あの居候を訪ねてきた女性って言えば、今あたしの目の前にいる美人しかいないよ」

## ■リユーネ＝ティアシール

リユーネは目深にかぶったフードの奥から、その町の様子を透かし見た。フードは鎧の上に羽織ったマントから伸びていて、強い風でも飛ばないように顔の前で口を止める紐が付いている。リユーネはその紐も、しっかりと締めていた。外からでは、かろうじて彼女のルビーのような瞳が、フードの前が作る深い陰の奥に垣間見えるだけだ。

かかとぐらいまであるゆったりしたマントの下になっていて目立たないが、彼女の腰には一振りの長剣。左肩にはロングボウを掛け、右手には身の丈に余るような槍を携えていた。

街道に沿って並ぶ家々はみなこぢんまりしていて、小綺麗ではあったが瀟洒というほどではない。リユーネはそんな感想を抱いた。

ザレソス。

人口はおよそ一〇〇〇。

大陸中央のミッドオー地方の南に位置するイーグリア国。その南北を貫く第一街道の終点に近い町。

街道の始点、王都タールホルツまではおよそ六〇〇キロ。

町の背後を取り囲む山系を越えると、あとは北の海岸線まで低木草原地帯が続く。

通用通貨はイーグリア王国鑄造の金・銀・銅貨――

頭に入れてきた知識を思いうかぶままに指折り数えながら、ゆっくりと街道を歩いて町の中を進むリユーネ。と、このところすっかり馴染みになってしまった感覚が、いよいよ彼女の中で大きくなった。

「……お腹すいた」

子犬が鳴くような小さな音とともに自分をせつつくその感覚に、リユーネは片手をほっそりした腹部にあてて足を止め、呟きをもらした。空腹と疲労感を紛らわせるために、辞典を丸ごと頭に収めたみたいな知識を確認するのも限界に近い。

リユーネは顔を上げて、辺りを見た。ザレソスの町の中央近く、街道が少しふくらんだ広場のようになった場所だ。この国の食堂ならだいたいぶら下げている看板を探す。

発見。外からでは見えなかったが、フードの奥でリユーネの口許が少しだらしくゆるんだ。小走りに店の戸口へと向かうリユーネ。

この時はまだ、自分の後から広場に入ってくる帯剣した兵士達の存在に、彼女は気づいていなかった。

食堂のドアを開けて、店の中に足を踏み入れる。時間が中途半端なせいか、数脚あるテーブルはどれも空いていた。奥から出てきた中年の女店主が、リユーネの姿を見て少しいぶかしげな顔になる。

「あれまあ。ずいぶん華奢な兵隊さんだね」

弓を担いで槍をぶら下げているのが兵士の格好に見えたのだろう。リユーネはその言葉には応えずに、「何か、食べるものを」とだけ告げた。

女店主が、今度は驚いたような表情を浮かべた。

「なんだい、綺麗な声だね。そのなりで女の子なのかい？」



どのなりだろう、と思ったが、考えてみたらマントの外には槍と弓しか出ていないのだから仕方ない。リューネは片手で上手にフードの紐を解くと、顔と髪を被っていた布地を外した。

霊峰に積もる雪のように白い肌。冬の満月よりも清冽な白銀に輝く髪。そして宝石のように艶やかなきらめきを持った紅玉色の瞳。

「あれまあ」

フードの下から現れたリューネの素顔に、女店主の目が、外れそうなほど見開かれる。

「可愛い子だねえ。そりゃあ、フードで顔をかくさなけりゃ、旅の最中に人の姿の狼が放っておかないね」

「ありがとう。でも何か食べるものをくれないと、狼より先にこの槍の方が喰りそう」

いちいち大仰な女店主に、槍の石突きで軽く床を叩いてみせるリューネ。脅したのではなく、本当に倒れそうだった。食事という習慣がかつてはなかったので空腹を我慢してしまったが、それが見事に徒になっている。

女店主は慌てたように一つ手を打つと、それでも口は動かし続けながら調理場の方に身体を向けた。

「ごめんごめん。すぐに出すよ。好きなところに座っておくれ。どうせお客はいないんだ。嫌いなものはないかい？」

「うん、ない」

リューネは答えながら、手近ないすを引いて槍と弓を立てかけ、席に着いた。正確に言えば、好き嫌いがあるほどこの世界の食事になじんでいない。

女店主のおしゃべりは止まらない。厨房の奥に姿を消し、その出入り口を隔ててなお、

「それにしても」

手早く調理具を扱う音に負けじと、大声で話しかけてきた。

「あんたみたいに可愛い子が、どうして一人旅をしてるんだい？」

「……人を探してるの」

精一杯声を張って、答える。

「へえ。男かい？」

「うーん……たぶん」

「自分が追ってる相手が男か女かも分からないのは頼りないね。知り合いじゃないのかい」

「違う。まだ会ったことない」

「ねえ、あんた」

女店主が、野菜を入れた鍋を片手に厨房から顔をのぞかせた。

「暗殺者とか刺客とか、そういう道に足を踏み入れちゃいけないよ」

真顔でそんなことを言うてくる。悪い人ではないようだが、どうしてそう発想が飛ぶのだろう。リューネは充分無害に見えそうな表情を選びながら、首を横に振った。

「名前しか知らないような人を刺すために探してるんじゃないよ。

運命の人を探してるの。その人を守るのが、私の天命だから」

## ■タータとレイル

ドアベルの鳴る音に、タータは部屋の入口をふり返った。扉のない開口部の向こう側から、レイルの母親が玄関で誰かを出迎えている声が聞こえてくる。息子のレイル＝エウリオンに違いない。タータはかすかに胸が高鳴るのを意識した。

王都の名家に生まれ、それが財ある者の社会的使命と捉えて学問を修めてきた。二十歳の時に業績が認められて王城で王族達に進講する機会を与えられるようになり、それを契機に英雄や英傑と呼ばれる際だった功績を残す武人達の足跡をまとめることを研究の中心に据えた。名の通った英雄達の中で、最初の研究対象に選んだのは、スイフィード＝ローエンウェイリー。ベヒランド出身ながら諸国を遊歴し、各地各地で逸話を残している彼の動きをつぶさに見ていくことで、イーグリア国がそうした在野の英雄を取り込む一助にもなるはず。

そう考えて、以来五年間、スイフィードを中心に幾人もの英雄達の業績を追ってきた。その中で、ザレススへの道中ザッツに語った「戦女神」の存在にも気がついた。

そうした学者としての自分のルーツであるスイフィードと、おそらく大陸の誰よりも言葉を交わし、深く薫陶を受けたはずの少年に、これから会う。

程なく、母親とともに彼が居間に姿を現した。思っていたよりずっと素直な顔立ちだと、それが最初の印象だった。目のあたりが母親似で、身長はそれほど高くない。タータ自身は女性にしては背が高い方だが、自分とあまり変わらないように見えた。初対面のタータに向けてくる視線はまっすぐで、誠実な性格が伺えるようだ。その表情は少年と言いついてしまうほど幼くはなく、青年と呼ぶほどにあどけなさを失いきっていない。

その後ろから、レイルを呼びに行ってくれた少女も部屋に入ってきた。彼女はタータにちらりと目をやってから、レイルの耳に口許を寄せ、何かささやく。

タータは自然と微笑みが浮かぶのを感じた。静かに会釈をして、口を開く。

「初めまして、レイル＝エウリオン。私はタータ＝ロゼリー。王都で大陸の英雄達を研究している、学者です」

名乗る前から名前を呼ばれて、レイルはちょっと驚いたように頭を下げてきた。

レイルがアティアとともに家へ戻ると、玄関まで母親が出てきた。お客は居間にいるという。促されるように部屋へ入ると、窓の横に立っていた背の高い女性が自分の方を振り向いた。かすかに驚いたような表情を浮かべてから、それが微笑みに変わる。

「ね、綺麗な人でしょ」

すぐ後ろで、アティアがささやく。うなずきを返そうとした時、女性が頭を下げながら、自分の名前つきで挨拶をしてきた。

「お待たせして、済みませんでした」

レイルがわびると、タータは顔を上げて、やはり優しく微笑んだまま首を横に振った。

「いいえ。あなたに会いたくて、押しかけてきたのはこちらの方ですから」

あなたに会いたくてなんて、そのままの意味で言われてるんだったら舞い上がるころだろうな。妙に冷静な気分でそんなことを思う、レイル。

それでも、アティアに言われて川で汗だけでも洗い流してきて正解だったと、幼なじみの助言に感謝した。

続けるべき言葉が分からずにもう一度頭を下げただけのレイルと、楚々とした微笑を絶やさないうタータ。

「ほら、お前が座んなきゃタータさんがいつまでも立ってなきゃならないだろ」

動かない息子にしびれを切らした母親に軽く足を蹴られて、レイルは慌てていすに手をかけた。

「あの、なんだか済みません。タータさんもどうぞ」

気の利かない促し方の彼に、小さく笑って「ありがとうございます」と答えるタータ。二人が席に着くと、アティアは慣れた手つきでお茶を入れたポットをテーブルに置いた。

少女の方へ顔を向け、タータがわずかに会釈して笑みを深める。

それからテーブルに積んだ装丁本の一つを手にとって、膝の上に広げた。やりとりを交わしはじめた二人のテーブルを離れるアティア。

「それじゃあおばさん」

そのまま幼なじみの母親に歩み寄って、声をかける。

「わたし、一度家に戻りますね」

「いつもごめんね。レイルがあんなだから」

申し訳なさそうに目尻を下げて、そんな言葉を返してきた。あんなというのがどんななのか、何となく通じてしまう。クスリと笑って、アティアは部屋を出た。

そのまま幼なじみの家のドアを抜けたアティアは、その時ようやく、広場の方が妙に騒がしくなっているのに気がついた。

## ■コールドサイン隊長殿と広場

立派なひげを蓄えた勅使殿が、ザレソスの広場で勅書の入った箱を手に持ったまま、集まってきた人々を睥睨している。大人の胸ぐらいまでの高さがある台に乗っているのも、さぞかし眺めはいいだろう。

ザッツはその横で鞘に収めたままの剣を右足の前に立てかけ、柄じりを軽く手のひらで支えたまま面白くもなさそうな表情を浮かべていた。この後だいたいどこであっても起きることを、正直に言えばもう見飽きつつある。

責任の一端は、この町まで同道したあの美人の学者にある。一連の行動は、彼女がイーグリア国王に進言したことだった。

が、仮にそれがなかったとしても、似たようなことは早晚行われたに違いない。イーグリアと隣国ベヒランドの関係は日々険悪さを増し、祖国に尽くす兵士はいくらいても困らない。それが一騎当千の英雄と戦女神とやらだと来れば、国王の野心に火がつくのも無理はない。

「……ま、時代のせいってやつだな」

ザッツはそんな呟きをもらしながら、軽く頭をかいた。人垣の奥に、自分の部下に先導されて広場へ向かってくる町の指導者達の姿が見えた。

「勅使殿。そろそろ」

声をかけるザッツ。国王の代弁者としてこの町までやってきたひげの老人は鷹揚にうなずくと、箱から出した勅書を広げ、朗々と読み上げはじめた。

案の定、広場は見慣れた騒ぎに包まれていた。どうでもいいが、勅使はよくもあれだけ持って回った言い回しの文章を、一度も突っかからずに読めるものだ。ザッツは演台に詰め寄ろうとする人々を制している部下達を眺めやりながら、素朴な感想を抱いていた。

勅使が国王に代わって声に出している命令は、要約してしまえば次の二点。

一つ、隣国との戦に備えて十八歳から四十歳までの男子を徴兵する。この町の規模だと徴兵数は二〇〇人。二つ、この町にイーグリア国軍の精鋭を打ち負かす勇士がいるならば、彼が軍役に就くことでその他の者は徴兵を免れる。

言い回しが回りくどすぎるせいだとザッツは思っているのだが、二つ目の勅命を読んでいる頃に人々はようやく一つ目の勅命を理解する。で、この騒ぎになる。

暴力的に詰め寄ってくるのではなくて、働き手をそんなに連れて行かれては困るという嘆願だ。分かってはいても、ザッツ達は役目上、国王の代理人である勅使に手を触れさせるわけにはいかない。で、この押し合いへし合いになる。

勅使の方も慣れたもので、この頃では二つ目の勅命を声を張り上げてもう一度読むようになった。

二つ目の勅命の意味が聴衆に浸透してくると、騒ぎはずいぶん沈静化する。人々がお互いに顔を見合わせはじめ、自分の隣に腕自慢がないかを確認するのもいつものことだ。たいていここで、日焼けした逞しい二の腕の男性が何人か、人垣をかき分けて前に出てくる。

が、ここザレソスでは、前に出てきたのはとりあえず一人だけ。革で補強された丈夫な衣服の

上に赤い短衣を羽織った青年だった。

「恐れながら、精鋭というのは？」

前に出てきた彼が、勅使に向かって軽く膝を折り、頭を垂れながら尋ねる。街道筋とはいえ田舎町に分類していいようなザレススで、近場の町では見られなかったような礼節。

ザッツは少し感心しながら、鞆に収めたままの剣を手にとって、一步、前に出た。顔を上げた青年と目が合う。ザッツはニッと笑って見せた。

「……あなたが？」

「つるっぱげでヒゲの大男かと思ったか？」

少し意外そうな表情の青年に、腕組みをしながら言葉を返す。青年は無言で短衣を外しはじめた。

「武器は自前のものを使うのか」

「……お前が？」

思わず聞き返す、ザッツ。名士の息子が代表して口を開いただけなのかと思ったが、身支度を調べようとしているところを見ると、彼は自分を勇士だと認識しているらしい。集まった人々から驚きの声が出ないところを見ると、あながち間違ってもいないのか。

「日焼けした逞しい二の腕の大男かと思ったか？」

静かな声の青年。

「心読むな」

苦笑いを浮かべる、ザッツ。それから、部下に目で合図をして、試合用の模造刀を運ばせた。

「刃は入れてない。剣先も平たくしてある。使い心地はおかしいが、まあお互い我慢しようや」

軽口を叩きながら、青年が一振りずつ手にとって確かめている間、彼を見守る人々を手持ちぶさたに見渡すザッツ。「憧れの眼差しで見上げてくる女の子達を選び放題でしょう？」。タータの言葉が蘇った。思わず、部下の兵士達に制されて危険がないように後ろへ下がる人垣の中に、年頃の女性の姿を探してしまう。

が、

「……冗談じゃありませんよ、ロゼリー先生」

一渡り見回してみても、ザッツの口許に浮かんだのは苦笑いだけ。

彼に向けられた視線はどれも、敵意のあるものか、そうでなければ懇願するようなものばかりだった。

そりゃそうだ、と思う。ただでさえありがたくないお客なのは自覚しているし、何より、ここでザッツがわざと負けてやれば、この町は徴兵対象から外れる。

「あなたの剣は、それか？」

ぼんやりとよそ見をしているかのようなザッツに、青年が声をかけてくる。模造刀を選ぶ様子のない彼をいぶかしんだのだろう。

「どれでもいいぜ。選んでくれよ」

顔を横に向けたまま、答える。見えなくても、青年がむっとした気配は伝わってきた。

悪いな。そりゃ、楽しくねえだろうよ。心の中で呟くザッツ。「では、これを」の声とともに

青年が差し出してきた模造刀を一瞥して受け取った。

ようやく、顔を目の前の青年に戻す。彼がイーグリア国軍の精鋭のために選んだのは、ザッツ自身が手にしていたものと同じぐらいの長剣。

「……公平だな」

募った苛立ちを、そんな呟きでごまかしてみた。勅使が演台の上から、他にもこれぞと思う者がいれば呼んでくるようにと人々に告げている。

ザッツは模造刀を鞘から引き抜くと、青年に相對した。

「お前、この町の命運を背負ってるって、自覚あるんだろうな」

思わず口をついて出たその言葉に、青年がわずかにひるんだような様子を見せる。

ああ。と、ザッツは自分で自分の有様を声もなく嘆いた。――そう思ってるなら、負けてやれよ。

部下が、致命傷を負わせたと判断した時点で勝者とする青年に説明している。神妙な表情でうなづく青年。

ザッツの目が、向き直った彼と合った。「始め」の声がかかる。

刹那、ザッツの一刀が青年のわき腹を深く捉えた。

踏み込みも一閃も、全てが目にとまらないほどの速さ。青年自身はもとより、集まった人々も審判役の部下でさえも何が起こったのか分からないような迅雷の一撃は、ただ打ち抜いた姿勢のまま動きを止めたザッツの姿によってだけ、それが存在したことを知らしめていた。

膝を折って崩れ落ちる青年の姿に、人垣からようやく悲鳴がもれた。

「目が覚めたか？」

わき腹を押さえて土を噛む青年を見下ろしながら、ザッツ。周りのざわめきに敵意の色が濃くなるのが分かった。

「まだ立てるなら、もう一回チャンスをやる。頭冷やして戦い方を考えろ」

涙の浮かぶ目で自分を見上げる青年の前に、模造刀を投げる。ただ、浅い呼吸を繰り返している彼がもう一度立って戦えるほど回復するのか、確信はなかった。

町の命運を背負って立ち向かってきた相手のその様子と、周囲から自分に浴びせられる非難の視線とに、やれやれ。と、ザッツは再度、頭をかいた。

ロゼリー先生。どうやら俺は英雄になれるタイプじゃないですよ。

## ■再びレイルの家

---

「レイル、レイルー！」

少し前に出て行ったと思った幼なじみが、今度は大声で自分を呼びながら家に飛び込んできた。何事かと、戸口に顔を向ける。息せき切ったアティアが、扉のない柵木の向こうから部屋へ駆け込んでくる。

向かいに座ったタータも驚いたように形のいい目を見開いて、彼女の姿を見つめていた。

「……どうしたの？」

両手を膝に当てて息を整えているアティアに、いぶかしさから問いかけるレイル。戸口の奥から、母親もこっちを見ていた。

「レイル、今すぐ、広場に行こう」

顔を伏せたまま切れ切れに、そう告げてくる幼なじみの少女。

「……何しに？」

そもそもアティアが呼びに来たから日課の訓練を中断して家に戻ってきたのだ。なのに、その目的だったタータさんとの話が始まって大して経たないうちに、今度は広場へ行こうと来た。いつもはつらつとした幼なじみがどうかしてしまったのではないかと少し不安に思いながら問い返したレイルに、彼女はぱっと頭を上げて、指を突きつけてきた。

「英雄に、なるの！」

汗のせいだけではない、輝くような笑顔とともに。

「……ゴメン、話が全然見えない」

アティアの言葉に、深まるレイルの困惑。それを補ったのは、タータだった。

「徴兵免除のための試合ですね」

レイルの母親が持ってきた水を一息に飲み干す少女に、王都の学者が沈んだ声で問いかける。はしたなく手の甲で口元の水滴を拭いながら、アティアは忙しなくうなずいた。

「どういうことですか？」

タータの方に向き直って、レイル。彼女は少し困ったように視線をうつむけていてから、やがて意を決したようにまっすぐに顔を上げ、

「緊迫化する隣国ベヒランドとの情勢に備えて、今イーグリア各地で徴兵を行っているのですが……私が陛下に進言したのです。」

徴兵と英雄探索を合わせて行うようにと」

答えた。

「徴兵だと、働き手の男の人が二〇〇人ぐらい連れてかれちゃうの。でもすごく強い人が町にいれば、その人が王都に行くだけで済むんだって！」

コップを母親に返すなり、幼なじみが飛びつくようにして両肩を掴んでくる。アティアが何を考えているのかようやく理解して、レイルは今まで以上に面食らった。

「ちょっと、待って。僕が王都に行けばいいって言ってる？」

念のため、尋ねる。アティアは満面の笑みでうなずいた。

「……すごく強いかどうかの判断は、誰がするのさ」

「イーグリア国軍の部隊長と試合をして、勝つことができれば、です」

代わりに答えたのはタータ。レイルは再度彼女に顔を向けると、重ねて聞いた。

「強いんですか？」

「私は、剣術のことは分からないので……でも、国軍の中でも期待のかかる精鋭と聞いています」

そう言ってからザッツのことが思い浮び、「それに、とても気さくで誠実な人ですよ」と、とっさに付け加える。

「自警団長も鍛冶屋の親方も、一瞬でやられちゃったよ！」

片や誰もが町いちばんの英雄として認めていて、片や誰もが町いちばんの力持ちとして認めている二人だ。どうしてそういう絶望的な情報をこんなに嬉しそうに話せるのか、レイルは幼なじみの思考を軽く疑った。

「アティア、冷静になろう。自警団長も勝てない、鍛冶屋の親方も勝てない、そういう相手に僕が勝てるわけないだろう？」

「勝てるよ。レイルは勝てる」

努めて静かに言い聞かせようとするレイルに、だが、アティアは熱を帯びた視線を据えたまま、短く言い放った。

「わたしはレイルがどれだけ鍛えてるか知ってるもの。わたしは、レイルを信じてる」

「……自警団長だって訓練してるよ」

「あの人は山の中なんて走らない。丸太がぼろぼろになるまで打ち込んだりしない。鍛冶屋の親方は、弟子が押さえてる鉄のかたまりを叩いてるだけだよ」

「……それでも、二人とも一瞬でやられちゃったんだろ？」

「スイフィード先生だって、あの二人ならまとめて一瞬だよ」

「そりゃ、先生はそうだろうけどさ」

なおも言いつのろうとする彼の肩を掴む手に力を込め、煮え切らないその目の奥をのぞき込もうとするかのように、アティアがぐっと顔を近づけてきた。

「アティア」

「ね、レイル。スイフィード先生に追いつくんでしょう？ 強くなることは相手を倒せるようになることだけじゃないって、先生は言ってたんだよね？」

まっすぐな眼差しが、自分の奥底にあるせせこましい言い訳根性を刺し貫いたかのような気がした。幼なじみのハシバミ色の瞳と、先生の飄々とした笑みとが重なる。

あの頃、いつも見上げていた人の背中と笑顔。「おう、レイル」と呼びかけてくれた声とともに、

「……必要としてくれる人に応えられること。それが強いってことだ……って」

スイフィードの言葉が、レイルの中に蘇った。アティアの目が、喜びでかすかに潤む。

「ザレススは、今、レイルを必要としているよ」

少しかすれたような幼なじみの声。一瞬、視線を落としてから——レイルは顔を上げて、小さく、だがはっきりとうなずいた。



「行こう。広場？」

アティアを促して、いすを立つ。身体の芯に、炉から引き上げられた鍛鉄のような熱が宿っているのを感じた。

「レイル君」

部屋を出ようとする彼に、タータが声をかけてきた。いすから半分腰を浮かせ、片手がわずかにレイルの方へ伸ばされている。

足を止めて振り返った彼に、タータは少し言葉を探しているから、

「……ごめんなさい」

目を伏せるようにして、そう口にした。

「どうしてタータさんが謝るんですか？」

「……私が陛下に進言しなければ、この町に徴兵が来ることはなかったかも知れません」

自分で紡ぐ言葉が、心苦しさを倍加させる。が、レイルは首を横に振って答えた。

「徴兵が来るのは、別に今度が初めてではありません。いつかはまた来ただろうし、それはタータさんのせいじゃない。

それに――」

幼なじみに促されて、部屋の外へと歩みを進めるレイル。

「――僕は、必要とされる場所に行くだけです。それだって、タータさんとは関係がない」

タータには言葉がなかった。二人が部屋から姿を消し、玄関の扉が開け閉めされる音が続く。

彼の肩に触れることのなかった手が、支えを失ったようにテーブルへ落とされる。レイルの母親が、湯気の立つ新しいポットと一緒に近づいてきた。

「あれも、スイフィードの受け売り」

うつむいていすに腰を戻すタータに、そんな言葉をかけてくる。そして、美貌の学者が親とはぐれた子供のような表情で顔を上げたのを見て取ってから、

「必要とされる場所へ行くだけって。あの居候が、町を出た時に残した言葉と、おんなじ。

どこを真似されたって困りもんだけど、やっかいなところにばかり憧れるんだね、あのぐらいの子は」

やれやれというような笑みを浮かべた。

「私のせいで、レイル君は怪我をするかも知れません……」

カップに注がれたお茶を見つめながら、呟くタータ。

「ま、死ななきゃ生きて帰ってくるよ。信じて待とうか」

強がる風でもなく、母親はさっきまで息子が座っていたいすに腰を下ろしてそう言った。

## ■リユーネ＝ティアシールと広場

---

食堂の女主人は一通りの料理をリユーネの前に並べると、エプロンを取って自分も彼女の前の  
いすに腰を下ろした。座面からはみ出しそうなお尻の重さに、いすが悲鳴のような音をさせる。

こんなになくともよかったんだけど、と思いながら、「ありがとう」と言って最初の皿に手を  
付けるリユーネ。温かな食事は、人間に言わせればおいしい部類に入るのだろう。

一品目を平らげてから、思い起こして腰の巾着から銅貨を十枚取り出した。

「足りる？」

リユーネの知識では、この量と質の料理だったら相場の額のはずだ。女主人はにっこりと笑っ  
てうなずいた。

女主人に相づちを打つためと出してもらった料理を自分の中に収めるために口を動かしている  
ことしばし。料理に手を付け始めた頃からざわめいていた店の外が、本格的に騒々しくなった。

「なんの騒ぎだろうね。ああ、リユーネはいいよ。食べといで。あたしが見てくるから」

娘にでも話しているかのような口調でそう言って、店の外へ出て行く女主人。口にもものを詰め  
たまま、リユーネがうなずく。

外から聞こえてくる騒がしさはやがて小さく低くなり、また高くなったかと思うと、一転、今  
度は水を打ったように静まりかえってしまった。

「？」

食堂の扉の方へ顔を向けたまま、かすかに首をかしげて、もぐもぐと口を動かし続けるリュ  
ーネ。

程なくして、女主人がドアの向こうから姿を現した。

「あら大変だ。あら大変だ」

顔を紅潮させてそう繰り返す彼女には、さっきまではわずかばかりでもあったはずの落ち着  
きが、今は完全にはない。

「どうしたの？」

フォークを握ったままで問いかける。

「徴兵だよ。隣国との戦争に備えるんだと。嫌だねえ、お客が減っちゃうじゃないか」

うろうろと店の中を歩き回りながらそう答える女主人の目が、リユーネの立てかけた槍のとこ  
ろで止まった。しばらくそのままじっと見つめていてから、

「あらやだ、忘れとくれ。いくら拵えが立派でも、女の子じゃ試合に勝てやしないやね」

リユーネはなにも言っていないのに、首を横に振ってそう続ける。

彼女の言葉で、傍らの槍に目をやるリユーネ。自分の中に、じんわりと熱い何かが脈付き始め  
ているのを感じた。フォークを置き、いすを立った。ロングボウを肩にかけ、槍を手取る。

女主人が何を言っているのかはよく分からない。だが、リユーネの中の何かが、今外に出てみ  
るべきだと告げているような気がした。

「ごちそうさま」

リユーネはそれだけ告げると、フードをかぶって食堂のドアを抜けた。

食堂の入り口は短い階段になっていて、周りよりも少し高い。だから華奢なリューネでも、人垣の向こうで起こっていることが見て取れた。

鍛冶屋が使う大槌を振り回す、大人の太ももほどもある腕の男性と、衣服の上からでも引き締まった筋肉が伺えるような身のこなしの青年とが戦っている。

「うん。試合ってこれか」

確かめるように、小声で呟くリューネ。試合の勝敗は、一瞬でついた。大槌の男性が青年にしたたかに打ち据えられ、人垣から嘆きの声がもれる。

何の目的で行われているのかは分からないが、とにかく、あの青年が負けた方がみんなは嬉しいらしい。

後ろで扉の音がしてリューネは振り返った。食堂の女主人が出てきて、彼女の隣に立った。眉をひそめながら、解説が始まる。要約すれば、この町の誰かがイーグリア国軍の精鋭に勝てれば万事丸く収まるということらしい。

「今負けたのは鍛冶屋の親父だね。自警団長も負けちゃったから、もう後は……」

女主人はそう言って、リューネを見た。可憐な少女戦士が流麗な美技で勝利をもたらす、とかいう場面を想像しているのかも知れない。

「自警団長って、あそこにいる人？」

リューネはその言葉を聞き流して、人垣で囲まれた試合場の隅で、数人に手当てされながら顔をしかめている青年を指した。女主人がうなずく。

「強い？」

「町いちばんだったけどね」

「町いちばんか」

口の中で繰り返してから、リューネはフードの奥で目を閉じた。意識を研ぎ澄ませ、自警団長と呼ばれた青年に精神を寄り添わせる。ゆっくりと目を開いた。自警団長が、人垣の向こう、不思議そうな顔で立ち上がるのが見えた。痛みが消え、身体に力がみなぎっているのがなぜなのか分からないのだろう。

「……彼、なのかな？」

リューネはその姿を見守りながら、問いかけるようにささやいた。

自警団長が歩みを進め、試合場になっている広場中央に立つ。一度は勝ったはずのイーグリア国軍精鋭とやらが、驚いたような顔で彼を見た。「お前、大丈夫なのか」とか、そんなことを言っているのだろう唇の動き。

自警団長は足下の箱から短剣を二振り選び出して、一つを相手に放った。精鋭の青年が、唇を引き締めるのが見えた。短剣の鞘を払い、具合を確かめるように腕を振る自警団長。

身体が軽いでしょう？ 力がわき上がるでしょう？ 相手の動きが、水の中にいるみたいにゆっくり見えるでしょう？

離れた位置から、心の中で語りかけるリューネ。人垣も期待の声でざわめいている。

自警団長と精鋭の二戦目が始まった。先ほどまでとは別人のような自警団長の動きに、精鋭は

面食らったかのように防戦に回る。周囲のざわめきは、歓声のどよめきが変わった。

が。精鋭が押されていた時間は長くはなかった。速く力強くても単調な攻めに、精鋭はすぐさま動きを見きると、鮮やかに反撃を繰り出して来る。自警団長は得物を握る右手首を痛打され、短剣をはじき飛ばされ、膝元を打たれて片膝をついたところを首筋へびたりと刃を突きつけられて、万事休した。

完膚無きまでのやられように、うなだれる自警団長。人垣からもれるうめき声。リューネもフードの奥でため息をついた。

やっぱり違ったみたい。また探し直しかな。声にはせずに、そう呟く。

「他は？ いないのか」

短剣を鞘に戻しながらの精鋭の声に、沈黙する人垣。彼が周囲を見渡しても、目を合わせようとする者はない。

リューネの中にあつた脈付くような何かも、今はもうなくなっていた。

もう一度、今度は天を仰いでため息をつき、きびすを返してその場を離れようとしたその時。

彼女の耳朶を、

「いるよ！ まだ一人いる！

連れてくるから、その人逃がしちゃダメだからね！」

高く澄んだ少女の声が打った。

声の主は、栗色の髪の子供だった。言い放って駆けだしていった本人以外の誰もが、あっけにとられた顔でその後ろ姿を見送る。

いちばん驚いたのは精鋭の青年だろう。一度ならずも完勝しながら、なぜ逃げ出す想定で物を言われなければならないのか。

「今負けた人が町いちばんだったんだよね？」

女主人を振り返って、リューネ。うなずきが返ってくる。

「……じゃあ、あの子は誰を連れてくるつもり？」

今度は首を横に振る、女主人。

「アティア……あの子、スウィードが戻ってきたとでもいうのかね」

信じられないというような彼女の言葉に、リューネは小首をかしげた。

どうやら、誰も期待していないか、ここにいることがとうてい期待できないかのどちらかの人物がやってくるらしい。少し迷ってから、リューネはもうしばらくことの成り行きを見守ることにした。

どうせ急ぐ旅ではないし、目的地が分かっているわけでもないのだから。

## ■みんなと広場 1

---

レイルは、アティアとともに広場へ足を踏み入れた時、ちょっと今まで記憶にない体験をすることになった。

広場を埋め尽くすような人々がみんなこっちを見ていて、現れたのがレイルだと分かったとたんに、なんだか失礼なぐらいがっかりしたため息をつく。それが広場中に伝播して行って、恨み節のどよめきが起きているようだった。

「……アティア。なんだか僕、ザレススに必要とされていないんじゃない？」

予想とはずいぶん違う反応に気圧された感のあるレイルだが、幼なじみは意にも介さなかった。

「必要とされてるよ。期待されてないだけで」

「……ひどいな、それ」

ややげんなりする、レイル。それでもアティアは彼の手を取ると、

「わたしもおばさんも、レイルを信じてる。期待してる。だから、頑張ってる」

その手をしっかりと握って、まっすぐな眼差しを向けてきた。

「……うん」

うなずきを返す。幼なじみの手を離し、人垣の中へ割って入るレイル。見知った顔の幾人かが、「大丈夫なの？」「無茶しないで」と声をかけてくれた。「頼んだぞ」とかいう力強い言葉がないのがさみしいが、それでも労られているのは嬉しい。

人垣の奥、試合場になった広場中央では、うちひしがれた表情と肉体の自警団長が立ち尽くしていた。

「団長……」

レイルも自警団の仕事を手伝ったことがある。団長はいつも落ち着いて的確な指示を出す優れた指導者だと、今でも思っていた。

自警団長は彼に視線を投げ、首を横に振った。

「無理だよ、レイル。模造刀だって鉄のかたまりなんだ。勝てないだけじゃなくて、怪我をする……」

心配してくれる団長の、腫れ上がった右手が痛々しい。負ければ自分もあんな風になるのかと思うと、胃を絞られるような気分になった。

できればやりたくはない。でも、やらなければならない。

「おい、まさかこんな少年に戦わせるのか？」

人垣から出てきたレイルを見て、イーグリア国軍の精鋭だという青年が、周りを見渡ししながら声を上げた。

「他にいないのかよ！」

その声は、怒りに震えていた。

この人だって、悪人なのでも非情なのでもない。役目があって、ここにいる。そう分かっただけで、レイルはずっと気が楽になった。

「大丈夫です」

自分よりも頭一つ背が高く、五歳以上年上だと思えるその青年へしゃんと顔を向け、  
「僕が自分で選んでここに来たんです。戦えます」

レイルははっきりと告げた。

ザッツはその、少年と青年の端境にある凜とした姿と言葉に、それ以上何か言う必要がないことを悟った。思わず、昔の自分に果たして同じことが出来たかどうかと考えて、尊敬の念さえ湧いてくる。

「……使う模造刀を選んでくれ。一応短いのもあるが、やっぱり重い――」

「軽いですね」

気を利かせたつもりでのザッツの言葉が終わらないうちに、模造刀の一本を手にしたレイルが呟いた。それが強がりでないことは、抜き放った長剣を数回振ってみたその動きから見て取れる。刀身だけで彼が両腕を広げたよりも長い剣を振っても、身体の軸がぶれない。刀身は氷の上を滑るようになめらかに宙を動き、ぴたりと止まる。

こりゃあ、と、ザッツは思った。

本当に本命が出てきたのかも知れないぞ。

## ■みんなと広場 2

レイルは自分用に、三振りあった長剣の模造刀のうちいちばん短いものを選び出した。普段鍛錬に使っている剣よりも軽いが、長さが同じぐらいなので感覚が掴みやすい。

「僕はこれにします。けど、先に選んでしまってよかったんですか？」

少し申し訳ないような気がして、腕組みのままこちらを見ているザッツに問いかける。が、彼はどこか楽しそうな笑みを目と口元に浮かべて、

「お前が最初に掴んだ長剣にしようとした。ひやっとしたけど、結果オーライだな」

そう、答えてくる。最初に掴んだのは、いちばん長い模造刀だ。レイルが選んだものとは拳四つ分ほど違う。

レイルは彼の言う模造刀を取って、手渡した。鞘払いながら、ザッツが口を開く。

「名前聞いといていいか？」

「レイル＝エウリオンです」

「そうか。レイル。いい響きだ。

俺はザッツ＝コールトダイナ」

「よろしく申し上げます……で、いいんですかね。こういう場合」

自分も模造刀を鞘から放って、答えるレイル。なんとなく、この人の名前を聞いたことが嬉しかった。生命のやりとりではないにしても、これから町の命運をかけて打ち合おうというのに、なんだか変な気分だ。

対するザッツも人好きのする苦笑いを浮かべていた。

「いいんじゃないかと思うが、負けたら町があんまり面白くないことになるのは忘れるなよ」

はい。と、表情を引き締めて神妙にうなづくレイル。

「よし。じゃ、始めるか」

ザッツが審判役の部下に目で合図をする。一呼吸置いて、「始め」の声がかかる。その瞬間、雷のような速度で打ち出されるザッツの一撃。

アティア以外、その場の誰もが少年のうずくまる姿を幻視した。見守る人々に真実を告げたのは、響き渡った透き通る金属音。

自警団長さえも一瞬で跪かせたその斬撃を、レイルの剣はしっかりと受け止めていた。

見える。レイルは最初の一撃を食い止めて、まずはそう実感した。ザッツが驚いたような表情を浮かべたのも分かった。見えるし反応できる。イーグリア国軍期待の精鋭に、僕はついて行けている。

が、しかし、速さでは互角に渡り合えても、力と技ではザッツの方が上だった。矢継ぎ早に繰り出される攻撃に、防戦一方のレイル。防ぐ方にはほとんど不安がなかったが、いかんせん反撃に出る糸口がつかめない。相手の長剣が自分に届く前に、その剣筋へ守りの一刀を先回りさせることはできる。それでも、重く鋭い斬撃は防御の上からでさえレイルの重心を揺さぶり、次の動きに移るまでの時間を半呼吸のさらに半分ほども遅らせる。それが決定的な差になり、常にレイルよりもザッツの方が先に動く。

丸太を相手にしていればいだけなら、あるいはそうでなくても自分一人の戦いなら、意を決して相手の懐に飛び込んでしまうのもありかも知れない。でも、この戦いは違う。負ければ町から働き手の男性がいなくなる。一か八かで無茶をすることはできなかった。

ザッツの顔から目をそらさないように必死でついて行きながら、どこかに剣先を飛び込ませる隙がないかを探し続ける。

と。じわりと胸に広がった焦燥を吹き消すかのように。

レイルの中を、水晶の鐘を思わせる清冽な音が響き渡った。

リューネは件の少女が連れてきた人物を見て、正直少しがっかりした。体格を見る限り、あっという間に一敗地にまみれた二人にさえ勝っている部分はない。

対戦相手の青年に比べれば頭一つ小さく、年齢では五歳は下。身のこなしは機敏に見えたが、言ってしまうえば、勇敢かも知れないが力と経験で及ぶところのない少年という印象だ。

隣で、食堂の女主人も大きなため息をついている。

「彼……じゃ、ないよねえ」

自分自身に問いかけるような、リューネの呟き。身の裡の熱みを帯びた脈動は、かすかに感じ取れるかどうかという水準。

待つだけ無駄だったかも。携えた槍へ少しもたれるように足を崩して、リューネは短く息をついた。

試合が始まる。繰り出される斬撃。防戦に追い込まれる少年。一瞬深くなったリューネの諦めを、だが、二人の剣が揮われるごとに、違う感情が急速に押し流していった。

少年は戦えている。確かに力と経験は足りていない。それなのに相手から目をそらすことなく攻撃を食い止め続け、時には反撃しようという兆しさえ窺わせる。

見守るうち、天啓のような確信がリューネを打った。彼に今足りていないものさえ補ってあげられるなら、彼は、この戦いに勝てる。

リューネの中の脈動が光を帯びた。槍を身体の前に立て、祈りを捧げるようにして目を閉じる。少年に意識を寄せると、彼が操る剣先の軌跡が、暗闇の中の夜光虫のように輝いて見えた。

目を開く。フードの奥から試合場を見る。状況は、一変していた。

何が起こったのか、ザッツには分からなかった。自警団長の時にも感じた、相手が急に腕を上げてきた感覚。それが不意に、目の前のレイルからも湧き立った。

が、そのレベルが全く違う。腕を上げたとか別人になったようだとか、そんな水準ではない。別世界の人間になってしまったかのようだ。

防御の確かさはそのままに、愚直に受けるだけだった剣筋が流されるようになった。あるいは早すぎ、あるいは深すぎるポイントへザッツの剣が運ばれてしまう。そのあしらいの完璧さは、手にした剣がレイル自身の腕になって、思いのままにザッツの切っ先を掴んでしまうかのようだ。それは何でもないことのように見えて、ザッツの重心を揺さぶり、自分一人だけが荒れ狂う大嵐の中で剣を揮わなくてははいけないような疲労感をもたらすものだった。



織り交ぜられる反撃もぞっとするような正確さで急所へ滑り込んでくる。体格差と武器の差でかろうじて躲しているが、その余地は一撃ごとに削られていく。

そして、レイルの瞳。素直なまでにひたりとザッツを見据え続けるその眼差しに、今は透徹した光さえ宿っていた。

受けが流しになり、焦りを感じるいとまさえないまま機先を制されるようになる。動くより先に剣先や刀身やつば元がレイルの剣にふさがれ、動こうと思うよりも先に足運びが止められる。

冷や汗をかくことさえ許されないような差を感じながら、ロゼリー先生。これは――と、我ながらこんな時にも、綺麗な学者先生の微笑みが浮かんだ。

――大当たりなのかも、知れませんか？

どうなっているのか分からないということでは、レイルも同じだった。

水晶の鐘のような音が響いたと思ったとたん、まるでそれが何かの合図だったかのように、身体が軽くなった。余計な力が抜け、いつの間にか熱くなっていた頭の中も冷静になった。

ついて行けるというレベルだったザッツの動きが、急にゆっくりになったように思えた。彼の目や身体のわずかな動きから、次に、あるいはさらにその次に、彼がどう動こうとしているのかが感じ取れる。

自分自身の変化に戸惑って、確かめるように様子を見ながらの攻め手を幾度か繰り返し、やがてレイルは確信した。

今なら、決着を付けられる。

レイルの変化を感じ取ったのだろう、ザッツの攻めも変わっていた。大振りを避け、距離を半歩広く取りながらコンパクトに攻撃を組み立ててくる。体格と刀身の差が生む、腕一本分ぐらいの距離。これを埋めなければ、自分の剣は相手に届かない。

飛び込む、か？ ザッツの突きを片足を半歩後ろへ引いて躲しながら、レイルは考えた。今ならできるような気がする。引いた足は残したまま、突いた腕をザッツが戻すのに合わせて大きく踏み込み、腰を思い切り落として胴へ一撃。

頭の中に浮かべたイメージそのままに、身体が動いた。後ろ足でしっかりと広場の石畳を蹴り、身体を前に押し出す。前に出した足をザッツの内懐近くに突き、腰だめに構えた剣を一閃――しようとした瞬間、ザッツの身体が自分の上に覆い被さってきた。

たまらず、バランスを崩す。倒れ込むような姿勢のまま、それでも顔をこちらへ向けて下から上へ剣を払い上げるザッツ。刀身の軌道を先になぞるように、レイルはその一撃を、後足を大きく背後へ蹴り上げるようにして体をひねって躲した。

高いところから飛び降りた猫を思わせる敏捷さで地に足を付けるレイルと、ほとんど這いつくばった姿勢から筋力だけで跳び退るザッツ。人垣からもれる声は、確かに希望に満ちたものになりつつあった。

うへえ。俺かっこ悪。

再び距離を取って剣先を向けながら、ザッツは心の中で舌を出した。

絶体絶命の危地は、体格差だけに物をいわせた捨て身の体当たりでつぶしにかかって、どうに

か脱することに成功。が、そのあとの奇襲は空振り。今もう一度こうやって長剣を構えて対峙し直す猶予が持てたのは、レイルがすぐさま追撃に移らなかったからに過ぎない。

ザッツはもう、はっきりと認める気持ちになっていた。

目の前の少年は、自分よりもはるかに強い。戦い方が素直すぎるからまだしのげているが、そこを鍛えれば自分よりもずっと先まで行くことのできる存在だ。

それをはっきりさせようと、ザッツは思った。たぶんレイル自身も信じ切っていない彼の力を証明させてやろう、と。

深く息を吸い、吐く。小細工はなし。奇襲もなし。全力で打ち込むこの一刀の後に、きっとこの広場に真実が現れている。

「おいよ、レイル」

つい、声をかけていた。

「お前はすごいやつだ」

怪訝そうに、少年の眉が動く。ザッツの口元に裏表のない笑みが浮かんだ。

ザッツの踏み込み。石畳が鳴るほどの力強さで、レイルとの距離を詰める。獲物へ迫る隼もかくやというほどのその速度に乗って、斬撃が走る。平たくつぶしてある切っ先が高い笛のような音を立てる鋭さの一撃。

その乾坤一擲の一刀にさえ、レイルは反応した。構えた長剣を跳ね上げて頭上からの斬撃を受け流す。切っ先を右下へ傾け、ザッツの体重をそちらへ導く。重心の抜けた刃の下、滑らせるように刀身を引き抜きながら半歩踏み込む。前に出した足は、体の流れたザッツの外側へ。抜ききった長剣を、空中で鋭い円弧を描いて切り戻す。狙いは自分の前足に近い、ザッツの右膝。刀身が彼の身体を捉える。柄を握るレイルの手に、ドッと鈍い感触が伝わった。動きは止めない。剣を振り抜き、足下から上へ、体を回しながら振り上げる。見えない螺旋階段を駆け上るように、レイルの切っ先が伸びやかに頭上へと走る。足を打たれたザッツが、石畳に片膝をついた。レイルはもう一歩足を前に出し、身体の軸を固定した。今や、高さを失ったザッツの背中が目下にある。レイルは円運動で蓄えたばねを刀身に乘せ、解き放った。

どうにか振り向こうとするザッツ。しかし、間に合うものではない。

それはまるで、一振りの剣が一条の閃光に変わったかのように。

最初の一合で散った火花が石畳に落ちきらないほどの間に、全ての勝負は決していた。

レイルは立ち、ザッツは石畳に膝をつき、勝者の切っ先は、敗者の首筋にぴたりと添えて止められていた。

突きつけられた刀身の向こうで、レイルが、彼自身がいちばん驚いたような表情でこっちを見ていた。

「……僕の勝ちですか？」

姿勢を解かないまま、そのくせどうも自信がなさそうに、小声で聞いてくるレイル。その様子に、ザッツは膝立ちになったまま、思わず笑い声を上げた。

「おいよ、レイル。お前はすごいやつだ」

繰り返されたその言葉。勝者になったことを確かめた少年は、ようやく重責から解放されたように、ほっと息をつきながら剣をおろした。

周囲を歓声が包む。ザッツは衣服の埃を払って立ち上がった。部下達の複雑な表情が見えたが、気にはならなかった。探索は成功。任務達成の喜びの方が大きかった。

## ■決着

「レイルー！」

人垣の中から飛び出してきたアティアが、力の抜けた幼なじみの背中に、喜びに任せたタックルを仕掛けた。よろめくレイル。ザッツは成り行きで二人分を受け止める形になった。

小声で謝りながら慌てて身体を起こすレイルの表情は兄を前にした弟のようで、思わずその髪をくしゃくしゃとなでるザッツ。

それから、背中にしがみついたままの少女の方に目を移した時。彼は少し意外な感を抱かずにいられなかった。

うん、まあ、かわいい方ではある。飾り気も何もないが、それでこのぐらいなら、誇っていい水準だろう。が、英雄の隣で歴史に名を残す戦女神としては、ちょっと神々しさとか神秘的な空気とかに欠けてやしないか？

困ったような顔で肩を抱くレイルにすがりつき、笑いながら泣きじゃくっているアティアに、ザッツはどうにもタータから聞かされた戦女神の姿とは重ねにくいものを感じていた。

リューネは勝敗が決した瞬間を見届けると、レイルに集中していた意識をふっとゆるめた。効果のほどが自警団長の時とは比較にならなかったことを、もう一度頭の中で確かめてみる。

……うん。確信はないけど、たぶん、大丈夫。

それから、大はしゃぎしながら手を叩いている女主人を尻目に、槍を手にしたまま階段を下りて人垣の方へ歩みを進めた。

「ごめんなさい。ちょっと通して」

意外な英雄の出現にお祭り騒ぎの人々をかき分けて、広場中央へ向かう。力添えをした少年、レイルがいる方へと。

最後の方は槍の柄で人を押しのけるようにして、ようやく広場の真ん中に出ることができた。紐で止めていなかったフードはすでに外れ、マントも鎧の後ろの方までめくれてしまっている。白銀の髪も、白い肌も、女性的なカーブを描く青い鎧も紅玉色の瞳が輝く人並み外れて端正な顔立ちも、全てがあらわになっていたが、リューネは気にも留めなかった。

ただレイルの方へまっすぐに歩み寄ると、幼なじみを支えたまま彼女が繰り返すねぎらいといったわりと喜びの言葉に「うんうん」とうなずき返している彼をじっと見つめる。少しの間そうしてから、最後の数歩を詰め、その横に立った。

レイルが顔を向けてくる。その向こうに、間抜けなほど目を見開いたザッツの顔も見える。アティアだけが自分の出現に気づいていない。

リューネは視線をレイルから外して、その胸元の少女に向けると、

「ねえ。ちょっといい？」

場違いなほど淡々とした声をかけた。

ようやく、アティアがリューネの存在を認識して顔を上げてきた。それを見て、

「これ、持ってて」

携えていた槍を当たり前のように軽く彼女に預ける。

「え、ちょっとま、うわっ。 なにっ！ これっ！ 重っ!？」

とっさに受け取ってしまったアティアは、手に取るなりずっしりとのしかかってきた重量に二・三步よろめき、悲鳴を上げた。自分よりも細いぐらいの女の子が軽々と持っていた代物には思えない。落とさないように支えるので精一杯だった。

「アティア？」

手を貸そうと歩み寄りかけたレイルの肩を、リューネが掴む。「え？」と振り返ってくるレイル。

リューネはそのまま、自分よりほんの少し上にある彼の顔をじっとのぞき込んだ。目をそらさないままのレイルと、まっすぐな視線がお互いの眼差しの奥を見つめ合う。

「あなたが、運命の英雄なの？」

問いかける、リューネの言葉。

「……え？」

怪訝さの響く、レイルの声。

「……名前」

「は？」

「あなたの名前」

「あ……レイル＝エウリオン」

今日はやけに人に名乗る日だ、と思いながら、答えるレイル。リューネはじっと彼の目を見つめたまま、片手を胸に当て、自分の名前を告げた。

「リューネ＝ティアシール」

「……うん……」

他に反応の返しようがなく、うなづくレイル。

と、不意にレイルは首筋を掴まれて、ぐいっと後ろに引きずられた。リューネはそれを軽く視線で追っただけで、特に引き戻そうとはしなかった。

レイルを引っ張ったのは、ザッツだった。リューネとアティアから少し離れた場所で引きずった身体をぐるりと回され、彼の顔が目の前に来た。笑いながら怒っている。

「おい、レイル」

「……はい、コールトダイクさん」

「ザッツでいい。だが二股はいかん」

そう来ましたか。

「片方は幼なじみで、片方は会ったこともない子です」

「なら、最初に抱きついてきた方が戦女神か」

何のことでしょう。困惑するレイル。王都では幼なじみのことを戦女神って呼ぶんですか？

「……なんですか？」

困り果てたような表情で問い返したレイルに、ザッツも少し表情を和らげた。それでも疑念の拭いきれない目でじっとレイルを見つめていてから、

「……確認したいんだが。戦女神の加護があるから試合に臨んだんだろ？」

そう、問いかけてくる。

聞いたザッツにも迷いがあるようだったが、問われたレイルの方でも、何を言われているのかわからなかった。答えるべき言葉が分からず、黙ったままのレイル。

その様子によろやく事実を悟って、ザッツは呆れ半分に頭をかいた。

試合の途中から明らかに質の変わったレイルの動きを見て、直感的に戦女神の加護を得たのだと思った。同時に、戦女神がついていればこそ、あんなに果敢な行動がとれたのだろうとも。

ところが、この目の前の少年は、前半戦の実力が全てだったのだ。少なくとも最初から戦女神の加護を受けていたわけではないし、受けられると思っていたわけでもない。戦女神の加護があったことは間違いないだろうが、この様子だと、彼自身はそのことにさえ気づいていない。

それでも一歩も退かなかったというのは、

「勇敢かバカかっていったら、気高いバカだな、レイルは」

「……気高いバカって、ほめられたのかけなされたのか分かりません」

「ほめたんだよ。バカは直せるが、気高さを身につけるのは難しい」

さらりと答えて、ザッツはまたレイルの頭に軽く手を乗せた。

「ありがとう。もういいよ」

リューネは槍を支えて唸っているアティアに近づくと、そう言って彼女から自分の槍を受け取った。リューネが手を触れるなり、のしかかっていた重量がふっと軽くなるのを感じるアティア。

「……そんな重いもの、片手で持ててすごいね」

肩で息をつきながら、アティアは感嘆の眼差しを白銀の髪の少女に向けた。

歳は自分と同じか少し下ぐらい。ほっそりした身体で、背の高さはたぶん自分と同じ。腕なんて間違いなくわたしより細いだろう。

そんな体格なのに軽々と槍を携える彼女の姿は、アティアにとっては驚異的だった。が、当の少女は「そう」と素っ気なく答えただけだった。

リューネは槍を預けた少女にそれ以上何も言葉を返さないまま、レイルの方へと歩み寄る。国軍精鋭の青年との話は終わったようだった。青年の方は後ろを向いて、彼の部下らしき兵士達に色々と指示を飛ばしている。

レイルが近づいてきたリューネに気づき、向き直ってくる。リューネは彼の目の前で足を止め、杏の唇を開いた。

「さっきの戦い、どうだった？」

「え？」

「自分の動きが変わったの、分かったでしょう？」

言葉を重ねるリューネ。レイルの目に驚きの色が広がった。リューネの口ぶりから、それが何を示唆するものなのか理解したようだった。

「君が、してくれたの……？」

問いかけてくるレイルに、うなずきを返す。そして、顔を上げて彼の目をしっかりと見据えると、

「……水晶の鐘の音がしたよ」

夢の話語る人のような表情で、レイルがそう告げてくる。その言葉に、リューネは少し小首をかしげるようにして応じた。

レイルは目の前に立つリューネを見つめた。うっとりするぐらい綺麗な顔が、真っ直ぐに眼差しを返してくる。

ザツツとの試合の最中に感じた、自分の身体と能力を制約していた 全ての重荷が無くなったような感覚。響き渡った、初めて聞くのに懐かしい音。変な比喩ではあるけれど、その瞬間から衣服も武器も捨ててしまって、真っ青な 空と、澄んだ空気と、白く平坦な大地の上で軽々と戦うことができるようになった気がした。

それを、この綺麗な女の子がしてくれたのだという。どういうことなのかは分からないけど、それに、どうやったらそんなことができるのかも分からないけど、リューネの透き通った瞳が、それが嘘でないことを告げているように思えた。

「じゃあ、君が勝たせてくれたんだね」

「……信じてくれるのね」

問い返してくるリューネに、レイルはうなずきながら、ありがとう。と、手を差し出す。けれど、彼女はその手を取ろうとはせず、代わりに首を横に振った。

「いいの」

と短く答えるリューネ。

「あなたがわたしの運命の英雄なら、あなたを守るのがわたしの天命だから」

その時初めてレイルにだけ、リューネは小さな笑顔を見せた。

## ■三度レイルの家

---

「レイル君！」

自分の家の玄関に足を踏み入れるなり、淑やかな声を精一杯に張ったタータが、待ちわびていたように駆け寄ってきた。そして、驚いて動きを止めたレイルの前に立つと、綺麗な眉を不安げにひそめて、大きな仕事をなし終えたばかりの少年の全身を見回す。

「……怪我は、ないんですか？」

「え？ あ、はい。幸いに……」

半歩前に出るとぶつかりそうな距離のタータへ、うなずきを返すレイル。とたんに、後ろから誰かに押されてつんのめった。よろめいた先にあったのは、文字通り顔が埋まるほどの柔らかくて暖かな感触。ふわりと立ち上る、春の野の花のような香り。

「おらー。立ち止まんなー、狭いんだから」

頭のすぐ上から、好き勝手な言葉がかけられる。ザッツの声だ。レイルは慌ててタータから身体を離すと、早口で彼女に謝った。恥ずかしくて顔も見られない。

レイルを受け止めたタータは、そんな二人を少し驚いたように見えてから、安堵した微笑みを浮かべた。

レイルとザッツの後ろからは、さらにアティアとリューネが入ってくる。扉の向こうには、興味に駆られてついて来た町の人たちを追い返している兵士達の姿もあった。

「なんだいなんだい。ずいぶん大勢で戻ってきたね」

居間から姿を見せたレイルの母親は、呆れ半分の眼差しを息子に向け、片手を腰に当ててそんな言葉をもらす。

レイルが言い訳を始めるよりも先に、アティアが彼女に抱きついた。

「おばさん、レイルがすごかったの！ もう本当にすごかったの！ あの人がてんぱだったんだよ！」

弾む声と、輝く表情と、ザッツに対する指さし確認。レイルはひやりとして国軍精鋭の青年を見たが、

「ありゃ反則だ」

当のザッツは苦笑いで、でも言葉とは裏腹に悪い気分ではなさそうな表情で、軽くそう言い返していた。

レイルの母親はそのやりとりで合点がいったように、少しからかうような目を背の高い青年に向けてアティアの髪をなでてから、

「それで、そこのフードとマントの子は誰なんだい？」

レイルに顔を向ける。広場からここへ移るまでの間、リューネはまた枯草色をした厚い布地の奥に、顔も拵えも全部しまい込んでいた。槍とロングボウだけ外に出ていて、言っっては悪いが物騒な印象だ。

「ええっと、彼女はリューネ＝ティアシール。僕を助けてくれて――」

何から紹介するべきなのか分からず、とにかく悪い人ではないことを伝えようと口を開いたレイルの言葉に、



「大当たりですよ、ロゼリー先生」

軽妙な響きのザッツの声がかぶさる。首をかしげるタータ。

ザッツは親しげにリューネの肩へ手をかけると、

「とりあえず、伝説の第一章が玄関での立ち話ってのも、どうかと」

言いながら、促すように家の中へと手をさしのべた。

レイルの家の居間に通される。リューネはフードの奥からそっと周りを見回した。運命の英雄の生家に来たにしては、そういう実感があまりない。こういうものなのだろうか。

視線を正面に戻すと、さっきレイルを抱きとめていた女性が、期待と不安が入り交じる眼差しでこちらを見ていた。その隣には、例の青年。

「リューネ。マントを取ってもらっていい？」

レイルが声をかけてくる。リューネは無言でうなずくと、手にしていた槍とロングボウを傍らのいすに立てかけて、フードとマントを外した。

髪と肌が再びみんなの目にさらされる。

「……ああ……」

「ロゼリー先生」と呼ばれた女性が感極まったように涙を浮かべ、自分の前に片膝をついた。

「本当にいたのね……」

アティアは感慨に浸るタータの背中もさることながら、リューネが無造作に立てかけた槍の方が気になって仕方なかった。

何であんなに重いのに、このいす、倒れたりつぶれたりしないの？

それを確かめたくてそわそわする。リューネの方をちらりと見た。戦装束の綺麗な女の子は、タータに質問に淡々と答えていた。

「リューネは、戦女神なのね？」

「あなたたちにはそう呼ばれているみたい」

「あなたはイーグリアの味方なの？」

「どうだろう……」

「運命の英雄が属する国の、味方なのよね？」

「それは、たぶん、そう」

「……それは、レイル君？」

「うーん……たぶん」

「自信なさそうなのね……ここに来てくれたのはどうして？」

「あの人が一緒に来いって言ったから……」

ザッツの方を見て、リューネ。

「何だ、誘拐かい？」

「な？ おい、そうじゃないだろ！ お前レイルについて来たんだろ!？」

おもしろ半分のおばさんの言葉に、慌てたようにザッツが声を上げる。

「別に、違う。待っててもよかった」

リューネの返事に、今度はレイルが少し意外そうな目を向けた。

……うん、今なら大丈夫。

みんなの関心がリューネに集中しているのを確認すると、アティアは思い切って槍を掴んでみた。ずしりと腕に響くほどの重量に身構えて、精一杯の力を込めながら。

が、しかし。

「……あれ？ 軽い」

手のひらにちょうど収まるほどの太さの柄は、金属的だけどさらりとした感触で、全体が片手で簡単に持ち上がってしまう。

「え、何これ。どうなってるの？」

手の中で何度も槍を持ち替え、穂先や石突きに目を走らせながら、呟くアティア。と、その様子をリューネに気づかれてしまった。

「……触らないで」

初めて、優美なラインを描く眉が不機嫌そうにひそめられる。そのとたん。

「ごめうわっ!!」

お詫びの言葉も終わらないうちに槍が突然重みを増し、穂先が引っかかったいすを今度こそ壊しながら、アティアを床に押し倒した。

「アティア！」

騒々しい音と共に、槍をいじっていたアティアが床に倒れ込む。レイルが駆け寄って、槍の下敷きになった彼女を助け起こした。手にした金属塊の重量に、さしもの彼の表情にも驚いたような色が浮かぶ。

槍の下から救出されて、ほっと息をつくアティア。

「ごめん、レイル……いす壊しちゃった」

「いや、しょうがないよ、ぼろいすだし」

槍を床に伏せ、謝る彼女をなだめながら立ち上がるレイル。リューネは表情をゆるめないまま、二人からふいっと顔を背けた。

と、後ろから軽く頭をこづかれる。

「コオラ」

振り返ると、レイルの母親だった。

「おいたはダメだろ？」

そう言いながらリューネを見る眼差しは、明るくて大らかだけど芯の強い光を秘めていて、

「……ごめんなさい」

気がつけばリューネは、素直に謝っていた。こづかれた頭を、今度はなでられる。

「何してんだ、お前達」

ザッツがあきれ半分に声をかけながらレイル達に近寄った。床に置かれた槍を片足で小器用に蹴り上げて、空中で掴む。

「何だ、軽いじゃないか」

素朴な感想を口にするザッツの、そのぞんざいな扱いにむっとして、

「……だから、触らないでって」

「アティア、お前こんなのシナハッ!?!」

短く抗議するリューネと、またも桁違いに重くなった槍に引き倒されて奇声を上げるザッツ。反射神経がいいだけに、とっさにつかまろうとしてテーブルまで巻き込んだので、音の派手さはアティアの比ではない。

驚きに口元を押さえながら、今度はタータが駆け寄った。

……やっちゃった。

その光景に、また怒られるのではとレイルの母親の顔を盗み見るリューネ。

けれど彼女は、リューネの頭をなでたまま、楽しそうな笑い声を上げただけだった。

## ■旅発つ人と残る人

---

「なるほどねえ。あんた、ちゃんと仕事は果たせたわけだ」

あまり上手とは言えないレイルの話にきちんと耳を傾けていてから、母親はそう口にした。すでに刻限は夜。レイルと母親がテーブルを挟んでいる居間には、母子以外の姿はない。食卓に置かれたランプの他は、窓から入ってくる淡い月明かりだけが、二人を照らしていた。

うん。とうなずく息子に、彼女は少し目を細める。

誇らしげな顔をしてきている、と置いていいのかな。母親の方をちらりと見て、レイルはそう自問した。

「けど、これからが大変だね」

「……うん。僕は王都に行かなくちゃいけないから、これからは母さんがザレスで一人に」

「なに言ってんだい。大変なのはあんたの方だよ」

母親が、少しあきれたような声でそう言う。そして、え？ と顔を上げたレイルに、「王都には、ここよりもっと多くの人がいて、お前を必要としてるんだろ？」

必要としてくれる人に応えるのが強さなら、レイルはもっと強くならなきゃいけない」

カップを手にとって口を付けながら、責める風でもなく言葉を続ける。

レイルは無言でテーブルに視線を落とした。

できるだろうか。リユーネがいてくれれば、できるような気もする。これからもアティアが励ましてくれたり、ザッツやタータさんが力を貸してくれるなら、できるような気もする。

――立ち向かう相手次第だけだ。

「……頑張るよ」

ずいぶん間があってから顔を上げ、そう答える息子に、レイルの母親は片眉だけ器用に上げて見せた。彼にはそれが肯定なのか否定なのかは分からなかったけど、母親はそれ以上なにも言わなかった。

翌朝。広場はレイル達の出発を聞いた見送りの人たちであふれかえりそうになっていた。

みんな口々に彼の名前を呼んでいる。自警団長や鍛冶屋の親方の姿もあった。

「手えふってやりなよ、英雄」

ザッツが言う。が、レイルはそれどころではない。生まれて初めてまたがった鞍上で、完全に萎縮していた。

「た、た、高いですね……」

手綱は馬首を並べたザッツが握ってくれているので、レイルは鞍の前に付けられた取っ手を握りしめている。

「気を楽にして、背筋伸ばせ。腕じゃなくて足で馬の胴を押さえる。手綱を気にする必要は今はないから――てか、リユーネにちょちょいと力借りた方が早くないか？」

途中までは真面目にアドバイスしながら、ほとんど耳に入っているとは思えないレイルの状態に、少し投げやりな言葉を続けるザッツ。

そのリユーネは、用意された馬の背で、凜とした戦装束を朝日に輝かせていた。フードのつい

たマントは取っている。リユーネ自身は気が進まないようだったが、「国威発揚。お役目だと思って我慢してくれ」とのザッツの言葉で、渋々承知した。

見送りの人が湧き立っているのも、一つはリユーネの姿があればこそだろう。

レイルの馬の足下に、アティアと母親がやってきた。

「馬上から挨拶とは、偉くなったな、レイル」

鞍にしがみついている息子へ、にやにや笑いでそう言う母親。アティアは泣き笑いでレイルに手を伸ばしてきた。

「頑張ってるね。信じてるから」

「……ありがとう」

レイルもおずおずと手をさしのべる。軍馬の背は高い。その上、馬上のレイルがほとんど硬直しているので、互いにさしのべた二人の指先がどうにか触れるかという程度。

「てーい。こーの色男！」

やおら、ザッツがレイルを蹴飛ばした。たまらず鞍から転げ落ちる、町の英雄。あたりが笑い声に包まれた。

「危ないでしょう！ なにすんですか！」

すぐさま立ち上がり、文句を言うレイル。その首筋に、アティアが無言で抱きついてきた。熱い吐息が胸にかかる。驚いてそれ以上食ってかかるのを忘れたレイルへ、

「未練を残す方が危ないの。死神憑きって言ってな。」

戻ったら彼女を抱きしめるんだとか、子供の顔を見るんだとかな」

馬上からかけられたザッツの声には、人好きのする軽妙さのなかに、真摯な響きがあった。

「もうここに戻ってくることはない。そう思って、今ここを発て。」

「そうすれば、絶対ここへ戻ってこられる」

「……はい」

その言葉に、一つはっきりとうなずいて。

レイルは幼なじみの背中をしっかりと抱きしめた。

## ■街道

振りかえったザレスが遠くかすむ。見送りの人々の声と、最後に交わしたアティアとの言葉が、まだ耳の奥に残っているような気がした。

「ザッツさん、もう馬下りでもいいですよ？」

顔を前に戻し、隣に行く部隊長に問いかける。レイルが馬に乗っていたのは、英雄が町を出るのに徒歩じゃ格好がつかないと言われて、急遽鞍上に放り上げられたからだ。

「あん？ いや、いいけど、王都まではまだ十何日もあるんだぞ」

「大丈夫です。山歩きで慣れてますから」

言って、レイルは馬の背から飛び降りた。身軽に着地し、「手綱は持ちます」と、ザッツの方へ駆け寄る。

「おう。けど、近々馬に乗る練習は始めろよ。乗れる乗れないで、用兵に差が出るからな」

「……馬に慣れるところから始めてみます」

手綱を受け取り、今までまたがっていた馬の首筋を軽くなでながら、レイルは答えた。

彼と同じく、ザッツ＝コールトダイン部隊長殿の意向で鞍上の人となっていたリューネは、町を出ると早々に馬を下りてマントを羽織ってしまっていた。

今は一行の真ん中を進む馬車の中で、タータと話をしている。

レイルは少し沈んだ気持ちを拭いたくて、周りの様子をもう一度観察してみた。

第一街道を王都に向かって南下する一行は、およそ二十人。それにタータの馬車と勅使の乗る馬車が一台ずつと、騎馬が五頭ほど。そのうちの一頭は、レイルとリューネを伴って王都に戻る旨の伝令書を携えて、一足先に南へ向けて走っていた。

「途中途中の町で、徴兵した人たちを王都に護送したからな。最初はこの五倍いたんだぞ」

町を出て間もなく、鞍の上にいる緊張を紛らわせようと話題を振ったレイルにザッツはそう言って、

「それが全部、ザッツさんの配下なんですか？」

「おうよ」

聞き返したレイルに軽くうなずいた。

「……実は、すごい人なんですか、ザッツさん」

「実はってなんだ。見るからにすごいだろ。この歳で部隊長なんぞ、自慢じゃないけど俺の他に何人もいない」

素朴な感想に、苦笑いで答えるザッツ。

レイルは町を出る前から聞いたかったことを口にしてみた。

「僕も、ザッツさんの部下になるんですか？」

そうだといい、と思いながら。しかし、彼が顔を前に向けたまま返してきた答えは、

「いや、違うんじゃないか？ 俺の部隊じゃレイルはもてあますよ」

期待したものとは違う言葉だった。

口をつぐんでしまったレイルに気づいたのか、ザッツがこちらを向く。

「ああ、悪い意味で言ったんじゃないからな。兵種が違うってこと。

なんにしても、正式な配属が決まるまでは、俺の部隊で身もと預かりだろうな」

取りなすような言葉だが、それでもレイルはほっとした。

「正式な配属って、いつ決まるんでしょうか」

「んー。分かんねえな。まあ、どう早くても王都に着いてからだろ」

王都に着いてから、か……

さっきのやりとりをまた思い出してしまって、いつの間にかレイルはうつむいて歩いていた自分に気がついた。慌てて、顔だけでも上げる。

配属もそうだし、王都での生活もそうだが、この先なにが起こるのか想像もつかなくて、期待よりも不安の方が大きい。

「……必要としてくれる人のいるところへ、行く」

スウィード先生が残してくれた指針を小声で口にして、レイルはその漠然とした懸念を追い払おうとしてみた。

## ■暫定上官

---

「で、正式な配属が決まるまでは、貴君は本官の部下です」

ザレソスを発った、その日の昼。街道の横に一定距離ごとに設けられた石畳の休息場所で足を休めている時に、ザッツはレイルに近づいてきて、そんな声をかけた。

「……はい」

なんとなく、腰を下ろしていた石から立ち上がって、返事をするレイル。

「そこで、上官として最初の指令をあげましょう」

「……ザッツさん、しゃべり方が気持ち悪いです」

「リューネと仲良くなってこい。手段は問わない」

ビシッと立てた親指でタータの馬車の方を指し、ザッツは爽やかな笑顔とともにそう言った。

「そのうちじゃ、ダメですか」

「まあ、個人的にはそれでもいいんだが、国軍としちゃありがたくないわけよ。

タータの研究が正しければ、レイルとリューネは戦況を変えるぐらいの力を持つてる。コンビネーションがいいに超したことはない。

そのためにはまずお互いをよく知ることだ。分かるな」

「……はい」

少し困ったように笑いながらのザッツに、レイルは従容とうなずいた。

ザッツに指示されて向かったタータの馬車は、休息場所の一番奥、大きな木が日陰を作っている場所に停められていた。馬は引き棒を外されて、傍でのんびりと道ばたの草を食んでいる。御者のおじいさんはその隣で、使い込んで深い飴色になったパイプをぷかりぷかり。

馬車の窓とドアは閉められていて、外からでは中の様子は分からない。

「……あの一」

他にどうしていいのか分からずに、レイルはそっとドアをノックしながら頼りない声を上げた。すぐに、窓からリューネの顔がのぞく。

「レイル」

確かめるような、彼女の声。

「うん、あの」

レイルが話を切り出そうとするより先に、リューネはスイと顔を引っ込めると、

「タータ。レイルが会いに来たよ」

馬車の中で、そう呼びかけた。すぐにドアが開けられる。

「あら、レイル君。どうしたんですか？ 疲れました？」

穏やかな微笑みとともに、タータが問いかけてきた。馬車の中からは、ほのかにいい香りが漂ってくる。

「いえ、ごめんなさい。そうじゃなくて……リューネに会いに来たんです」

気まずさを全力で押し殺して答えるレイル。

まあ。と笑みを深めたタータに対し、訪ねられた当人はきょとんとした顔だった。



「わたしに？ どうして」

「どうしてって……」

ザッツさんに言われたから、とは答えられず、

「……運命の英雄だから？」

我ながらなぜか質問口調で、呟くように。そのとたん、

「レイルはわたしの運命の英雄なの？」

リューネがドアから身を乗り出すようにして問い返してきた。

「いや、リューネが自分で言ったんじゃないか」

面食らいながら言葉を返す。

そんな二人を見て、タータは穏やかに笑いながら、

「とりあえず、入ってください、レイル君。ちょっと狭いけど」

手をさしのべて彼を馬車の中に導いた。

## ■戦女神と運命の英雄

---

タータの言う通り、馬車の中は決して広くなかった。おまけにリューネの槍が斜めに立てかけられているので座れる場所が狭く、隣にいるタータの柔らかな身体と、どうしてもくっついてしまう。

だが、彼女はそんなことを気に留めた風もなく、話を始めた。

「リューネの話が聞けて、戦女神のことがずいぶん確認できたんです。

レイル君。そもそも運命の英雄ってどんな存在だか、分かりますか？」

「いえ。リューネがそう言っていたのを聞いたことしかありません」

正直に、首を横に振る。微笑むタータ。

「運命の英雄は、一人の戦女神にたった一人の、真正の守護対象。

戦女神は彼、もしくは彼女を守るために、天上界からこの人間達の世界へやってきます」

「守るためにですか」

あの広場で最後にリューネが言った言葉が思い起こされた。うなずいて、タータは先を続けた

。

「戦女神は、自ら剣や槍を執って戦うこともできるけれど、それは本分ではありません。

彼女たちの本当の力は――」

「守護する者の持つ力を、全て引き出すこと。レイルも、知ってるよね」

向かいに座ったリューネが、後を引き取った。無言のまま、首肯するレイル。

「戦女神に運命の英雄は一人だけ。でも、戦女神が力を引き出すのは、必ずしも運命の英雄でもなくていいようです」

「誰でもいいの。引き出してあげること自体はできる。その効果が、あんまり強くないだけ」

「……僕の時、どうだったの？」

確認するのは怖いけど、確かめずにはられない。

リューネは小首をかしげるようにしながらレイルを見て、

「強かったと思う」

答えた。

「じゃあやっぱり、僕が運命の英雄？」

「んー……たぶん？」

煮え切らないリューネの言葉に、レイルは少し語気を強めた。

「どうすればはっきりするのさ」

「レイルが死ねば」

あっさりと言われた一言に、頭を殴られたような気がした。慌てて、タータが言葉を補ってくれる。

「運命の英雄が命を落とすと、戦女神は天上界に帰ります。たとえその時その傍にいなくても、誰が運命の英雄なのか分からなかったとしても、必ずなのだそうです」

「……そりゃ、分かりますよね。それだったら」

なんだかちょっと泣きたくなって、力なくうつむき加減になったレイルに、だが、向かいか

らリューネがそっと手を伸ばしてきた。

「だからー」

いつも槍を携えているのが似つかわしくないような、細くて白い指がレイルの頬をなでる。

「ーレイルは死んじゃダメ。きっとわたしは、天上界に帰らなきゃいけない」

続けられたその言葉に、レイルは顔を上げて、リューネを見た。

「運命の英雄には、そういう印があるわけでも、何か特別の持ち物があるわけでもありません。

本人はもちろん、戦女神にも、相手が運命の英雄かどうかを一目で確実に判断する手段はないようです。

戦女神の加護を得ていたと思われる英雄達の中にも、最初から彼女たちと絶対の信頼で結ばれていたわけではないと考えられる例はあります」

励ますように、タータがそう教えてくれた。

戦女神と王都の学者。二人の女性に力づけられて、レイルは少し照れたように「はい」と答えた。

「そう、それに、時間はかかりますが運命の英雄かどうかを判断する基準がないこともないんです」

「そうなの？」

むしろ戦女神本人の方が驚いている。

タータは苦笑いを浮かべて、言葉が続けた。

「さっきリューネが教えてくれたことの裏返しですよ。

戦女神は、戦女神としての成長のために、運命の英雄を守護する天命を与えられる。それを果たしていれば、自ずと戦女神は成長する」

今度はタータが、リューネとレイルの手を取った。二人の手のひらを、自分の両手で包み込むようにして、そっと目を閉じる。

そしてそのまま、託宣を告げる司教のように、穏やかだけど深い声で、続けた。

「リューネ。あなたがレイル君の傍にあり続けて、自分の成長を実感する時が来れば、それはレイル君があなたの運命の英雄だったと証明された時なのです」

戦女神と、運命の英雄候補。二人はタータの柔らかな手のひらに包まれて、お互いの手のぬくもりを感じながら、そっと顔を見合わせた。

「お嬢様。そろそろ出発するですよ」

馬車の外から、御者のおじいさんの声がした。梶棒に馬をつないでいる音も聞こえてくる。

「あ、じゃあ僕も行かなきゃ……」

タータとリューネの手のぬくもりに、少しだけ後ろ髪を引かれながら、レイルは腰を浮かせた

。

「乗っていかないのですか？」

尋ねてくれるタータに、軽く頭を下げながら、

「僕、今のところはザッツさんの部下なんです。だから、彼のそばにいないと」

そう答える。タータがいつもの優しい微笑みを深めた。

ドアを開けて、馬車のステップに片足をかけるレイルに、向かいの席から声が飛ぶ。

「レイル。結局なににしに来たの？」

単刀直入なリューネの言葉。確かにこれでは、タータさんに慰めてもらいに来たみたいだ。

レイルは少し考えてから、

「リューネと仲良くなりたくて、来た」

彼女の方へ顔を向け、正直に答えた。首をかしげるリューネ。

「人間の中では、レイルやタータは仲がいいと思ってる」

返された言葉はどうもずれている気がして、気恥ずかしさよりかみ合っていない感覚の方が強かった。

「ありがとう。でも、それを証明するのが必要だったんだ。

あー、ほら、リューネも誰が運命の英雄なのか、証明するものがあれば便利なものと同じ」

ちょっと投げやりな説明に、今度は天井を見て考え込むリューネ。それから、

「はい」

馬車の中に持ち込んでいた槍を手にとって、差し出してきた。

「……え。なに、これ」

受け取りながら、戸惑った表情のレイル。アティアの上からどけた時とおなじ物だとは思えないほど軽くなっているのがなぜかということに加えて、リューネがこれを手渡してきたことの意味も分からない。

そんなレイルにリューネは、ずいぶん決然とした眼差しで告げてきた。

「貸してあげる。仲のいい証拠」

「おう。すぐ戻ってくるかと思ってたけど、けっこう頑張ったな」

ザッツのところに戻ると、彼はそんな言葉で迎えてくれた。どう返事していいものか分からず、「はい」とだけ答えるレイル。

「どうだった。親交は深まったか？」

「どうなんでしょう……これを渡されました」

言って、リューネから「貸してもらった」槍を見せる。最初は怪訝な顔をしたザッツだったが、すぐにその意味するところに思い当たったようだった。

「レイル、それ、あいつが自分からお前に渡したのか」

「はい」

「重くないか？」

「いえ。軽いです」

「何か言ってたか？ リューネ」

「これを貸すのが、仲のいい証拠なんだとか……」

その言葉に、ザッツは破顔した。そして楽しそうに笑ったまま、

「レイル。お前はやっぱりすごいやつだ」

そうやって肩を組み、レイルの髪をくしゃくしゃとなでた。

## ■王女殿下

豪華な馬車が、周りを荘重な拵えで揃えた騎兵に囲まれて、第三街道を北へ進んでいた。

イーグリアの王都タールホルツからは、主街道が計五本伸びている。

国土を南北に貫く第一街道。東の海岸線までの第二街道。北西の隣国ダーションに続く第三街道。南西の隣国フレイリアに続く第四街道。

そして、南の隣国ベヒランドと大陸東方地方イーストウへ通じる、封鎖された第五街道だ。

この他にも大小様々な街道が通り、枝道や間道がクモの巣のように街道をつないでいる。もっともそれらの小規模な道はあまり治安の良いものではなく、道自体の整備の状況もよくはないため、よほど急いでいる者か地理を知り尽くした地元の間人かしか使わなかった。

ともあれ、イーグリア王国が国費で整備した五つの街道の内の一つ、隣国ダーションへ向かう街道上を、馬車は快走していた。が、その道行きの快調さに反して、その車中にある人物の機嫌は、すこぶる悪い。

「なぜ私が、片田舎の城塞などに逗留しに行かねばならんのだ！」

華美な刺繍で飾られたクッションの上に座って、その人物が声を上げる。

金色の長い髪を後ろで流麗に結び上げ、少しきつめだが大きく開いた愛らしい目にはエメラルドの瞳。結び髪のせいちょっと広く見えるおでこ。身を囲む物の豪華さをさておいても、高い鼻筋と抜けるように白い肌の色が高貴な出自を感じさせずにおかない。御年十五歳で声とともに振り上げた拳はまだ小さく柔らかく、全体から受ける印象は、高貴なツリ目の子犬といったところ。

「南のベヒランドのみならず、北西でダーションとも戦端が開かれれば、我がイーグリアは窮地に陥ります。

そのためにダーションの王族と親交を深めておく必要がありますが、さりとていきなり王都においでいただくわけにもまいりますまい。

まずは国境の城でのご招待が妥当なところ。が、そこへイーグリア王家の者がだれも留まったことがないというのではかえって失礼にあたります。

そこで王女殿下にご逗留いただき、まずは城に品格を与えていただきたいのです」

彼女の鬱憤に答えて、向かいに座った侍従長が、読み上げているかのような調子で長ったらしい文章を口にした。そのしわだらけの顔には、のっぺりした無表情。

「それはいい。だが、なぜ私なのだ」

詰め寄る王女殿下。侍従長は慇懃に頭を垂れた。

「チュテルナ＝リユーレイオー＝エリミュエステアリ王女殿下こそ、先王の血の高雅高潔を色濃く受け継がれたイーグリア王家の至宝だからにございます」

「第二妃の第三子だ。私の血が濃いのなら、兄上と姉上の血は煮詰まってるし、第一妃第一子の現王の血はジャムになってる」

吐き捨てるようなチュテルナ王女殿下の言葉に、侍従長は「そうかもしれませんな」とあっさり顔を上げた。

鼻を鳴らし、豪華な背を鮮やかな染め付けの座面に投げる王女。そのまま不機嫌そうにほおづ

えをついて、窓の外へと目をやった。

街道の景色が流れていく。明るい陽射しに照らされた草原と木立。触れることのなかった世界。野原で蝶を追うというのは、彼女にとっては幻想の物語だった。

全身を覆う鎧甲に騎乗槍を構えた騎兵達に目を移す。それは確かに自分の馬車を護衛する者達ではありながら、同時に自分をこの街道から外へ出すまいとする檻のようにも思えた。

「……今度は王都に戻れない気がする」

弱音がもれた。侍従長の声はない。

顔を動かさないまま視線だけ向けてみると、やはり無表情なままの老婆の顔で、しわの奥の目だけが老獪に光ったような気がした。

## ■方向転換

---

ザレススを発って十日。レイル達は道程の三分の二までやってきていた。

「この街は、第一街道と第三街道を結ぶ枝道の起点でもある。賑やかだろ？」

ここ二・三日は街道を進むごとに周囲に人影が増えていたが、確かにザッツの言う通り、この街の賑わいはそれまでの比ではなかった。

「この先、国軍の兵士は宿営所を使う。タータ達とはここでお別れだ」

ザッツの言葉に、レイルは軽く下唇を噛んだ。ザレススに来て以来、なにこれとなくよくしてくれた彼女は、レイルにとって頼れる姉のような存在になっていた。

ましてや、これから向かうのは右も左も分からない王都。そこへ着いてしまえば、上官さえザッツになるかどうか分からない。

「まあ、そうしけた顔をするな。無事王都に入りゃ、また会える。

タータの家はでかいからな。誰でも知ってる」

そんなレイルの様子に、ザッツは笑いながらそう言って、「挨拶してこいよ」と背中を押した

。

ところが、重い足取りでタータの馬車に向かったレイルを待っていたのは、意外な言葉だった

。

「レイル君。王都に着いたら、私の家に来てくださいね」

ここまでは予想通り。

「あなたさえ迷惑でないなら、家で一緒に暮らしたいんです」

ここが予想外。

「もちろん、リユーネも一緒に」

ここで納得。

要するに研究対象と寝食を共にしたいということなんだろうと思ったが、タータの気遣いは嬉しかった。

「ありがとうございます」

さしのべられた好意の申し出に素直に甘えることにして頭を下げたレイルを見て、タータは嬉しそうに微笑んだ。

当面の気がかりが一つ解消されて少し気が楽になったレイルは、一緒にタータの馬車を辞したリユーネとともに、宿営所へ戻ってきた。

迎えたのは、ザッツの険しい顔。

「ただいま戻りました……けど、どうしたんですか」

「おう。レイル。

いや、ちょっと問題がな」

表情を少し和らげはしたものの、依然として厳しい目つきでザッツ。その手には一通の書簡が握られていて、ずいぶん立派な封蝋がしてあった。

国軍としての命令書だろうか。そう思って、レイルはそれ以上の詮索をやめることにした。気さくに接してはくれるが、ザッツは武人で、しかも百人級の部下を率いる部隊長なのだ。その責務はたぶん、僕が想像するよりもずっと大きい。

無言で頭を下げて部屋へ引っ込もうとしたレイルに、

「あー。ちょっと待て、レイル。

一つ頼まれてくれないか？」

ザッツの方で声をかけてきた。立ち止まって振り向く。リューネも足を止めた。

呼び止めた暫定上官は軽く頭をかいてから、続けた。

「明日の明け方、すぐに枝道を通して第三街道に抜けてくれ。そこに豪華な馬車がいる。タータの馬車よりずっと立派なやつだ。

その馬車の主を、護衛してやってくれ」

「え……はい。でも、僕一人ですか？」

「リューネも一緒だ」

「じゃなくて……ザッツさんは？」

「悪いが、俺は行けない。大至急で王都に戻る」

「……」

不安がよぎる。王都まで自分を連れて行くのが、ザッツの任務ではなかったのだろうか。

「不安か？」

苦笑いのザッツ。レイルはちょっと戸惑ってから、無言のまま小さくうなずいた。彼のことが信じられないというのではなく、指示してくれる人がいなくなるのが心細かった。

ザッツは少し困ったような表情で、鼻の頭をかいた。それから、

「よし。それじゃあ、兵士の不安を吹き飛ばす、魔法の言葉をくれてやろう」

いたずらっぽい笑顔で、そう言う。

「……なんですか？」

つられて口元をゆるめたレイルに、

「命令、だ」

さりと、ザッツ。レイルの中で、全身の血液が一気に水に変わったような気がした。

こちらに向けられた顔には、いつもの人好きのする笑み。でも、その眼差しは少しも笑っていなかった。

これ以上、ザッツさんに何か言わせてはいけない。それがイーグリア国軍の一員としての務めで、あの試合でザレスの命運を背負った自分の責務。

「……はい」

そう悟らされ、レイルは、うつむかずにそれだけ答えるのが精一杯だった。声が詰まるのはどうしようもなかった。

「レイル」

「部屋に戻ろう、明日は早い」

声をかけてくれた戦女神に、早口でそう言って、きびすを返す。手足の先が冷たくて、板敷き



の廊下でつまづきそうになった。物問いたげな視線をザッツに投げてから、レイルの後を追おうと足を踏み出すリューネ。

「……レイル！」

もう一度、ザッツの声が飛んだ。足を止めたが、レイルの顔は前を向いたまま。

「……さっきのは命令だが、今度のはお願いだ」

「……」

「死ぬなよ。それから、惑わされるな。

誰が——いいか、誰が何と言おうが、お前自身が正しいと信じられることをしろ。あの試合に立ち向かった時の強さを、忘れるなよ。

リューネ。レイルを守ってやってくれ」

レイルは振り返った。目に映るザッツの表情には、例えがたい葛藤がにじんでいた。無言で、こくりとうなずくレイル。

その傍らで、リューネが口を開いた。

「ここでザッツを殺せば、レイルは困らないで済むの？」

その口調は、「明日はお天気？」と聞いただけのように何気なくて、それだけに鋭く突き立つものだった。

「……かもな」

どこかしら自嘲的に、答えるザッツ。足を踏み出す、槍を携えた戦女神。宿営所の中なので、ザッツは丸腰だ。

「リューネ」

自分でも驚くほど、レイルは静かな声で彼女を制した。海原の奥底を流れているという大海流のように、全ての雑念を押し流す深く大らかで力強い流れが自分の中にわき上がるのを感じた。

「ザッツさんは、正しいことをしている。僕はそう信じる。

だから僕も、正しいと信じられることをする」

言って、戦女神の少女を見た。足を止めて、顔だけこちらに向けている。微笑んで見せた。

「必要としている人が、きっとそこにいるんだよ。だから、第三街道へ向かおう」

理屈ではなかったが、リューネはもう一度きびすを返して、レイルの隣へ戻ってきてくれた。

「正しいことって、わたしには分からないけど」

そうして、手にした槍を、まじないのように軽く振った。

「レイルが信じることなら、わたしも信じる」

## ■王都にて

時間は少し戻って、レイル達がザレソスを発った翌々日のこと。

その荘重で見上げるほどに巨大な外観から「白亜の断崖」と呼ばれるタールホルツの王城を、一人の男性が歩いていた。

城の外周に沿った渡り廊下も磨き込まれた白の大理石で被われ、その城の細部にわたる美しさはイーグリア建築様式美の粋を集めたものだったが、その中を歩む男性もまた、最高の職人が心血を注いで作り上げた人形が生きて動いているのではないかというほど端麗な容姿を持っていた。

時刻はまだ日の出直後。城内には寝ず番の衛兵以外に姿はなく、城の周りに植え込まれた木々に集う小鳥の声ばかりが清らかに大気を震わせている。

やがて男性は、大人二人が肩車をしてもお頭上に余裕があるような、隆として荘厳な扉の前で足を止めた。それだけで人を殴り殺せそうなほど重いノッカーを鳴らしてから、扉に手をかける。開いていく扉の間から、ランプと曙光の絢いあわされた光がもれてきた。

部屋に足を踏み入れる。中にいた人物が、かすかに視線だけ上げてこちらを見やってから、「国王が怠惰な国は、追い抜かれる。国王が懦弱な国は、攻め入られる。国王が強欲な国は、食いつぶされる」

口を開いた。

「そして国王が孤立する国は、つけ込まれる。クルトトール人への手紙。第二章第五節」

この国で古典教養として通用している文章を穏やかに続けながら、男性はゆっくりと扉を閉めた。

イーグリア国国王執務室。時は明け方の五時。すでに外は明るい、まさに今さっき日の出を迎えたばかりだ。

「早いな、ディトリット」

すでに装いを整えて執務机に書類を広げていた国王が、驚いた風もなく声をかけてくる。深く一礼して、歩み寄るディトリット。机の上の書類箱には、すでに処理済みの紙束が積まれていた。一体いつから、彼は仕事を始めていたのか。

部屋の中には彼ら二人の他、年老いた秘書官が一人だけ。書類がサインされるごとに新しい紙を王の前へぴたりと整えるその様は、自動的に国王の前へ書類を置く人形のような。

「恐れながら」と、したためた命令書と目論見書を差し出す。北の田舎町ザレソスからの急使を受けて、すぐにディトリット自身が筆を執ったものだ。羽ペンを置き、受け取って素早く目を通す国王。

それから、執務机の向かいに立つ政略・戦略顧問に目を向けると、

「予定とずいぶん変わったな」

責めるという風でもなく、口にした。

「予定は変わりうるので、予定と申します」

「お前の予定は他の者に比べて変わりにくい。だから登用している」

言いながら、彼は無造作に命令書へサインをして、ディトリットへ返した。

「変えるからには、成果を高めろ」

その言葉に、ディトリットはまた深く一礼して、御前を下がった。

## ■合流

第一街道と第三街道を結ぶ枝道を、一頭の騎馬が疾走していた。馬上の人影は二つ。手綱を握るのはそのうちの後ろの方、むしろ小柄なマント姿の人物だった。

……ザッツさんの言う通り、早く馬に乗る練習を始めるんだった。

リューネの視界をふさがないように背を丸めて鞍にまたがりながら、レイルは今さらながらに後悔していた。数日でどれほど乗りこなせるようになるものかとも思うが、それでも今の情けない状態よりはましだった可能性が高い。

訓練された軍馬の足は速く、一時間で四〇キロは駆け抜けてしまう。人間の足ではどう鍛えたからと言って追いつけるものではなく、ザッツが「用兵に差が出る」と言ったのが痛感できた。

「見えてきた」

背後から、リューネの声がする。思わず顔を上げると、

「レイル、前見えない」

背中に額を押しつけるようにして、戦女神に鞍の上へ押し戻された。「ごめん」と謝りながら、視線だけぐいっと引き上げて前をのぞき見る。

でこぼこした枝道の延びる先に、明け方出発してきた街よりもずっと小さいながら、確かに市街地の姿が春の日差しの中に浮かんでいた。

その街の宿営所は、ザッツ達と別れた街のものより小さくて、しかもだいぶほこりっぽかった。あまり使われていないらしいというのが、レイルの抱いた印象だった。

暫定上官のザッツがレイルに下した命令は、この街で大きな馬車の一行に合流し、馬車の中の人物を守ること。

レイルは腰に着けた鞆の中にしまっている命令書を意識した。これ受け取ったわずか数時間前のことが、ずいぶん前のことのように思い出される。

「命令書だ。向こうの街にも宿営所がある。そこで向こうの部隊の指揮官を見つけて、そのまま渡せ。

……念のため言っとくけど、興味が湧いたからって中見るなよ。必要だったら向こうの指揮官が内容を教えてくれる」

レイル達の出発直前、ザッツはそう言って、封蝋で閉じられた書簡をレイルに手渡した。後で見ようと思っていたレイルは、慌ててうなづく。

まだまだザッツさんには教えてもらいたいこと、教えてもらわなきゃいけないことがある。そう思った。

「ほれ」

不意に、ザッツが手を差し出してくる。怪訝に思いながら、今受け取ったばかりの命令書を彼の手元に返すレイル。

ザッツはそれを、足下に置いていた革鞆の中にしまった。そして、

「急だったから、宿営所の予備品しかねえけど」

と、同じく足下から、鈍色に光る鎧を取り上げる。胸の部分だけを被う、軽量なものだ。

そして、少しぼかんとした顔のレイルに、  
「着けてやるから、手を軽く広げて後ろ向け」

上官というよりは弟を見る兄のような苦笑いを浮かべて、告げた。レイルは言葉もないままもう一度慌ててうなずいて、背を向けた。

鎧が頭を通されて、脇の下まで回される。革のベルトが、レイルの胸にしっかりと厚板を押しつけた。

「お前、見かけより背中厚いな」

ベルトを調節しながらのザッツの声を聞きながら、鎧にそっと手を触れてみる。不思議な心強さが伝わってきた。自然と、自分の表情が晴れやかになっていくのを感じる。

ザッツはさっきの命令書を入れた革鞆も、腰に巻いてくれた。

「よし。あとはこれだな」

言いながら、ザッツはレイルの肩を軽く掴んでくるりと回し、二振りの剣を差し出した。片方はザレススでの試合でレイルが使ったものと同じぐらい。もう片方はその半分ほどの刀身だ。

レイルはぐっと喉が詰まるような感覚を覚えた。

「別に業物でも何でも無いが、充分実用に耐える。

刃も剣先も鍛えられてる。むやみに抜くなよ」

レイルはうなずいて、確認のために一度だけ鞘払ってから、腰に吊った。

「ありがとうございます」

頭一つ高いザッツを見上げ、はっきりとした声で礼を言う。彼はそんなレイルを少しの間見つめていてから、軽く相好を崩して肩に手を置いた。

それからもう一度、何かを振り切ろうとするように「よし」と声をかけ、

「お前を必要としているやつのところに行ってこい。命令もお願いも、忘れるんじゃないぞ」

励ますように、力強く背中を叩いてくれた。

宿営所の入り口に立っていた兵士に来訪を告げると、指揮官にはすぐに取り次いでもらえた。宿営所自体のみすぼらしさとは裏腹に、輝くような鎧もまぶしい立派な拵えの指揮官だった。

通された司令室にいたその他の兵士達も、みな荘重な出で立ちだ。誰もがザッツと同じぐらいか、彼よりも背が高い。磨き込まれたような板金が全身を包む鎧は今レイルが身にまとっているブレストプレートが紙細工に見えるほど重厚で、むしろ、こんなのを着けて戦場を歩けるのかと思うほど。

彼らが何人も詰めていて、司令室の床が抜けるんじゃないかとレイルは心配になった。

作法もなにも分からないので、部屋に入るなり一礼して鞆から命令書を取り出し、机の向こうにいる指揮官に歩み寄る。と、横から、やはり板金に被われた太い腕が伸びてきて、それ以上レイルが前に進むのを制した。

振り仰ぐと、立派な口ひげの兵士が、少し当惑したような表情で彼を見下ろしている。

「貸しなさい」

低い声で言われて、レイルは大人しく命令書を手渡した。うなずきながら受け取って、

「下がって」

そっと彼の胸を押す兵士。レイルはもう一度一礼してから、入り口近くまで下がった。命令書を受け取った兵士は鎧を鳴らしながら指揮官に近づき、深く礼をしてそれを手渡す。

「騎兵……」

リューネの隣に戻ったレイルに、戦女神がフードの奥で呟くのが聞こえた。

「え？」

「あの人達。騎兵」

顔を前に向けたまま聞き返すと、リューネはそう繰り返した。

執務机の向こうの指揮官は封蝋を確かめてからペーパーナイフで封を切り、中の命令書に目を通している。なにをするにも厳めしい顔をしているのは、鎧が重すぎるからじゃないかと思わずにいらなかった。

騎兵。軍馬にまたがって戦場を駆け抜ける、花形兵種。重量の大半を馬に運ばせるため、鎧は厚く重い。突破力と機動力に優れ、騎乗槍を構えて突進する時の攻撃力は歩兵の比ではない。ついでに言うと、ものすごくお金がかかる兵種でもあるらしい。

レイルはかつてスィフィード先生に教えてもらった知識を思い起こした。

「レイル＝エウリオン」

机越しに、指揮官が声をかけてくる。「はい」と背筋を伸ばすレイル。指揮官は威厳のある顔立ちに不似合いの、どうにも困ったような表情を浮かべて彼を見ていた。

「君は、この命令書を見たかね？」

「いえ、見ていません」

「うむ……ここには、国軍部隊長の署名で、王命により部隊きっての精鋭を向かわせると書いてあるが……」

書面に目を落とし、言いよどんで、また目を向けてくる。

「信任に恥じないよう、務めます」

こんな返事で良いものかどうか分からなかったが、長々と経緯を説明するのもおかしいような気がして、背筋を伸ばしたまま短く答えるレイル。

指揮官は小さくため息をつき、重ねて持っていたもう一枚の紙を上にした。

「しかもこちらは、国王陛下の署名が入った命令書だ」

「……はい」

その意味するところが分からずに、ただ返事を返すだけのレイル。指揮官はもう一度ため息をついてから、執務机に二通の書簡を伏せ、少し身を乗り出した。

「このような場所ではおよそ目にする事のない書面だということだ。」

レイル＝エウリオン。君は一体、何者かね？」

そう聞かれても、レイル自身なにを答えていいのかわからない。

「ザッツ＝コールトダイন部隊長の部下です」

結局、現状ではいちばん通りの良さそうな事実だけを口にした。それを「詮索無用」という意思表示に受け取ったのか。指揮官は口の中で「ふむ」と呟くと、

「よろしい。レイル＝エウリオンはこれより国軍騎兵隊ロルスン隊に帯同してもらおう。」

任務は重大だ。心してかかり給え」

朗々とした声で、そう命じた。

「はい。……けど、なにをすればいいんですか？」

「……帯同だ。分かるかね」

拍子抜けしたように、繰り返すロールスン指揮官。

「はい。いや……分かりますが」

行動をともにしてなにをすればいいのか。そう言いつのろうとしたレイルの前に、隣に立つ戦女神がいさめるように槍を差し出した。

はっとして振り向くと、リューネもフードの奥から彼を見ていた。

「レイル。彼らは邪魔をするなど言っている」

小さく唇を動かす、リューネ。その言葉に、レイルはぐっと息を飲んだ。リューネが槍を引く。

レイルは無言で一礼すると、

「行こう、リューネ」

声をかけて司令室を辞した。

## ■宿営所前

宿営所を抜けると、レイルは胸にわだかまっていた息を大きく吐いた。それでも、肺の中に泥がたまってしまったような感触が消しきれない。

何だろう。自分が大きなチェス盤の上のちっぽけな駒になった感覚。棋士がなにを考えて自分を動かしているのか知りようもなく、教えてもらえようもない。自分の力がなにに使われようとしているのか、全く分からないこの感覚。

これが、軍役に就くってことなのだろうか。今さらながら、そんな思いが湧いてくる。

「レイル」

後をついて来たリューネが、声をかけてきた。振り返ると、フードの奥で綺麗な口元が少しへの字を書いているのが分かった。こんなことではいけない、と思う。

「ありがとう。リューネ。助かったよ」

無理にでも笑って見せた。顔の筋肉を動かすのは腕の筋肉を動かすより難しいかも。

それでも、戦女神の唇がちょっとゆるむのが見えたのが嬉しい。

「ロルスン指揮官、騎兵隊の隊長だから偉い人なんだろうね。」

もっとザッツさんに教えてもらわないと、話し方とか礼の仕方とか、分からないことだらけだ」

必ず王都に戻ってもう一度ザッツに会おうと、レイルは改めて思った。それから、

「だけど、これからどうしよう。ただ帯同するだけだと……目的地も知らないし」

手がかりがあるわけでもなく、あたりに目を走らせながら呟く。第三街道は北西の隣国まで通じているということだけは知っていたが、まさかそこまで行くわけではないだろう。

「レイル。馬車を見に行こう」

リューネはそう言って、宿営所の裏手側を指さした。

「ザッツは馬車の中の人物を守れって言ってた。馬車を見に行こう」

「馬車、そっちにあるの？」

「宿営所の窓から見えた」

うなずいて、答えるリューネ。レイルは軽く腕を組んで、考えた。

「でも、勝手に見て回っていいのかな。邪魔するなって言われたのに……」

「構わない。いざとなっても、レイルの方が強いよ」

物騒なことをさらりと言う戦女神に、今度は苦笑いになるレイル。

「強い弱いの問題じゃなくてさ。騎士団を敵に回すのは遠慮したいよ」

「なんで」

「なんでって――」

それが普通だろ。そう続けようとしたレイルの口を、リューネが向けた言葉がつぐませた。

「分からないよ。レイルはザッツの言うことが正しいって信じているんだよね？」

問いかける戦女神の綺麗な声に響くのは、深い困惑の色だった。

再びはっとさせられるレイル。

そうだ。ザッツさんの判断は正しいと信じて、自分自身も正しいことをするためにここへ来た



はず。なのに、騎兵隊長に少し威厳を見せられたぐらいで、目的を見失うなんて。

レイルは自分の中でふくらんだ気恥ずかしさに逆に勇気づけられて、リューネの方へ歩み寄った。戦女神がほんの少し身体を引く。

――大丈夫。道を見失いかけたことを恥ずかしいと思えるうちは、僕は大丈夫。

自分自身にそう声をかけながら、そっと手を伸ばしてリューネの頭からフードを外した。戦女神の端正な顔立ちがあらわになる。

そこにあったのは、さっきよりももっとへの字になった口と、少しすねたようなカーブを描く眉。ちょっと上目遣いになってこっちを見つめる紅玉色の瞳には、やっと帰ってきた親を見る子供のような、抗議と安堵の混じった色。

「ごめん、リューネ。ちょっと迷った」

そう詫げるレイルの口元には、つい、苦笑いが浮かんだ。

その時に、なんとなくではあるけれど、戦女神のことがまた一つ分かったような気がした。

彼女たちは、守護する相手が信念を失うと、とてもとて困惑する。そしてそれはたぶん、今の僕が王都での暮らしや軍役に対して抱く不安なんかとは比べものにならないくらい、大きな心痛だ。

いつかリューネがしてくれたように、フードを取ったその手の指で、戦女神の頬をそっとなでた。

「でも、リューネがいてくれるから、もう大丈夫」

そう続けた言葉に、彼女はもう一歩下がってレイルの手元から離れた。フードを引き上げて、また顔を隠す。

「だったら、行こう」

短く言って歩き始めるリューネ。フードの奥にのぞく口元が安心したようにゆるんでいるのを見て、レイルもほっと息をつきながら足を踏み出した。

## ■馬車

チュテルナ王女殿下は、止められた馬車の中、しどけなくクッションの上に横たわって、自分の額越しに外の景色を眺めていた。こうしていると、視界のほとんどが空だ。

のんびりと流れる雲の下、視界をよぎって飛び去る鳥達。あんな風に自由に空を飛んでみたいなどという願望は、もう何年も前に捨ててしまった。

馬車の中も外も、これと言った物音はない。ちらりと視線を走らせてみると、侍従長は向かいに座ったまま居眠りをしていた。顔中しわだらけで、どこが目なのか分からないぐらいだ。

外に出てみたかったが、馬車の扉には鍵がかかっている。もちろんチュテルナ自身の安全のためでもあるが、一方で、彼女が勝手に馬車を出ないようにするためでもあった。

嘆くつもりはなかったが、ため息が出た。

起きているだけ無駄だ。目を閉じていよう。そう思って、クッションの上に頭を戻した時。分厚い馬車の扉越しに、わずかではあるが話し声が聞こえてきた。

馬車は確かに、宿営所の裏手に止められていた。そして確かに、タータの乗っていた馬車よりはるかに巨大だった。梶棒には六頭分の金具が付けられており、車体それ自体も非常に大きい。馬車というよりは小型の家に車輪を付けたかのようだ。

分厚い樫材でできた車体には壮麗なレリーフや飾り金具が付けられ、見るからにただ事でない印象を与える。

馬車の周囲には、リューネのものより数段長い槍を手にした兵士が並んでいて、「こんにちわ」といって近寄れそうな雰囲気ではない。

「警戒嚴重だなあ……」

宿営所の横からその様子を窺って、レイルは思わずうめいてしまった。同時に、これだけしっかりと警護された馬車とその中の人物を何から守るのか疑問になる。

「レイル」

放っておくとずんずんと先へ進んでしまいそうなリューネを背中側に押し込めているのだが、案の定、戦女神様は不満げにせつづく声を上げてきた。

ためらうつもりはないが、別に好き好んでいざこざを起こすこともない。

「……うん。よし」

小さく、一つ自分に気合いを入れる声を上げ、

「行こうか、リューネ。僕のそばを離れないでね」

背後を振り返って微笑みながらそう言うと、宿営所の横を抜けて馬車に歩み寄った。

周囲を固める兵士達がすぐに気づき、「止まれ、誰だ」と誰何の声を上げる。レイルはそこからさらに三步ほど進んでから、足を止めた。

「レイル＝エウリオン。この馬車の護衛を命じられて参りました」

背筋を伸ばして、はっきりとそう答える。兵士達は怪訝な表情でお互いの顔を見合わせた。 「あー。見ての通り、護衛は我々が行っている。何かの間違いじゃないのか？」

うちの一人が、少し口調を穏やかなものにして言葉を返してきた。

「いえ。間違いではありません。ザッツ＝コールドサイン部隊長の命令です」

タータがザレスで彼を評した「国軍期待の精鋭」という言葉が本当なら、ザッツの名前にはそれなりの信用度があるはず。そう考えて、レイルは凜と胸を張ったまま彼の名前を口にした。

案の定というべきか、その場にいた兵の何人かは聞いた名だったようだ。が、  
「彼は歩兵隊の隊長のはずじゃないか？」

「何で彼の部下がこんなところにいるんだ」

「というよりも、何で歩兵隊がこの馬車を守りに来る？」

むしろ混乱が深まったように見える。レイルがこそこそしていないので怪しまれているという風ではないが、事態がつかめずに困惑している様子ではあった。

やがて彼らが下した判断は、

「なあ、レイル……だったか。馬車を間違えてないか？」

ちょっと予想外のものだった。

「いえ。間違えてはいません。この街で馬車を守れと」

ぐらつかないように精一杯気を張って答えたが、馬車それ自体を確認する手立てがないのは自分でも分かっている。

「どんな馬車と言われた？」

聞かれてしまった。

「……ご、豪華な馬車だと……」

答えられることはこれしかない。

くそう。ザッツさん。王都に行ったらまずいちばんに「命令は確実に」って文句を言ってやる

。

幸いにしてと言うべきなのか、顔を赤くしながらのその答えは、周りの兵士達には受けたようだ。彼らにしてみれば、徴兵年齢に届くかどうかという新兵が意地の悪い先輩にだまされでもしてやってきたように見えていた。

「豪華な馬車か」「確かにそりゃそうだ」と肩をたたき合いながら笑いあう。

そんな、彼らを。

「間違えてない」

凜然とした声が黙らせた。リューネだ。決して大きくはなかったが透き通るその声は、耳を通してではなく直に魂に届くかのようだった。砂漠に水が吸われるように、笑い声が収まる。

振り向いたレイルの瞳に映る戦女神は、フードを払って、端正な面差しを兵士達に向けていた

。

柳眉を陰しくして彼らを睨みつけるリューネを軽く制して、レイルは続けた。

「間違えてはいません。確かに部隊長の指示は曖昧でしたが、ロルスン指揮官殿にも確認を取りました」

「ああ……そうか。それは、すまん」

気を抜かれたように、兵士の一人が詫びてくる。と、その時。

「騒々しい。何事だ」

馬車の中から、尊大ではあるけれど、檜材の壁を隔てても高く響く、澄んだ声がかげられた。

チュテルナは馬車の外で起こった話し声に、聞くとはなしに耳を傾けた。普段、この馬車の周りで兵士達の言葉が交わされることはあまりない。たいてい誰もが唇を引き結び、ただ黙々と役目をこなすだけだ。

それが兵士というものなのだろうし、それが王族の近くに寄る者の務めだ。下賤の声で王族の耳を穢してはならない。

だからチュテルナにとっては、兵士達の話し声はむしろ小鳥のさえずりよりも珍しく、ましてや、呵々大笑の声を聞くなどというのは記憶を探るのが難しいほどだった。

礼節のない連中と思うと同時に、興味も湧いた。彼らも自分の務めが分かっていないはずはない。それを一瞬でも忘れさせる出来事とは、何だったのだろう。

窓から外をのぞき見る。兵士達が互いに肩をたたき合いながら腹を抱えていた。その向かいにいるのは、二人の人影。

取り囲むようにして立つ背の高い兵士達で見え隠れして、はっきりとは言えないが、どうも自分と同じぐらいの年格好に思えた。

にわかに興味がふくらむ。彼らの姿を間近で見たい。予感とも言えるような感情に打たれて、ベッドのような座席から跳ね起き、短い階段状のステップを駆け下りてドアの前に立った。

居眠りしていた侍従長が目を覚まして制止してくる声を「黙れ」と一喝して、分厚い檜の扉へ向かい、精一杯胸を張って声を上げた。

「騒々しい。何事だ」

笑い声は止んでいた。外界と馬車を隔てる扉は黒く重く、向こう側で起こっていることを知る術はない。

一歩遅かったのだろうか。焦りが、チュテルナの胸の内を食むようだった。

ずいぶんと間があったように感じられ、

「恐れながら、殿下にはお休みのところ、お耳汚しをいたしまして誠に申し訳次第も――」

慇懃な声が返ってきた。普段なら最後まで聞くところだが、今日に限ってはやきもきした気持ちばかりが先に立つ。

「よい。何事だと聞いている」

「は。いえ……殿下のお気を煩わせるほどのことではございません」

「気ならずで煩った。でなければここでこうして声を出してはいない。何事があった」

「いえ。衛兵引き継ぎに若干の手違いがございまして、その確認のために手間取っておりました」

「引き継ぎであのような笑い声が起きるのか。」

よい。ここを開けよ。わたしが直接検分する」

全身の気力を集めての、虚勢。向こうにはさぞかし強い声に聞こえているのだろうが、窓もない暗い檜材の扉の前に立つチュテルナにとっては逆に、重くて冷たい金属的な木材がのしかかってくるように思えていた。

侍従長が「王女殿下、なりません」と手を引こうとするのを、

「下がれ。

どうした。聞こえんのか？　ここを開けよ」

強く制して繰り返す。

「は……いえ、それは……」

扉の外で言いよどむ声。やはり駄目なのか。ふくらんだ期待感が失望も倍加し、初めてのことでないはずなのに膝が震えた。

「わたしの背に羽が生えて、扉を開けたとたんに飛んでいくと思っているわけでもあるまい。

開けよ。今回の件、それで不問にする」

本当は、もっと駆け引きすべきなのだろう。が、まだ幼いチュテルナには、これ以上声を上げ続けるだけの気力はなかった。最後の言葉が震えないようにするだけで精一杯。

後には、沈黙だけが残される。

……無駄、だったか……

チュテルナはそれ以上、黒い櫛の扉を見つめていられずに、目を落とした。侍従長がもう一度諫める声をかけてくる。きびすを返し、階段を一步登りかけようとしたその時。

カチリと掛け金の外れる音がして、黒い扉がゆっくりと開かれていった。

## ■幼姫 1

兵士の中でいちばん歳嵩の一人が、馬車の扉の前に片膝をついて中の人物と話をしている間、レイルとリューネは残った兵士に両肩を掴まれていた。逃げないようにだろう。

リューネの瞳は怒りに燃えているようで、彼女がこんなに感情をあらわにすることがあるのかと、レイルはそんなことの方に気が行っていた。もっともそれが、乱暴に押さえつけられているからなのか先ほどの怒りが収まっていないからなのか、その他の何かなのか、それは分からない。

ともあれレイルは、これで馬車の中の人物に会うことができそうだと思っていた。叱られるのかも知れないが、仕方ない。リューネだけは咎め立てを受けなくて済むように、上手く説明をしよう。

自分でも不思議なほど、レイルは気楽な気持ちでそう考えていた。リューネに言われた通り、自分で正しいと信じることをしただけだからだろうか。

やがて、扉の前にかしずいていた歳嵩の兵士が残る全員の方を向き、大きく目配せをした。それを合図に、兵士達は扉の前の直線上を避けるようにして広がり、片膝をつく。頭を垂れる。

レイルとリューネはぐいっと肩を押され、その場に膝をついた。少し距離はあるが、扉の真ん前だ。

逆らっても仕方ないのでその姿勢のまま、隣で同じ格好をさせられたリューネに声をかけた。

「大丈夫？ リューネ」

「レイル。彼らは、レイルのことを侮ってる」

悔しそうに答える、リューネ。柳の眉がしかめられ、下唇がきゅっと引き絞られていた。

彼自身、いい気分はしていなかったけれど、

「……いいよ。気にしない」

自分のことを自分以上に悔しがっている戦女神を見て、レイルは微笑んだ。

「リューネは分かってくれてるだろ？ だから、気にしない」

建前ではなく、そう思えた。今は力を揮うべき時じゃない。理不尽な扱いに耐えるのも、きっと強さ。

「たぶんそれを――」

続きが、言葉になって口をついていた。

「――あの馬車の中の人も、必要としている」

チュテルナは階段の一番下に足を戻し、ゆっくりと開かれていく扉の前に立って待った。入り込んでくる外気が心地よい。鳥のさえずりや風や葉擦れの音が、窓を通すのとは全く違う豊かさでチュテルナを包んだ。

扉が開ききる。兵士は全員かしずいていて、正面には、先ほどちらりと目にした二人組が膝をついて控えていた。

少年と少女。少年の方は木訥そうな面立ちからまっすぐな眼差しを向けてきて、少女の方はこの世のものとは思えないほど整った顔に輝く紅玉色の瞳で、少しこっちを睨んでいるようだった

馬車の外へ、足を踏み出す。兵士達が皆顔を伏せている中で、二人だけは自若として顔を前へ向けていた。

「殿下、おみ足が」

「よい。靴など換えれば済む」

侍従長の言葉を切り捨てて、歩みを進めるチュテルナ。目の前の二人に動じる風はない。歳は自分より少し上だろうか。二人の、それぞれに色の違う、だが同じ澄んだ瞳は、しんと自分に据えられたまま逸らされることがなかった。

三歩ほど離れたところで、足を止める。

「先ほどの騒ぎ、お前達か？」

「そうです」

「見たところ、他の兵士とは拵えが違うようだ。それで引き継ぎに手間取ったのか」

「いえ。引き継ぎに来たのではありません」

少年の方が、顔を上げたまま答えた。チュテルナは小柄な方だったが、さすがに片膝をついていると彼よりも上に顔がある。

こんなにまっすぐ目を見られながら言葉を交わすのはいつ以来だろうと思って、不意に気恥ずかしさがこみ上げてきた。

「では、何だ。なにをしに来た」

つい、少し顔を背けるようにして、問う。少年は変わらない凜とした眼差しのまま、答えてきた。

「あなたを、守りに来ました」

## ■幼姫 2

馬車の中から姿を現したのは、金色の美しい髪を綺麗に結い上げた少女だった。線が細く、肌の色はリューネに負けないほど白い。少しきつい印象のある目には大きなエメラルドグリーン of 瞳が輝いていて、立ち上がれば自分の方が頭半分ぐらゐは高いだろう。

レイルは彼女を見た瞬間、ツリ目の子犬を連想した。それでも彼女が身にまとう高雅な品格は本当のもので、その出自が並大抵でないことは黙って立っているだけでも伝わってくるようだった。

まっすぐこちらに向かってくる少女から目をそらさずにいると、彼女は三歩ほど離れたところで足を止め、言葉をかけてきた。澄んだ声。だけどどこか陰のある響き。

顔を向けたまま答えていると、少女はちょっと困ったように視線を逸らした。不審がられたのだろうか。

「なにをしに来た」と問われる。レイルは精一杯の誠実さを込めて、告げた。

「あなたを、守りに来ました」

答えたとたん、少女の白磁の肌が、さっと紅潮した。

チュテルナは心臓がどうにかなりそうだった。

初めて顔を合わせた少年が口にした、英雄譚にでも出てきそうな言葉。

だが、それを告げた相手は白馬にまたがってもおらず、壮麗な金の鎧をまとってもおらず、今さっき、ここでひたすら王族の不機嫌という嵐が吹き去るのを待つ兵士達にさえ笑われていた、一人の少年だ。並みの人間なら、自分で吐いた言葉が恥ずかしくてその場を逃げ出すのではないか。

それでも彼のまっすぐな眼差しは、小揺るぎもせずチュテルナの瞳を見据え続けている。銜のない口調は、それを口にした本人こそが誰よりもそれを信じていることを証明しているように思えた。

視線で人を幻惑する、新手の呪術師か？ チュテルナはそう考えることで、どうにか心の平衡を保とうとした。

「ま、守ると言って」

何か言っていないと気が定まらず、口を開く。

「わたしが誰だか知っているのか？」

知らないはずはないと思つての言葉。が、気恥ずかしさに少し横向けた顔からチュテルナがちらりと目を向けて問いかけた少年は、きょとんとした顔を浮かべると、その時初めて視線を逸らした。

「……いえ」

恥ずかしそうな小声で返ってくる、否定の言葉。得体の知れない高揚感が支えを失い、失望を通り越して一気に怒りに変わった。

ほうら見ろ。目をそらしたとたん、術が解ける！

胸中でそんな声を上げながら、チュテルナは少年に向かって詰め寄った。



「お前、名は何という！」

兵士達が首をすくめるのが、見ていなくても分かった。王族に睨まればどなたとばかりが来るか分からない。そう考えているからだ。

そしてそれは、少なくとも一部の王族に関する限り、決して間違った認識ではない。チュテルナを含めて。

が。

「「レイル＝エウリオン」」

畏怖に打たれるでもなく少年はもう一度顔を上げ、なぜか隣にいる少女まで声を合わせて、その名を告げてきた。

わずかに気圧されるチュテルナ。同時に、少女の存在が不意に気になりはじめた。

何なのだろう。どうしてこの少年と一緒にいるのか。兄妹のようではないし、拵えは立派だが、軍役に就いているような風貌でもない。

――この少女も、レイルに守られているのか？

考えたとたん、いい知れないざわめきが胸の奥を走った。我知らず口元に力が入り、奥歯がきゅっと鳴る。

「わ、わたしは」

喉の奥に滞留した空気をはき出すように、チュテルナは口を開いた。

「わたしはチュテルナ＝リューレイオー＝エリミュエステアリ！ イーグリア国先王の第二妃第三子、チュテルナ王女殿下なるぞ！」

下賤に名乗るなど、本来あってはならないこと。将軍級の武人を含めて、王家以外の者に自分から名乗ったことなどかつてない。

それでもチュテルナは、告げずにはいられなかった。

息荒く言い切った、その視線の先で。

レイルは静かに、「はい」と答えを返してきた。あの、まっすぐな眼差しとともに。

彼が自分の名前を受け止めてくれた。そんな感覚に、チュテルナの心臓が再び熱くなる。

にもかかわらず、

「長いからチュルリーって呼ぶ」

レイルの隣に控えている少女は当たり前のような口調で、全てをぶちこわしにするような一言を放ってきた。

「ばっ――ぶっ――」

馬鹿者。無礼者。そんなことを言おうとしたが、かつてない侮辱に言葉が出ない。おまけに隣でレイルまでもがおかしそうに微笑んでいる。

「よろしいですか？ チュルリー殿下」

怒りに肩を震わせていると、にこやかに問いかけられた。その裏表のないレイルの笑顔に、返す言葉が見つからないチュテルナ。

普段なら、侍従長や将軍や、あるいは取り巻きの貴族や誰かがすっ飛んできて、チュテルナの機嫌を取るためにこの二人をあるいは罵倒し、あるいは掴み飛ばし、あるいは衛兵に連行させた

だろう。

でも、今ここにはチュテルナと彼らしかいない。兵士達は顔を上げずにかしずいたまま。侍従長は自分で馬車に置き去りにしてきた。

不意に、自分は独りだと実感した。目の前にいる彼らでさえ、その無邪気さが現実の酷薄さに勝てるものではないことを知らないから、そこにいるに過ぎない。

「……わたしを守ると言ったな」

うつむきそうになる顔を必死で支えながら、口を開く。

「はい」

自分の問いかけに答えを得ていないことなど気にしてもいないように、レイルがうなずいた。

「……わたしの名前を知った後でも、同じことを言うのか」

「はい」

レイルの声に、迷いはない。

「わたしの敵は大きいぞ。それでも、守りきれぬのか？」

「……大きさによりますが」

返された答えに、むしろ笑みが浮かんだ。正直者め。ならばわたしも、正直に教えてやろう。

「例えばこの騎兵隊全てぐらいだ」

レイルの方を向いて一息に告げ、チュテルナは、自分のまなじりから雫がこぼれ落ちるのを感じた。自分とさして歳が変わらない少年と少女でどうにかできる相手ではない。それが分かっているからだ。

さあ。もういい。一礼してここを去れ。

胸の中で、そう呟くチュテルナ。

彼女の見つめる前で、レイルと少女はお互いにちょっと顔を見合わせると、微笑みさえ浮かべながら立ち上がった。

……去るか。

思っ、目を閉じる。光の閉ざされた暗闇の中で、冷たい檻に再び自分が囚われるのを感じた。

。

しかし。チュテルナが次の瞬間に本当に感じたのは、肩に置かれた手のひらのぬくもりだった。

。

驚いて瞳を開ける。

「大きい声では言えないですが」

目と鼻の先にレイルが立っていて、少し周りを気にしながら、小声で、だが確かに答えてきた。

。

「その小ささでいいのなら、あなたを守りきれます」

頭が熱くて、彼が何を言っているのか理解できなかった。ただ「守る」と言い切ってくれたその言葉だけが響き続けている。

胸と鼻の奥に熱湯が詰まったような感覚。泣きたいのに涙が出ない。

王族どころか貴族でさえないレイルに肩を触れられたことや、立ち上がって言葉をかけられたことや、そんなこと全てがもうどうでもよかった。

「ならば――」

どうにか声を絞り出し、レイルの願いに応えるのが精一杯だった。

「――わたしのことは、好きに呼ぶがいい」

## ■司令室

---

エメラルドの大きな瞳を、今にも崩れてしまうのではないかと思うほど潤ませたチュルリーが、きびすを返して馬車に戻った後。レイルは彼女の肩に触れた手を見下ろして、きゅっと握った。

細い骨。薄い皮膚。文字通り、触れれば折れそうな身体を震わせて、チュルリーは一人で立っていた。

言葉は尊大でも、態度は権高でも、まだまだザッツに頼りたいと思ってしまう未熟な自分自身と比べてさえ、チュルリーは幼い。

守らなければいけない。守ってやりたい。

そんな思いが、強くわき上がる。

「おい、お前達」

扉が閉じられ、もう一度鍵がかけられると、兵士達がレイルとリューネの周りに集まってきた。腕を掴まれる。

「とんでもないことをしてくれたな。」

来い。ロルスン様に説明してもらおうぞ」

そのまま、乱暴に引っ張られる。目をやると、リューネも同じように、マントを掴まれてひきたてられようとしていた。紅玉色の瞳と、目が合った。

水晶の鐘の音が鳴る。

レイルは自分の腕を掴んでいる兵士の手を振り払い、そのまま手首を掴んで脇の下をくぐり抜けた。前のめりになる相手の身体を向こうに押しつけ、彼が手元からこぼした槍を掴む。その石突きでリューネのマントに手をかけた兵士の足下を払い、石畳に転がした。

さらに寄ってこようとしている二人の兵士をまとめて槍の柄で押し返し、受け止める位置にいたもう二人を巻き添えに、湿っぽい宿営所裏の石の上へ突き飛ばす。

最初に投げ飛ばされた者と最後に倒れた兵士の石畳に転がる音が重なるほどの早業。

倒された当人達はもとより、周りで見っていた兵士達もあつけにとられる中を、

「放してください。自分で行きます」

レイルは悠然とそう言って、歩き始めた。

「レイル。馬車の中にもう一人いたよ」

遠巻きについてくる兵士達を従えるようにして宿営所の中へ向かうレイルに、隣を歩くリューネが言った。戦女神は目がいいのか、それとも注意力がいいのか。

「どんな人？」

問い返すレイル。

「おばあさん。わざわざ守らなくても、そろそろいいかも」

リューネがものすごいことを明るく言う。レイルは苦笑いを浮かべて、

「リューネ。イーグリアの社会規範では、おばあさんは大事にすべきだってことになってるんだよ」

穏やかに注意を促す。戦女神は少し解せない顔をした。

「みたいだね。でも分からない。タータは朝起きると、顔が若く見える手入れをしていたよ」  
お化粧のことだろうか。そうは見えなかったんだけど、なんだか聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がする。

「おばあさんが大事にされるなら、タータもおばあさんに見える手入れをすればよかったのに」  
「うん……そうだね。どうなんだろう。難しいね」

無邪気な感想を口にするリューネに、苦い微笑みが止まらないレイル。

「でも、タータさんに会っても、その話はしない方がいいよ。  
たぶんその……タータさんも分かってるから」

司令室に入り、レイルは自分の口から馬車の前で起きたことをロルスン指揮官に告げた。  
相手が激昂するかも知れないと覚悟してきたが、指揮官は重厚な顔を陰しく歪めはしたものの、声を荒げることはなかった。ただ、

「レイル＝エウリオン。王女殿下が直接お言葉を賜ったのであれば、それについて私から言うべきことは何もない。

ただし、規律を乱す行動は慎みたまえ」

低い声で、そう訓告してきた。

守るべきと信じた馬車に近づいた。それが規律を乱したことになるのですか？

そう言い返してもよかったが、レイルはやめておいた。ここでむやみと事を荒立てても意味はない。チュルリーは「例えばこの騎兵隊全て」と言っていたが、少なくとも今のところ、ロルスン隊がチュルリーに害をなそうとしている様子は見あたらない。

「僕は僕の信念に従って行動します。規律を守ることも、その一つです」

レイルはしっかりと胸を張ったまま、ロルスン指揮官を見据えてそう答えた。

## ■セルバソン城

その城が全体に重苦しい雰囲気をもっているのは、垂れ込める黒雲の下で水面の多い場所に建っているせいだと思いたかった。

チュルリーの馬車と合流してから五日後。ロルスン騎兵隊に警護された一行は、ダーションとの国境が迫る湖沼地帯までやってきていた。国境といっても明確な目印があるわけではないが、それでもあと数時間も西に向かえば、誰もがダーション領だと認識する土地に入ってしまう。

周辺には小さな池が無数に広がり、少し先の方では大きな湖が、鋭角な鱗を敷き詰めたような波頭を湖面にざわめかせていた。土地が湿潤なので周りには木々が多く、天気さえよければ一種の野趣が横溢しているんだろうとは思う。

レイル達はチュルリーの馬車から少し離れた後方を、相変わらずリュウネが手綱を取って走っていた。からかい言葉の一つも飛んできそうな有様だが、騎兵隊ともなると規律正しく粗雑さとは無縁で、無駄な声かけられることはない。きっと人づてに伝播しているはずの、レイルが見せた人間業と思えない身のこなしもまた、彼らの口をつぐませているのだろう。

「セルバソン城」

「うん」

鞍の後ろでリュウネが何かを確かめるように呟いたのが聞こえて、レイルは相づちを打った。

ダーション国境を守備する要害の一つとして建造された城塞。王侯貴族の住まいや社交場として作られたものではなく、戦争のためだけに建てられた代物だ。そのため、高さと優美さを競う尖塔が林立するような居城とは違い、あらゆる構造体が重厚で頑健。

いわゆる「お城」から受ける印象が白鳥のような壮麗さだとすれば、セルバソン城のそれは頭を低くして角を向け、捕食者さえも踏みしだこうとする水牛の群れのようなのだ。

「こんなところに、チュルリーは何の用なんだろう」

「きっと、聞いてみるのがいちばん早いよ」

口をついた疑問に、リュウネが答える。目を馬車に転じてみた。初めて顔を合わせ、言葉を交わした時以来、その大きな車体からチュルリーが出てくることはなかった。

今も馬車の扉は固く閉ざされ、鍵がかけられている。窓にチュルリーの顔がのぞくこともない。

「……城に着いたら、機会があるかも。そうしたら聞いてみよう」

そう言ったレイルは、リュウネが背後で、黙ったままうなずいたのを感じた。

チュルリーの馬車を取り囲む隊形のまま、一行はセルバソン城に入った。

猫が人間用の扉を見上げればこんな気分になるだろうと思うような巨大な門扉が開かれると、簡素ではあるが楽隊がラッパを鳴らし、ドラムを打つ。

居並んだ兵士達が槍を胸の前に立て、馬車の進む道を囲っていた。彼らの背後で、城内の世話をしているらしき平民姿の人々が、かごに入れた花びらを道筋にまいている。

城塞を囲む分厚い胸壁の外からでは分からなかったが、城の中庭から先では、すでに歓待の用意が整えられていた。

「……けっこう、地味」

「そうなの？」

リュウネの呟きに、少し驚いて問い返すレイル。田舎町出身の彼にはこれでもさすが王族を迎えるだけはあると思えたが、戦女神として人界の知識を一通り頭に入れてきたらしいリュウネには、やや小規模に映るようだった。

「儀仗兵じゃない。礼具も揃ってない。人数少ない。楽隊のラッパが一種類だけ。先導の馬が一頭だけだし白馬じゃない……」

不足点をあれこれとあげつらっていくリュウネ。それが不満なのではなくて、自分の知識と合致しないのがなぜだか分からないという声だった。

それでも、自分の背中にひどく口うるさい小姑がくっついているような気分になって、レイルは自然と苦笑いになった。

「仕方ないんじゃない？ 国境近くの城塞なんだし、パーティーをしに来たんじゃないんだろうから」

「……うん。でもこれだと――」

リューネがもう一度周りを見回して、続けた。

「――チュルリーは戦争に来たみたい」

## ■チュルリ一殿下

チュテルナは馬車の振動が変わるのを感じながら、クッションの上に身を起こしてじっと目をつぶっていた。

軟らかい土の上を進んでいた車輪が石畳に入り、馬車に伝わる感触が固く鋭いものになるのが分かる。

……着いた、か。

胸中で呟きながら、鼻から軽く息を吸い、吐く。楽箏の音が聞こえてくる。

そのうち馬車が止まり、城門の門ほどもかたくなに閉じられていた扉の鍵が、忌々しいあっけなさで開かれるだろう。そして自分はまた別の籠に移される。

城に品格を与えるという逗留がいつまで続くのか、チュテルナには分からない。

……私が死ぬまでではないか？

そんなことが頭に浮かんだが、それを自虐的だとは思わなかった。王族に生まれついて王になる機会を与えられなかった者の、ありふれた運命だ。

それが敵兵の白刃によってもたらされるものなのか、腹心とっていた者の毒杯によってもたらされるものなのか、あるいはもっとみすぼらしく、老いさらばえ病を得ることによってもたらされるものなのかの違いがあるに過ぎない。

そういう運命にさらされた者を、チュテルナ自身、手を伸ばせば触れられる距離で何度も目にしてきた。

それもまた、「高貴なる義務」か――

そう考えた瞬間、唐突にレイルの顔が思い浮かんだ。「守る」と言ってくれた言葉が耳の奥で蘇る。

弾かれたように、目を開けてしまった。心臓に熱い湯が流れ込んできたかのように、胸が高鳴っていた。顔が熱っばい。

「……ばっ、馬鹿者！」

誰を叱りつけているのか自分でも分からない罵倒が小声で漏れ、向かいに座った侍従長がいぶかしげな顔を向けてくるのが分かる。

威儀を正すように咳払いをし、「わたしを迎えるにしては、花女が少ないではないか」ととっさにいちゃもんをひねくり出した。侍従長が恭しく頭を垂れる。

「まあ、よい。今回は赦す」

窓の枠木に頬杖をつき、そう続けるチュテルナ。暑くもないのに額へ薄く浮かぶ汗を感じながら、窓の外に目を移した。

探すまいと思っても、つい目が人影を追ってしまう。

……あいつ、いないではないか。

失望と怒りの緋い交ぜになった感情が胸にわいたが、窓が小さいから彼の姿を確認できないだけだと思うことで、魂をすりつぶすようないつもの不安にはどうにかとらわれずにすんだ。

あんな馬鹿者が、そうそう簡単に約束を諦めたりするはずはない。レイルが馬車の周りのどこかしらをついてきている光景を思い浮かべながら、自分にそう言い聞かせる。



「馬車を、降りるときだな」

確かめるように呟く、チュテルナ。

馬車を降りるときにレイルを見つけ、自分を守るように命じる。その一瞬を逃してしまうと、次に彼と接触できるのがいつになるか分からない。

チュテルナはその時に備えるように、一つ大きく息をついた。

やがて、馬車が止まった。梶棒の楔が外され、車輪が固定される振動が伝わってくる。これから、礼具や祭具を携えた兵士がチュルリーの行く道に沿って並び、先導の貴族が馬車の扉の前に控え、替えの靴やら扇子やら、チュルリー自身の小物を世話する小姓が絹の小座布団を捧げ持って扉の横につく。そうした諸々の準備が整えられてようやく、馬車の扉が開いてチュテルナ王女殿下は臣民の前に御姿を現す。

王族として、普段は当たり前で、一つでも不手際があろうものならにわかに機嫌の悪くなるその手順を待つ間が、今はどうにも落ち着かない時間になっていた。早く扉を開けて欲しいと思う気持ちと、開けないで欲しいと思う気持ち。

本当にいるのだろうか。もうすでに、騎兵隊の誰かにつまみ出されてしまったのではないだろうか。

そんな不安に憑かれて、何度も窓の方をふり返ってしまう。

「王女殿下、お加減でも？」

侍従長が不審げな眼差しで慇懃に訊ねてくる。慌てて、「何でもない」と口の中で答えた。鼓動が早まって、喉が渇く。今なら毒杯を出されてもあおってしまいそうだ。

馬車の外で、ひときわ高いラッパの音がした。侍従長が深く頭を垂れ、促してくる。チュテルナは麗美な座面から腰を上げ、扉の前に立った。

鍵が外され、重く黒い扉がゆっくりと開かれていく。曇天の下、土汚れた印象の石畳で覆われた中庭が見渡せた。

居並ぶ人々が、貴族も兵士も平民も、一斉に膝を折って頭を垂れ、かしづく。一見して見渡せるのは、彼女を迎えるには寂しい人数と陣容。が、そんなことは気にもならなかった。

――いない。

兵士の列の中に、レイルの顔がない。

チュテルナは馬車の入り口に足を止めたまま、思わず身を乗り出すようにして左右を見渡した。

「王女殿下、いかがなさいました？」

後ろから、先に進む様子のない彼女をいぶかしんで、侍従長が声をかけてくる。当然、そんな言葉に応えている余裕はない。

……落ち着け。あいつは一人だけ拵えが違ったし、フード姿の少女とも一緒にいた。それを目印にすれば、きっと見つかる……

力が抜けて崩れそうになる膝を押さえながら、自分に言い聞かせる。もう一度、今度はゆっくりと、馬車の左右に目を向けた。

「……あ……」

思わず、声が出てしまった。

まるでそれが聞こえたかのように、馬車から少し離れた位置に控えていたレイルが顔を上げてくる。隣にいる少女も、一緒に。

「レイル……ッ」

呼びかける声が、喉からあふれた。その息が熱いのが、自分でも分かる。

そして。

「はい。チュルリー殿下」

立ち上がり、晴れやかに微笑んで答えたレイルの言葉に、その場にいた全員が凍り付いた。

チュテルナ＝リュレーイオー＝エリミュエステアリ。誉れ高いイーグリア王族。先王の第二妃第三子。手っ取り早く言ってしまうえば現王の異母妹で、王族の中でさえ高貴な地位にある。

それを、あろう事か、満場の前で「チュルリー」殿下と？

あまりの事態に、諫めるどころか声を上げる者さえ、誰もいない中。チュテルナ自身、ぎゅっと奥歯を噛んで、レイルを睨んだ。そうしないと、涙がまなじりからこぼれそうだった。

不安にさせて。そんな思いがなかったと言えば、嘘になる。

チュテルナが見据える少年の目には、なんの揺らぎもなかった。真っ直ぐに自分へ向け返してくるその瞳に、また身の内が熱くなるのを感じた。――怒りではない。

チュテルナは彼から視線を外すと、

「わたしが赦した！」

時間が止まってしまったような場に向かって、高らかにその一言だけを放つ。

それからもう一度、あり得ないような待遇を得た少年に目を向けて、

「レイル＝エウリオン。ついてこい」

語気鋭く命じると、歩き始めた。

## ■陛下と顧問

---

イーグリア王都タールホルツ、白亜の断崖の一室。

巨人の拳が大地を打つような重い音とともに目の前へいきなり置かれた大理石のチェス盤に、机へ本を広げて調べ物をしていたディトリットはさすがに少し驚かされた。

「お前、黒な」

前置きも何も抜きで、彼の主君の声がチェス盤の向こうから降ってくる。

イーグリア国王の政略/戦略顧問として登用されているディトリット＝ケイルドース。白亜の断崖と呼び習わされる王城の片隅にあてがわれた彼の執務室に、ノックもなし、一声もなしで唐突に入ってきたのは、イーグリアの現国王フーエルリート＝アントクレスト＝ソクウェイン陛下その人だ。

ついでに言うと、ディトリットの質素な執務机に載せられたチェス盤は、間違えて足の上に落とせば疑問の余地なく指全部と生き別れになりそうな代物だ。お側付きの小姓三人がかりで運んできたらしく、彼らはだいぶげっそりした表情になっている。

「なんだ、白がいいか？」

優美な一角獣を象ったチェス盤の足が希少な装丁本の紙面に食い込んでいるのをやや呆然と見守るディトリットに、国王フーエルリートは無邪気にも思える声音でそう続けてきた。

小さくため息をつく。実際の年齢は自分より二つ上だが、遊ぶと決めた時の無心なまでの集中力は子供以上だと知っていた。そこには、ディトリットにも都合があるだとかチェス盤のある部屋まで彼を呼べばいいだけだとか、そういう小利口な判断は全く介在の余地がない。

「いいえ、黒で」

ディトリットは膝の上に開けていた本を閉じると主君を仰いで答え、

「ここでは盤が傾きます。そちらへ」

と、板を渡しただけの簡素な長いすを指して見せた。

またこのチェス盤を持ち上げるのかよ。小姓達の無言の抗議が聞こえた気がしたが、彼にとっては本が上げる悲鳴の方が耳に痛かった。

「動きはあるか？」

盤に向かいながら、主君が問う。ディトリットは自分の駒からちらりと目を上げてから、

「もうそろそろ」

短く答えた。

「乗ってきたか」

「乗ってこなければ、来たくなるように仕向けるまででしたから」

「……湖沼地帯は戦場になるな」

「後顧の憂いを取り除けることに比べれば、些末な損害かと」

静かに駒を動かしながら、ディトリットは主君に言った。

「だがそれだけなら、予定を変更しなくてもよかったですらうに」

王もまた、一手を返してくる。ディトリットは軽く目を伏せるようにして、彼の考えが誤って

はいないことを伝えながら、口を開いた。

「チュテルナ殿下の使い道が増えました。それを活かさない手はありません」

## ■チュルリーとリューネ

毎度のことだが、チュルリーは機嫌が悪かった。窓辺に置かせたソファに腰を下ろし、少し広めのおでこに無愛想なしわを刻んで、外を眺めている。

セルバソン城の最上階に設えられた彼女の居室は、戦時用の城塞にしてはよく努力したと言ってやっていい居心地の部屋だった。

調度品は豪華ではないがよく吟味されたものが運び込まれているし、広さも、扉のない開口部で間仕切りされた間数もそれなり。窓は、最上階ということがあってか、戦用の城だと思えないほど広く取られている。

その窓からはセルバソン城の周辺が一望できる。雲間から太陽ののぞくとき、差し込んだ光の水晶柱が湖沼地帯の上を滑っていく光景は、なかなかに見事だった。湖面や波頭や、あるいは雨に濡れた岩の角が、その瞬間に陽光を弾いてきらめく様は、土をなでるだけで宝石を作ったという魔女のおとぎ話を思わせた。

総じて、あの馬車の中よりもずっと居心地がいい。相変わらず自由な外出はできないし、どこぞの国の呪いの置物なのかと思うような侍従長も始終一緒にいるが、その点にはすでに慣れてしまっていていちいち不機嫌を覚えるような段階を超えた。

気に入らないのは、

「レ、レイルはどこに行ったのだ。あいつはわたしを守るのではないのか？」

あの少年の鶯色の瞳が、自分の目の届く場所にないことだ。

いらだち任せに、自分でも分かっていることを口に出さずにいられない。それに対して、

「レイル、城の確認中だよ」

彼の代わりに自分と同じ部屋にいる、あのフードの少女が律儀に答えてきた。

歳は十六ぐらいか。レイルよりも少しだけ年下に見え、その容貌はおおよそ思いつく限りの美を形容する言葉を重ねないと追いつかないほど端麗で美しい。口の利き方がなっていないところだけは腹に据えかねるが、それさえなければ側女として重用したいとさえ思わせる。

リューネ＝ティアシール。

この部屋に入ってしばらく後、ひとしきりチュルリーを憤慨させたり驚かせたりした後で、彼女はそう名乗っていた。

レイルが自分を「チュルリー殿下」と呼び放ち、また自分から「わたしが赦した」と是認した、中庭での一件。あの後、あまりの事態に先導も忘れて膝をついたままぼかんとこちらを見上げていた貴族を蹴飛ばして我に返らせ、この部屋まで案内させた。

ドアが開けられ、思っていた以上によく尽くされた部屋が目に入ってきた。足を踏み入れる。てっきりレイルもついて入ってくるのだろうと思っていたが、彼は扉の前で足を止めてしまった。

そして、隣を歩いていたフードの少女に顔を向け、もともとそういう話だったかのように、軽く声をかけた。

「リューネ。あとお願いね」

「うん。城の見回り？」

「そう。確認しておきたいから」

「一人で大丈夫？」

「たぶんね」

一人ゆっくり足を進めて部屋に入るリュウネとの間で当たり前のように交わされていく、二人の会話。自分には立ち入りがたい絆がそこにあるように思えて、知らず知らず手元に力が入るのが分かる。

そしてレイルはそれっきり、チュルリーの方を見ることもなく扉を閉めた。

「な……っ」

王女の部屋に足を踏み入れるのは躊躇があるのだにしても、一言声ぐらいはかけてくるだろうと思っていたチュルリーは、重い木の音と共に閉じられた扉に向かって妙な声を上げてしまった。

リュウネがこちらをふり返り、フードを取った。およそ人間離れした端正さの面差しがあらわになる。

彼女はそのまま、扉の方を向いて立ち尽くし険しい表情を向けている自分に気を払うようなそぶりさえ見せず、まっすぐ部屋の中央を横切った。

「……どこへ行く」

目の前を、一礼するわけでもないどころか目を向けることさえなく歩みすぎる少女に、腐るほど言いたいことがある中からそれだけ選び出して口にするチュルリー。

「窓。外を見るの」

リュウネが軽やかに振り向いて、答えてくる。「窓？」と、ついあざけるような笑みを口元に浮かべた。

「物見遊山にでも来たつもりか？」

「んー。チュルリーは戦争に来たんでしょ？」

誹り言葉にあっさりと言われた一言。その響きに、チュルリーは心臓をわしづかみにされたような気がした。

「な……っにを、馬鹿な」

胸元に詰まった声を吐き出すようにして、少女の言葉を否定する。

「そう？　じゃあ、なにをしに来たの？」

無垢な印象さえある眼差しをチュルリーに向けながら、リュウネは問い返してきた。窓辺に立ち、石の肌にはめ込まれた木枠に細くて白い指をかける。風雲と春陽の縋いあわされた景色を映し出した窓のそばに立つ、凜とした戦装束の少女。

その光景に、一幅の絵を前にしているような感覚を覚えながら、

「……この城に逗留することで、品格を与えるために来た」

答えるチュルリー。

「そうなんだ。よかった。レイルが安心するよ」

その時初めて、リュウネは嬉しそうに笑った。その笑顔を直視できずに、つい目をそらす。

囿らずも戦装束の美しい少女が口にした、戦争という言葉。ダーション国境という場所。ここに寄越されたのが自分だという事実。

チュルリーは自分の中で、彼女自身信じようとしていた城塞に品格を与えるという建前が、見る間に腐朽していくのを強く感じた。

窓辺からどくようにとリューネに命じ、侍従長には人を呼ばせて窓の傍にソファの一つを移させる。

座面に身を沈め、窓枠に肘をついて、外を眺めた。

国境の湖沼地帯。厚い雲を貫いて地表を照らす陽光の柱。旗をたなびかせる風。窓から一望できるその光景が、敵国の兵の黒い甲冑姿で埋め尽くされる場面が見えた気がした。

素裸で黒い泥沼の中に沈められたような怖気が全身を包んだ。

そんな幻影を追い払おうとするように、きつく目をつぶる。鳶色のまっすぐな眼差しがまぶたに浮かんだ。

守ると言ってくれた少年がそばにいないことが腹立たしくて、不安だった。

## ■セルバソン城のレイル

「……まいったな」

レイルはセルバソン城の一階で、少し途方に暮れていた。

チュルリーの居室がある四階から、一通り三階、二階と見て回ってきた。が、本当にただ見て回っただけで、一体何を頭に入れるべきなのか、何に注意を払っておくべきだったのかが分からない。今この一階に下りてきて、レイルの頭に残っているのは漠然とした城内の間取りだけだ。

おまけに、一階の広さは二階から上の比ではない。もともと戦時用の城で一階は将兵集合のためのスペースでもあるから、高い天井を支える柱だけが並ぶ大広間が見渡す限り続いている。広間にはいくつもの松明やランプがかかげられており、鎧戸も開け放たれているので明るい。戦時ではないので城内の将兵や生活者のための道具が所々に積まれ、平服と甲冑姿がそぞろに行き交っていた。正面の大扉も開いているので、必要であれば中庭にも出られる。そこだけでザレソ一の大屋敷がいくつもが入ってしまうのではないかと思うような広大な中庭の向こうには、重厚な城壁が見えていた。

何に手を付ければいいのか分からず、つい、ザッツさんがいてくれればという気持ちになる。そんな自分に気づいて、慌てて頭を振った。

王都に入れば、ザッツさんに教を請う機会はきっとたくさんある。そのためにもまず、ここを自力で乗り切らなければいけない。

緊張感を呼び起こすように拳を握りしめて、再び歩き始めた。石柱の一つが近づいてくる。何気なく手を触れた。その分厚い石の表面にいくつもの矢じりや切っ先の痕が刻まれているのに気がついて、レイルは不意に自分が戦場にいることを実感した。

ここを攻める身になった時のことが、にわかに脳裏へ浮かぶ。

味方とともに雪崩を打って大広間へ続く正面大扉へ殺到し、守備兵と打ち合いながら広間の中へと切り込んでいく。ある程度中に食い込むと、両翼から守備兵の第二陣が圧迫してくるだろう。その頭越しに、驟雨のような音を立てて矢が飛来する。後ろに続く友軍の圧力を感じながら前へ前へと押し出すうち、やがて攻め手側が広間を埋め尽くす。両翼の壁にある扉からこの小部屋に入ると、またそこで守備兵との斬り合いだ。この時点で、攻め手はどのくらいが損耗しているだろう。 四分の一？ 半分？

一気に小部屋を制圧しようとしても、部屋を区切る何枚もの壁が邪魔をする。開口部は交互についているから、空間を長い距離移動しなければならない。周りは怒号と苦鳴で溢れているに違いない。踏みしめる足の下にあるのは石の床ではなく、きっと、敵兵か友軍の遺骸だ。

目を戻し、正面の大扉から中庭に出てみる。大広間よりもさらに広く、差し渡しは二〇〇メートル四方以上。セルバソン城を囲う城壁に城門があるのはこちらとは反対の、ダーション側だ。

敵が一拳になだれてくるのを防ぐため、直線で移動できる距離をどこまでも切り詰めている。初めて目にした時は、城壁に城がお尻を向けていて妙な作りだと感じた。が、今ではその意味するところが実感できた。

便利さだの生活の用だの優美な外観だの、そんなものは全て後回し。ここは戦場で、それが全



てだ。

城の外壁に沿って、中庭を城門のあるダーション国境側へ回ってみた。こちらも広い。振り返って見上げる城塞は、床面積で言えば六倍はある一階部分に、二階から上を載せたような形をしていた。一階の天井、二階から外へ続いている床面は、弓手の配備場所となるのだろう。

顔を城壁の側へ戻してみる。チュルリー達とともに入ってきた城門は今は閉ざされ、雲間からのぞく陽射しの下に人気もまばらだ。彼女を歓待するためにまかれていた花びらが、吹き寄せる風にゆらりと舞っている。

わたしの敵は大きいと言っていたチュルリーの言葉が思い出された。ロルスン騎兵隊全てほどだという彼女の言葉は、この広漠とした印象のあるセルバソン城の中で思い浮かべると、それでさえもまだ過少だったような気すらしてくる。

レイルは何かを確かめるように、腰に下げた剣の柄頭に手を載せた。ここが本当に戦場になった時、自分はチュルリーを守りきれぬだろうかと自問せずにはられない。

ザッツの命令とお願いとに応え、チュルリーとの約束を守れるだろうかと。

「レイルッ！」

出し抜けに、頭上から鋭く声が降ってきた。

振り仰ぐと、四階の壁面に切られた横長の大きな窓から身を乗り出すようにして、チュルリーがこっちを見ていた。その隣には、自分の方を指さしているリューネの姿。

どうやらリューネがレイルの姿を見つけて王女殿下に教えたところ、彼女がいきなり大声で呼びつけてきたようだった。

リューネの綺麗な声はそれほど大声でなくても耳に届くが、チュルリーの澄んだ高い声もまたよく通る。さすがに一階と四階で会話する自信はなく、ただ足を止めて窓の方に身体ごと向き直るレイル。

なのに、何か言葉を続けるのだろうと思ったチュルリーは、そのままふいっと窓辺から姿を消してしまった。

「……え？ 呼ばれただけ？」

少し困惑したようなレイルの呟きが聞こえたわけでもないだろうが。リューネは一度、レイルの方を見て、小さく首をかしげてきた。

## ■逗留第一夜

---

一通り城の中を見て回った後、レイルはチュルリーの居室に戻ってきた。王女殿下はもう一つご機嫌斜めなようで、戻るなり彼を睨んだ。

なんだか分からないがとりあえず頭を下げ、出迎えてくれたリューネと戸口に立ったまま話し始めるレイル。

「けっこうかかったね」

「中庭まで見てきたから。広かったし」

そんなやりとりいらだったように、チュルリーが割って声を上げた。

「レイル。戸を閉めて中に入れ」

「……入っても大丈夫なんですか？」

「！っ……お、同じ部屋にいないで、どうやってわたしを守る気だ」

レイルは王女殿下の後ろから呪術的なまでの眼光を飛ばしてくる侍従長を気にして少しためらったのだが、彼の言葉でまた上目遣いに睨んでくるチュルリー。

軽く会釈をして、レイルは部屋に足を踏み入れた。扉を閉める。

「チュルリー、戦争に来たんじゃないんだって」

リューネが告げた。「そう。よかった」と微笑むレイル。

「でも――」

と、彼は少しチュルリーの方を見た。王女殿下はレイルが部屋に入ったことでとりあえず気が済んだのか、二人を離れて窓辺のソファへ腰を下ろそうとしている。

「――この城は戦場だったよ」

チュルリーに届いてしまわないように、小声で。戦女神と瞳が重なった。リューネもまた、小さくうなずいた。

そして、夜。窓には鎧戸が下ろされ、城内ではランタンが何百となく灯されていた。城の外には無数の松明と篝火が焚かれ、オレンジの炎がセルバソン城の偉容を暗闇の中に浮かび上がらせている。

時おり湖面に魚が跳ね、沼地を蹴立てて駆け抜ける獣の立てる音がする以外は深閑と静まりかえった国境の闇夜は、ゆっくりと更けていった。

## ■予兆

---

チュテルナ王女殿下のセルバソン城塞入城からわずかに五日後。ダーション国境に異変が起こった。

最初に気がついたのは、チュルリーの居室にある大窓から外を見ていたリューネ。彼女は日課のようにして、その窓からダーション国境側の景色を確かめることが多かった。

ずいぶんこの光景が気に入ったようだなと言葉をかけたチュルリーに、リューネは首を横に振りながら答えて言った。

「こういう広い窓はね、景色を眺めるためじゃなくて、陣形を確認して指揮を執りやすくするためにあるの」

その、戦女神が。三日目の薄暮の頃、

「……水鳥」

いつものように窓辺に立って、小さく、だが鋭く呟いた。顔を向け、彼女の隣に歩み寄るレイル。

「どうしたの？」

「西の方からずっと、水鳥が飛び立ってる」

指さす先で、確かに無数の鳥たちが薄墨色の広がる空へ羽ばたいていた。この距離からだと、黒い点が淡いもやになって湖沼地帯から立ち上っているように見える。

「……肉食獣に追いかけてるのかな」

「分からないけど、様子がおかしい」

野生の獣ならまっすぐ城塞の方に向かってきたりしない」

レイルの言葉に、端正な顔へ憂いの色をにじませるリューネ。確かに、薄暮の空へ影絵のように舞い上がる水鳥達の姿は、南北にぶれることなく真っ直ぐこちらへ近づいてきている。

レイルは背筋がざわつくのを感じた。その光景には、野趣あふれる一景などではない何かの意図が覗いている。

「……何をしている」

窓の前に肩を並べたままじっと動かない二人の後ろから、チュテルナ王女殿下が不服げな声をかけてきた。

「チュルリー」

「……せめて殿下は付ける」

背を向けたまま呼びかけるリューネに、洗面のチュルリー。

「チュルリー殿下」

律儀に呼び直して、レイルがふり返った。ソファの座面に身を沈めたままの華奢な王女は、彼と目が合った瞬間、リューネに向けようとしていた文句の続きを思わず飲み込んだ。

「斥候を出してください」

短くはっきりと告げた彼の、鳶色の真っ直ぐな瞳には、鋭い光が宿っていた。

「斥候？ なんのためだね」

ロルスン指揮官が重厚な顔の分厚い眉を怪訝そうに動かして、問い返してくる。

チュテルナ王女殿下には騎兵隊の指揮権はない。斥候を出して欲しいと言われても、彼女にできるのは指揮権者のロルスン騎兵隊長を居室に呼びつけることぐらいだった。

指揮官はチュテルナの呼び出しにすぐ応じ、鎧の上にきちんと上衣を羽織った略礼装で推参した。そしてそこでレイルの求めに応じるようにと言われ、振り向いて見たた軽装の少年に斥候派遣を要請されて、低く問い返したのだ。

「西から何か近づいています」

すでに夕闇に閉ざされた空には水鳥の飛ぶ姿は見えないが、ざわつく夜空の気配は静まりきってはいなかった。ロルスン指揮官はレイルの指し示す窓の方に歩み寄り、夜闇に目をこらす。

「……何も見えないが？」

「水鳥の様子が変です。西から真っ直ぐに、こちらへ飛び立っていました」

やや困惑したようにふり返るロルスンに、答えるレイル。

「それが敵襲の予兆だということかね」

「分かりません。ですから斥候を出して調べる必要があります」

ロルスンは「ふむ……」と口の中で呟いてから、

「しかし、君は分かっているのかね。」

このセルバソン城はダーションとの国境に建っている。この城から西はダーション領なのだ。

そこへ斥候を送ることは、ダーションから見るとどう映るかね」

「……」

威厳に満ちた表情でそう続ける。レイルは言葉のないまま、彼の顔を見つめ返した。

ロルスンはそんな少年へ、穏やかに首を横に振ったあと、

「王女殿下のお言葉ですが、斥候を出すことはできません。」

水鳥を追う獣を探させるにせよ敵影を探させるにせよ、こちらからダーションに踏み入るのは賢明ではありません。

ましてや、そのようなことを下命なされたとあっては、王女殿下のご高名を穢すことにもなり得ます」

どうぞご賢察くださいますよう。と言って深く頭を垂れ、部屋を辞した。

引き留めることもできずに、その背中を見送るチュテルナ。重い音と共に扉が閉ざされると、

「……どうするのだ、レイル」

隣に立つ彼に顔を向けた。口調は責めている風にも聞こえたが、その瞳にはすがるような色があつた。

答えたのはリュエネ。

「戦争を起こすか、起きるまで待つか。」

その選択だと思う」

戦女神の口調は、あざけているのでも皮肉っているのでもない、いつもの無垢な彼女のものだった。

## ■戦争を起こす者と利用する者

少なくともミッドオー地方の四カ国に関する限りはどここの国でもそうだが、王都の王城は巨大だ。イーグリア王都の白亜の断崖もまた、広大な敷地の中に悠然としたその巨躯をそびえさせている。

王城は王国の威信の象徴であり、政の中心であり、最高権力者である王の膝元でありながら、同時に、その入り組んだ臓腑の中に無数の魑魅魍魎が巣くっている場所でもあった。

その白亜の断崖の一隅に、数人の男が落ち着かない様子で集まっていた。すでに陽は沈み、月さえもなく、時刻は深更にさしかかっている。彼らが影を並べているのは例祭の行われる拝堂と城郭とを結ぶ渡り廊下。白亜の断崖に寄り添うようにしてそびえる岩壁をうがって作られた拝堂とそこに通じる渡り廊下の天井は極めて高く、天井から吊られた何十という松明が、時折蛍のような火の粉を舞い踊らせながら、列柱や飾り窓に生き物のように揺らめく影を刻んでいる。

日中であれば荘厳な美しさに打たれるその場所も、このような時間ではややもすると不気味だ。城内を小鳥のように飛び交って愛やら恋やらをささやき合う貴族の子息息女が迷い込むような心配はない。

一方で、拝堂で祈りを捧げるのは日中でなければならぬという戒律はないから、人に見とがめられても言い訳はいくらでも立つ。しかもここは、イーグリアの誰であっても一王城に入れる者ならではあるが一訪れうる場所で、そこで誰と会おうと、それは偶然のたまものだと言えば追求のしようもない。

だからこそ、彼らはここに来た。

イーグリア貴族の何人か、将軍の一人とその腹心の各一名、内政を司る大臣の一人一皆一様にマントを羽織り、あるいは外套の前を閉じて襟を高く立て、あたかも早春の夜風を避けているような風体を装いながら、遠目からでは人別のつかないように気を払っている。八人ほど集まった一団の中には、完全に顔をフードで隠した者もいた。集まった者達の中では瘦身長躯で、隣には従者とおぼしき小柄な人影も付き従っている。

「いったいどうなっておるのですか」

辺りをはばかった低さの、だが押し殺しきれないいだちのこもった声が、うちの一人から発せられた。

「私の手の者から、ダーションが動いたとの報が入っております。まったく計画と違いますぞ」

「まったくだ。拙速すぎる」

「いったい、彼国は何を考えておるのですか」

一団の中で交わされる言葉には、焦りと疑心の響きがあった。

「……ダーションが本気で侵攻してきているということはありませんかな」

「馬鹿な。彼国にとって益があるとは思えませんぞ。同じ動くにしても、我々と歩調を合わせる方が……」

「あるいは」

大臣が、低い声で割って入った。

「我々の中でも歩調が合っていないのでは……？」

暗に、誰かが抜け駆けをしているのではないかと牽制する言葉。将軍のこめかみにぐっと力がこもった。

「聞き捨てならないお言葉ですな」

「わたくしとて、そう願っているわけではございません。

しかし今彼国が動いたとなれば、彼国にも何らかの打算があるはずではありませんか。

それはあるいは我々を捨ててベヒランドと手を結ぶことかも知れず、あるいはベヒランドに先んじてイーグリアを攻め落とすことかも知れません」

「それができるなら、ダーションは元から動いているはずだ」

「さよう。ですが、誰かが彼国の前に餌をぶら下げていたらどうでしょうか。

湖沼地帯に、気位の高い野兎が巣を構えた、と……」

一同はその言葉に押し黙った。揺らめく影が、彼らの心中にある疑心暗鬼を暗示しているかのようだ。

松明のはぜる音さえ聞こえるような沈黙を破ったのは、フードをかぶった長身の男性だった。

「そのようなことが好餌になると思うほど、ダーションも我々も愚かではないと信じたいものだ」

集まった男達の視線が集まる中で、静かに言葉を続ける。

「今宵集まってもらったのも、それを確かめたいがためだ。私は諸兄を信頼している」

大臣は深く頭を垂れて、答えた。

「わたくしめも、我ら一同が殿下のように聡明であらんことを願っております」

その言葉に応じて、忠心を表すように、集まった者達が殿下と呼ばれた男性へ辞儀を送る。

男性が鷹揚にうなずきを返した、その時。

「これは、殿下。おいでとは存じ上げず、このような略装で御前に出ましたことをお許しく下さい」

彼らの後ろから穏やかな声がかげられた。弾かれたように顔を向ける一同。

いつの間にそこにいたのか。列柱の作る影からしみ出してきたのではないかと思うような黒衣と黒髪の男が、渡り廊下の床に片膝をつき、深々と腰を折っていた。

「……ディトリット＝ケイルドース」

誰かがうめいた。黒衣の男性が顔を上げる。一団に向けられる、人形が生きて動いているかのような端正な面立ち。

「貴様、このような時間にここで何をしている！」

思わず声を荒げる将軍に、ディトリットはもう一度顔を伏せ、静かに答えた。

「諸兄と同じく、祈りを捧げに参りました」

返す言葉を失う、一同。将軍の問いは、いかにもまずかった。彼は顔を紅潮させたまま肩を震わせていたが、やおら腰の長剣を抜き放ち、

「殿下の前に、爵位もない貴様がそのような装いで現れるとは、なんたる不敬だ！」

無礼討ちだとも言わんばかりの勢いで振りかぶる。よもや本当に斬りつけるつもりはない。脅しつけて、今夜ここで見聞きしたことを口外させなければ充分。そう思っただけの行動だった。

その意に反して、ディトリットは怯えるでもなく、ただ平伏したまま動かない。

そして。

「貴様の装いが国王の前にふさわしいと思えんな」

もう一人、渡り廊下の奥から姿を現した男性の姿に、將軍はついにその剣の下ろし先を失った。

こちらへ向かって悠然と足を運ぶ、背の高い男性。エメラルドの瞳が気品を湛えた白い肌に映え、宮廷付きの理髪師が整えた金色の髪には、白亜の断崖の主である証が戴かれている。

その両脇を、軽装ではあるが帯剣した將軍各位が固め、後ろにはやはり剣を履いた近衛兵を従えていた。その姿は、今が月さえも沈んだ真夜中であることを忘れさせるものだった。

「……陛下……」

一同の誰かが、蚊の鳴くような声を漏らした。

フーエルリート＝アントクエスト＝ソクウェイン国王陛下その人が、鋭い眼差しを注いだままこちらへと向かってくる。集まっていた一団は、半ばくずおれるようにぬかずいた。

フーエルリートに付き従う將軍達は、自分たちと同列にあった者が関わったこの不祥事に、烈火のような怒りでその表情をたぎらせていた。国王の許しさえ出れば、それこそ脅しではなく彼ら全員を血の海に沈めかねない。

密会していた国賊達は、全てが露見してしまったことを悟った。ダーションとの内通、イーグリアへの背信と保身、そうしたものの全てが、今夜この時に。

それでも国王フーエルリートは泰然自若として足を進めるだけ。まるで本当に、祈りを捧げに来た途中、忠臣と出くわして言葉を交わしただけかのような。彼は跪いて顔を伏せたままのディトリットの横まで来ると、

「立て、ディトリット。お前が言うから、こんな時間に礼拝に来たんだぞ」

そう声をかける。美貌の男性は静かに会釈をして、立ち上がった。

「奇跡というのは、人の行わない信仰を示す者の上にもたらされるものです」

「よく言うな、お前」

臣下というより悪友にでも話しかけているような口調とともに、国王は軽く彼の肩を叩いた。それから、

「お前も立て、グルウェン＝エスレイボルト＝エリミュエステアリ」

絶望の淵に追い詰められて背を丸めている一同の中、殿下と呼ばれていた長身の男性を見た。グルウェン＝エスレイボルト＝エリミュエステアリ。王族の一員にして彼の異母弟。

ゆっくりと立ち上がり、グルウェンはフードを取る。すでに覚悟を決めたのか、彼の緑玉の瞳は静かだった。

「せっかくだ。共に祈ろう。この先は、そういうこともなくなる」

軽く手をさしのべて、フーエルリート。グルウェンは優雅に一礼すると、無言のまま足を進めて彼の後ろについた。あるいは哀切と言ってもいいかもしれない表情を一瞬その瞳によぎらせて、フーエルリートは彼の背中を見送った。グルウェンの周りを、近衛兵が固める。

国王が再び前を向き、拝堂に向けて歩き始めた。平伏したまま震える一同にはそれ以上目もくれないまま、足を運んでいく。ディトリットが、將軍達が、今や命運の閉ざされた王子が、彼ら

の横を歩みすぎていく。

「ああ、そうだ」

拝堂の入り口へさしかかったところで、フーエルリートは声を上げ、ふり返った。ひれ伏したままの一団の背が、びくりと震えた。

「将軍、お前はなかなか見所があるな」

茶化しているという風でもなく、そう言うフーエルリート。這いつくばった将軍は顔だけ無理に彼の方へ向け、ただ困惑と疑心にさいなまれた表情で、

「……は……」

と答礼を返す。

「拝堂に、祈りを捧げに来る以外の用もあることが分かっている」

国王の言葉に、将軍は何を言うべきか分からず、ただもう一度顔を伏せた。

フーエルリートは顔を前に戻し、歩き始めた。そして、続けた。

「神に祈るだけではない。私の決めたことを、神に伝えにも来る。今日が、その時だ」



## ■ダーション侵攻

角笛の音と、ドラムの音。軍勢の足並みを揃えるために吹き鳴らされ、打ち鳴らされるその音が、友軍のものではなく敵軍のものになるだけで、こうまで城壁を揺るがすような激震に感じられるものなのか。

レイルはチュルリーの居室の窓からダーション国境の湖沼地帯を見下ろして、ぐっと奥歯を噛んだ。

戦争を起こすか、起きるのを待つか。リュウネの言葉は正しかった。

あの時彼女はレイル達を焚きつけようとしたわけではないし、怯えさせようとしたわけでもない。状況を、彼女らしい素直さでそのまま表現しただけ。

が、その直截な事実に関自分の判断が鈍らなかったと言い切る自信がないことが、レイルは悔しかった。

レイルが選んだのは、起きるのであれば起きるのを待つこと。

「ロルスン指揮官の言う通り、ここでダーションをむやみと刺激するのは賢明じゃない。

誰かが――例えば僕とリュウネが斥候に出てダーション兵を見かけたとしても、領内で活動して何が悪いと言われたら返す言葉もないよ」

そう言って事態の推移を見守ることを告げたレイルに、戦女神はなにも言わず、ただ静かにうなずいて従ってくれた。

そして、二日後の今日、払暁。

ダーション兵が、国境の西からセルバソン城に向かって進軍を始めた。

朝靄を揺らすドラムの音に水鳥が湧き立つように空へ羽ばたき、獣たちが追い散らされて駆け回る。湖沼地帯には馬で渡れる程度の浅い池も多く、地の利に通じた彼らは水面を蹴立て、セルバソン城の城壁を押し包むようにして迫ってきた。もはや斥候を出してみるまでもない。

その数はおよそ一〇〇〇。今この城に配備されているイーグリア軍のほとんど一〇倍だった。

セルバソン城内はすでに蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。レイル達以外にとっては青天の霹靂と言えるダーションの動きに動揺を隠せないまま、それでもロルスンの指揮の下、兵士が配置され戦の準備が整えられようとしていく。

チュルリーの居室は急造の司令室となり、このときばかりは王女殿下といえども続きの間に下げられていた。チュルリーは気丈に振る舞い、気に入りのソファを自分の移る部屋に運ばせる落ち着きさえ見せたが、その細い肩が震えているのはレイルにも分かった。

この続きの間には窓がない。外壁の開口部としては明かり取りの小窓があるだけで、そこも今は木の蓋でふさいである。ソファや文机が運ばれ、テーブルの上のランタンが灯される。

「あいにくとこの部屋には扉がございません。王女殿下には、どうかこの衝立でご辛抱いただけますよう」

司令室となった居室と続きの間を隔てる壁の開口部に、テーブルを立てたような頑丈で巨大な衝立を置くと、ロルスンはそう言って頭を垂れた。

「よい。戦とあれば堪えよう。存分に働いてくれることを期待しているぞ」

うなずいて答える、チュルリー。

部屋の中は夕暮れのように薄暗い。石壁を揺らす角笛とドラムの音は抜けどころを失ってこもり、胸苦しさを増すようだった。

チュルリーは敢えて悠然とソファに腰を沈め、何ほどのこともないような顔を浮かべてみせている。薄墨色の粒子を空気に溶いたような部屋の中で、彼女の細い身体と金色の結い髪が淡く浮き上がっているように見えた。

一礼して、衝立の向こうへと姿を消すロルスン。チュルリーは微動だにせずその背中を見送っていたが、彼に続いてレイルがきびすを返そうとすると、

「レイル」

短く固い声で呼び止めた。誠実な面差しが振り返る。

薄暗がりを含んで、二人の眼差しが重なった。

彼の鳶色の瞳を見つめて、言葉を探るように口元を幾度か小さくわななかせてから、

「……何でもない」

チュルリーがぎこちなく笑う。いつかと同じように、エメラルドの大きな瞳が崩れそうなほど潤んでいた。

その姿に突き動かされて、レイルは向き直り、静かに足を進め、ソファの前に片膝をつく。

そして、

「約束は、忘れていません」

ただ幼い彼女の不安を和らげてあげたくて、華奢な肩をそっと両手で包むようにしてそう告げた。

その言葉に、チュルリーの目がひときわ大きく見開かれる。音もなくこぼれ出す、大粒のしずく。

王女殿下は無言のまま何度もうなずき、胸の前で握りしめた小さな両手を、レイルの胸元に押しつけた。年相応の女の子のようなその仕草に少し驚きながら、あやすようにゆっくりと肩をさする。

チュルリーはレイルの胸へ倒れ込むように、額をくっつけてきた。小さな背中が震え、レイルの膝に涙が水玉を描く。押し殺した彼女の嗚咽が、ドラムの合間を縫うようにして耳に届いた。

どのくらいそうしていただけるか。チュテルナがゆっくりと彼の胸元から身体を起こし、顔を上げる。そしてそのまま彼を見つめて、言えなかった言葉を口にした。

「……死なないで……」

かすれた声。熱い吐息。レイルを見上げる目は赤く泣きはらしている。

尊大で気位の高いチュテルナ王女殿下の、うっすらとぬれた小さな唇が紡いだのが自分を案じる言葉だったことに、今度はだいぶ驚きながら。

レイルは自然と、微笑みが浮かぶのを感じた。

「はい。チュルリー殿下」

静かに答えて、彼女の細い肩からそっと手を離すと、顔はそらさないまま立ち上がる。それから、

「かならず殿下を守りに帰ってきます」

片手を軽く胸に当てながら、微笑みの中に真摯な眼差しを宿して、幼い主君に誓った。

つられるように、口元をほんの少しだけ、笑みの形に動かして。チュルリーは愛らしく鼻をすすって、一つこくりと頷いた。

## ■戦女神の目

---

レイルが司令室に戻ると、リューネは端正な面差しにいつもと変わらない落ち着きを湛えたまま、窓の外を見ていた。レイルが声をかけると軽くふり返り、隣に立った彼に小声で口を開く。

「なんだか、中途半端」

「……なにが？」

戦女神の言葉が意味するところが分からずに、問い返すレイル。

「人数はいるけど、櫓や投石機の影がない。

城を攻めるにしては、用意が貧弱」

「湖沼地帯だから、大型の兵器は使いにくいんじゃないのかな」

同じように窓からダーション側を見下ろして、レイルはそう意見を口にしてみた。「うん…」と、歯切れ悪く呟きながら頷くリューネ。

窓から一望できるダーション国境は、東雲の空を映す水面で、無数のガラスを敷き詰めたようにまばゆく輝いていた。その中を進んでくるたくさんの黒い点が、ダーションの兵士達。リューネが指摘したとおり、攻城兵器らしきシルエットはその中に確認できない。

「ロルスン指揮官、城壁の上に丸太や大槌を運ばせて」

何を思ったか、リューネは司令室をふり返ると、副官達に指示を出している騎兵隊長に向かってそう言った。綺麗な声に穏やかな口調なので、命令したようには聞こえない。が、進言しただけと受け止めてもらうにも若干無理がある。

「……なんのためだね」

威厳のある顔に洪面を浮かべ、問い返すロルスン。戦装束の少女はもう一度顔を窓の外に向け

、「彼ら、攻城兵器を持ってない。

櫓がなければ、城壁に上るにははしごをかけるしかないから、それを落とすの」

一番簡単な手料理を教えるかのような口ぶりで、答えた。ロルスンは一瞬黙ってから、

「……運ばせろ。城内から鉈と手斧も集めて、それも城壁の上へ」

副官に指示を下した。意向を受けて伝令が走っていく。

リューネはロルスンが自分の言葉に従ってくれたかどうかを見届けるでもなく、静かにダーション兵の進軍を見つめ続けていた。

兵力については、単純な頭数の他にも大きな問題があった。ここに配備されているイーグリア国軍兵力の大半はロルスン騎兵隊の兵士で、すなわち騎兵だ。城塞にこもる防衛戦向きの兵種ではない。

夜明けとともに湖と林の向こうから始まったダーションの侵攻は、曙光が木々の上端にかかろうとしている今、セルバソン城の四階から陣形がはっきりと見える位置まで迫っている。騎兵による機動戦を仕掛けるなら、もはやこれ以上距離を詰められるのを手をこまぬいて待っているわけにはいかなかった。

事実、城門は閉じられたままだが、中庭にはすでに騎馬にまたがって整列し、司令を待っている騎兵隊の騎士達の姿。全員が板金鎧に身を包み、愛馬の首から肩には鮮やかな垂れ飾り。手には騎乗槍を携え、何割かは重い金属張りの楯も構えていた。

だが、端然としたその装いとは裏腹に、彼らから受ける雰囲気は落ち着かないものだった。しばしば身じろぎをし、具足の収まりを気にしては手をやって確かめる。乗り手の不安が伝わるのか、騎馬も前足で地面をかいたり鼻面を上げていなないたりしている。

レイルの見下ろす窓からは、その様子がよく見えた。無理もない、と思えた。

城壁の外へ目を移す。進軍してくるダーション軍の姿も、落ち着いて目をこらせば一騎一騎が見分けられるほどに迫っていた。一〇〇〇対一〇〇弱。城塞に頼って戦うことができるならともかく、野戦ではおよそ勝利を望むべくもない戦力差だ。

それでも仕掛けるなら、少しでも早く動かなければならない。城門を開け、中庭から一拳に速度を上げてダーション軍へ急迫。馬足を緩めることなく陣形の中央を突破して一度相手の裏へ抜け、反転。左翼か右翼に回り込んでまた一撃離脱し、相手の組織的な反撃が来る前に城門から城内に戻る。

これを、一步でも距離が離れているうちから繰り返して、少しでもダーション側の兵力を減らしておく。情けない話だと自分でも思うが、レイルに考えつく作戦らしきものと言えばこの程度だった。

もっともそれはロルスン指揮官にしてみても同じようで、急ごしらえの戦場見取り図を前に、副官達と陣形のどこを抜けどちらへ回るかを議論していた。騎兵隊長と同じ水準で戦術を立てられたと喜ぶべきなのか、騎兵隊長が自分と同程度だと嘆くべきなのか。

ふと、さきほどからずっと黙ったままのリューネに目を向けるレイル。彼の隣で窓辺に立っている戦女神は、紅玉色の瞳を城壁の外へ向け、じっとダーション軍の動きを見つめていた。

小さく息をついて、レイルが彼女の横顔から視線を外した時。

「レイル。やっぱり変」

リューネはそう、固い声をかけてきた。顔を向け直す。戦女神は戦場の方を向いたままだった。

「変って、何が？」

「彼ら、本当に戦う気があるの？」

疑問を口にして、リューネの指がダーション軍を指す。

「向こうは騎兵が五〇〇、歩兵五〇〇。なのに騎兵の前に歩兵がいる。陣形も密集しすぎて四角い箱みたい。騎兵の前をふさいで助走のための間隔も取ってないなんて、最初から騎兵を使う気がなく見えるよ。」

それに、輜重隊がないのも変。楽箏者を連れてきてるのに輜重隊がないなんて、演習でもしに来たつもりなのかな。

櫓も投石機も持ってきてないところもそう。歩兵がああ並びだと、きっとはしごだって運んでないよ」

さながら、伝説に名を刻む慧眼の軍師のように。リューネのほっそりした指が、寄せてくる敵

方の不備を指し示していく。

レイルはその姿に驚かされながら、彼女の示す場所へ目を走らせていった。確かに指摘の通りだ。

「……どうということだろう」

「彼ら、城を攻める気がないんだよ」

「攻める気がないのに、太鼓と角笛を鳴らして進軍してくる？」

問い返すレイルに、その時初めてリューネが顔を向けてきた。凜とした紅玉色の瞳が、彼を見据える。

「攻める必要がないって、思っているんだよ」

「……だとしたら、ありがたいけど」

腑に落ちず、歯切れの悪い言葉を返すレイル。戦女神は、違うというように首を横に振った。「レイル。イーグリアはベヒランドとは仲が悪くても、ダーションとは中立だったんだよね？ それなのに、ダーションは自分たちから戦端を開いてきた。他のどの場所で、他のいつでもよかったはずなのに、今この時のセルバソン城で行動を起こしたの。そのくせに戦の準備は不足してるなんてことが、あり得る？」

「……それって――」

彼女の言葉と表情とが示すことによろしく思い至って、レイルはわずかに言いよどんだ。リューネは小さく、だがはっきりとうなずいた。

「準備が不足してるんじゃない。彼らは、あれで充分だって考えてる。私たちには満足に戦えない理由があるって、そう信じてるんだよ」

レイルは目を国境に戻した。押し寄せてくるダーション軍の陣形や歩調や携えている装備品の全てが、ただ圧迫感を受けるだけのものから、相手の意図と意志を読み取る手がかりに変わって見え始めた。

相手には致命的な油断がある。リューネの言うことが正しければ、僕たちはどうすべきだろう。そう、考えを巡らせる。

「……最初の一撃が、勝負だ」

決然と、呟きが漏れた。隣で戦女神が頷いてくれるのが感じられた。顔を向けるレイル。リューネはいつもと同じ穏やかな表情でこちらを見つめていた。

「最初の攻撃で向こうの指揮官を倒す。歩兵は三分の一、騎兵は四分の一を戦闘不能に。

それができれば、この戦は勝ちだよ」

都合、歩兵一八〇、騎兵一三〇を駆逐しなければいけない。手勢は一〇〇弱、ざっと言って三倍の敵を最初の攻撃で排除する計算だ。しかもこちらは一人も脱落しないという前提で。その上、相手の指揮官だけは絶対に逃してはいけない。

相手が油断していて先手がとれるという有利があるにしても、本当にできるだろうか。

ついリューネから視線を落とし、手元に力が入る。

「レイル」

彼女は静かに声をかけてきた。

顔を上げる、レイル。リューネと目が合った。彼女の伝えたいことは分かっていた。

できるできないは、この際重要ではない。やらなければ敗けるだけ。

地道に削るだけの戦術では、二度目以降の攻撃が手詰まりになる。油断を捨てられてしまえば、自軍に一〇倍する相手に勝つのは油断を衝くより難しい。

城門を閉ざして守り続けても同じだ。こちらに抵抗する気があると悟らせてしまった時点で終わる。向こうに輜重隊が帯同していないなら持久戦に持ち込むことも考えられるが、レイル達に援軍が来るという保証もない。

どうしてザッツは自分だけをチュルリーの護衛に送り込まなければいけなかったのか。どうしてそれが、こういう場所で目にすることがないと言われるような王命だったのか。どうして王女殿下の逗留を迎えるにでは全てが質素だったのか。そうしたことを考えると、チュテルナ王女殿下やセルバソン城がイーグリアの中で置かれている立場が、決して有利なものではないことが透けて見える気がした。

レイルは微笑んだ。チュルリーに誓ったときに浮かんだものとは違う、進むべき道を固めた少年の内からわき上がる、凜とした決意の表情だ。

「行こう、リューネ」

軽く手を差し出す。リューネもまた、小さく笑顔を見せて、頷いた。

## ■ザッツ隊長

白亜の断崖で執務をとっていたディトリットがその報告書を目にしたのは、記入された日付から六日経ってのことだった。歩兵隊の動員報告書なので、別に処理が遅れていた訳ではなく、ごく普通だ。国王から直接の親任を受けて政略/軍略顧問を務める彼の元には、あらゆる類の報告書が回されてくる。別に決裁権があるわけではないので目を通すだけで、流し読みで済ませることも多い。

この報告書もそうした類の一枚に過ぎなかったが、ただ、そこに記載されていた内容が、なにかディトリットの心に引っかかった。

「……演習？」

報告書に書かれた言葉に、形のよい唇から小さな呟きが漏れる。歩兵隊の内、およそ一〇〇名からなる一隊が、緊急の演習を行うため一時的に本隊を離れるとの申告を行い、中隊指揮官はこれを許可したと、報告書の言っている内容はそういうことだった。

演習自体は珍しくない。ことに現在は徴兵で各地から新兵が集まってきており、そうした徴集兵で組織した部隊は日に夜を継ぐ訓練と演習で鍛え上げている真っ最中だ。が、緊急というのは少し解せない。しかも部隊を子細に見てみると、軍歴の長い兵が多い歩兵隊だ。

部隊長の名前をしてみる。ザッツ＝コールドグイン。その名を目にして、ディトリットはガラス細工のような顔へ静かに指を当て、少し考えた。

ザレススでの英雄探索行で、成功の報を送ってきた部隊長。見いだされた英雄候補生の名前は、レイル＝エウリオン。彼の命運を変える命令書と目論見書を書いたのは、他ならないディトリットだ。

イーグリア国王の親任篤い顧問の青年は優雅な指先で手帳を取り出すと、ペンを取って短くメモを書き留めた。

「……お前の予定がまた変わったかと、陛下にお叱りを受けるようなことにならなければいいですが」

彼の他は誰もいない執務室で一人、ぼやいた後で。報告書を処理済みの書類箱へ移し、また執務の続きに戻っていった。

日付は報告書のものからさらに一日遡って、イーグリア王国王都タールホルツ。街道から通じる街路の中を、一頭の騎馬が蹄の音も高く疾走していた。馬上にはザッツの姿。

王都に入るまで前に抱えていた勅使は、王都城門のすぐ側で下ろしてきた。老人は強行軍ですっかりへばり、城門に寄りかかったまま、ただ恨みがましい目で見ると同時に遠ざかっていく彼の背中を見送っていた。

本来は六日前後かけるはずの道のりを、たった二日で乗り越えてきた。単騎駆けならなんということもないが、曲がりなりにも勅使の馬車を「護衛」してだ。本来速駆けについてくることなど想定していない小型の馬車の中は、さぞかし揺れただろう。無理からないことだが、走り出した日の夜には速度と振動に耐えかねて梶棒の金具が壊れてしまった。そこからは、小柄な老人を鞍の前に抱えて、また馬に鞭を当てた。



挙げ句、とりあえず王都に入ったらそこで役目は済んだとばかり、城門の横に放り出してきたのだ。後で勅使の老人から手ひどく文句を言われるだろうとは分かっているが、ザッツはそんなことにはかまっていられなかった。

王都までの道のりの途中で、受けた王命に従ってレイルを送り出したすぐ後。彼は引き連れていた部隊をそこで待機させ、一人騎馬を駆って王都へ駆け戻った。勅使の護衛を放棄するわけにはいかなかったから、彼の馬車にもその速度についてこさせて。

それというのも、早くセルバソン城に向かわなければ手遅れになるという思いがザッツの背中を押していたからだった。

ザッツは一度も馬足を弛めることなく、王都の一隅にある国軍の屯所に駆けつけた。飛び込んできた騎影の後ろ姿を啞然として見送る、屯所の門を守る守衛たち。軍装を整えて軍馬にまたがっていなければ、後ろから矢を射かけられても文句は言えない。

鎧を蹴立てるようにして馬を下りると、杭へ手綱をもやうのもそこそこに、屯所の建物へと駆け込んでいくザッツ。彼ら常設の国軍部隊は、作戦行動以外では訓練をしているか休んでいるかだ。他に職業を持っていて、戦時だけ調達されてくる徴集兵や志願兵ではない。現在のイーグリアには主に貴族が担う騎士と傭兵団を構成する傭兵以外にもそうした職業軍人がいて、ザッツ達歩兵隊もそこに類していた。

ザッツの率いる部隊は第一街道沿いの諸都市で徴兵活動を行い、各個分隊をつくって徴集兵を王都へ護送してきた。そのため部隊が一カ所に集合しておらず、指揮権者のザッツも不在だったから、事実上の開店休業状態だった。それぞれの護送任務を終えた分隊から三々五々屯所へ顔を出し、すでに帰還していた分隊と、まだ帰還していない分隊の情報を交換する。先に王都に戻った部隊には、自分たちが折り返した町の話聞かせてやる。

耳の早い連中は、行程の最奥で隊長が英雄探索に成功したらしい、という話までまことしやかに語っていた。

そんな、他愛もない骨休めに時間を使っていた、ザッツ歩兵隊の前に。そこで最後の敵を斬って戻ってきたばかりだとでもいうような気迫をまとって、ザッツ＝コールトダイン部隊長が姿を現した。

「隊長……」

屯所に詰めていたザッツ隊の副長が、少しあっけにとられたような声をかけてくる。名ばかりは作戦室ということになっている、ザッツ隊割り当ての小部屋。ドアも適当に開け放ったまま気の合う部下や副官と下世話に興じていた三十がらみの彼は、あと四日は戻ってこないはずの隊長が追い立てられるようにして現れたことに、目を疑わずにいられないようだ。

「いたか。まだツキは逃げてないな」

ザッツは彼を見やり、自分に言い聞かせるように口を開くと、

「分隊は全部戻ってきたか？」

問いかけた。

「あんたが連れてくるはずの連中以外は、昨日全部な」

あごを引くように頷きながら、答える副隊長。

「すぐに全員集めてくれ」

「すぐにかよ」

年下の隊長の端的な言葉に、副隊長が軽く目をむく。ザッツははっきりと首を縦に振って、繰り返した。

「すぐにだ」

副隊長は少しの間、彼の顔をじっと見据えていてから、側にいた副官たちを呼んだ。

「みんなで手分けして声かけてこい。あー。俺が呼んでるってだけ言っとけ」

部屋にいた副隊長以外の全員がうなずきを返し、ザッツに会釈をしてから部屋を駆けだしていく。

「で？ 中には昨日戻ってきたばかりの奴らもいるんだ。戦争でも始まるってのか？」

その背中を見送ってから、副隊長が腕組みでザッツを見た。

「戦場から助け出してやらなきゃならないやつがいる」

答えるザッツ。副隊長は解せないというように片眉をつり上げた。

「それをどうして俺たちの隊がやらなきゃいけない？」

「……俺がそいつを戦場に送り込んだからだ」

「いつものことだろうが。あんたは命令する。俺たちや突っ込む。それが役割ってもんだ」

「そりゃ、兵士ならの話だ。」

俺が送り込んだのは、まだほんの少年なんだ。ザレススのレイル。英雄探索行で見つけ出した、英雄候補生だ」

「なら、自力で生きて帰ってくるんじゃないか？」

探索行成功の報は小耳に挟んでいた副隊長は、さして驚くでもなく気楽な見込みを口にした。レイル本人を目にしていないのだから仕方ないとは思いつつ、

「バカ言うな。まだ一七の子供だぞ。背だって俺のこの辺までしかない。おまけにお人好しで田舎者で馬にも乗れないと来てる」

勢い込んで彼の言葉を否定するザッツ。兄に向けるような眼差しで自分を見上げていたレイルの姿が思い浮かんで、つい声に熱がこもるのが自分でも分かった。

「聞く限り、英雄にも救出価値のあるお方にも、なりそうにやねえな」

苦笑いの副隊長。

「で、なにを間違ってるんなお坊ちゃんを戦場に送り込んだ？」

彼は作戦室の机の一つに行儀悪く腰を下ろすと、おもしろそうに問いかけてきた。

「……王命だ。帰途の途中でな。英雄探索行で見いだした英雄と戦女神を、ダーション国境のセルバソン城に向かうチュテルナ王女殿下の護衛に付けろと」

「なんだよ。じゃあ送り込んだのはあんたじゃなくて陛下だ。あるいはあの黒犬だろ」

口にした言葉の苦さに、眉根へ深いしわを刻んで答えるザッツ。対する副隊長はさばさばしたものだ。黒犬というのは、国王フーエルリートの顧問を務めるディトリットのあだ名だ。誰が付けたのか、国軍で彼を揶揄するときにはよく使われた。

「しかし、ダーションとはまたキナクせえ所を選びやがったな。対立がはっきりしているベヒランドより気味が悪い。しかもあれだろ。チュテルナ王女殿下は王家筋でも何かと良くない噂があ

るエリミュエステアリア家の次女だ」

副隊長はそう続けて、いかにも歴戦の戦士らしい物騒な笑みを見せた。うなずきを返すザッツ。

「しかも、王命だ。後ろにいるのが黒犬なら、絶対に何かが起こる」

「その何かってのが、ダーシヨンの紳士淑女をご招待して舞踏会、なんてなものじゃないのは確かだな」

そう後を引き取って、立ち上がる副隊長。彼は組んでいた腕を解くと、

「まあ、戦場どうのこうのってのは分かった。取り越し苦労ならそれに超したこたないが、そう読むのも間違っちゃいないだろう。

で。最後に解せないのが一つ。どういう訳で俺たちが、王家や黒犬の思惑で鉄火場になるかも知れない場所に飛び込まなきゃならない？」

ザッツを見据えて、問いかけた。口調は軽妙だが、その目には、修羅場をくぐってきた男ならではの威圧感がある。ザッツは目をそらさなかった。

「レイルの信頼に報いたい。あいつは俺が正しいことをすると信じた。その信頼を裏切れない」

答える彼に、副隊長が一步前へ詰めてくる。

「一人で行けばいいんじゃないか？」

「一人でも行く」

「じゃあ何で戻ってきたんだよ」

「それが正しいと信じたからだ。俺にできることを全てする。その結果が俺一人なら、俺は一人でも行く」

睨み合うかのように相手の顔へ目を据えたままの問答。副隊長はザッツの言葉の真意を測ろうとするように、圧力さえ感じるような眼光を隊長の顔に向けてしばし無言でいた後に、

「……なんだか知らないが、ずいぶん入れ込んでやがるな」

少しあきれたように表情を和らげた。ちょうどその時、部屋に副官の一人が戻ってきた。二人の間に漂う緊張感の残滓に一瞬足を止めてから、全員練兵場に集まりましたと告げてくる。

「よし。じゃ、ダーシヨンまで遠征といくか」

副隊長が一つ手を叩いて、部屋を出て行こうとする。当たり前のようなその一言に、むしろザッツの方が驚いた。

「そんなに簡単に決めるな。行けば命を落とすやつも出るんだぞ」

「当たり前だろ。俺たち兵士だ」

「今度のは国軍としての活動じゃないんだ」

「だからいいんじゃないか」

副隊長は笑いながらふり返った。

「国王のために死ぬなんてのは間遠でよく分からんがな。ついていくと決めた隊長のために死ぬなら悪かない」

「だからってお前が勝手に決めるな」

「分かった分かった」

足を止めないまま、面倒くさそうに手を振る副隊長。

「隊の連中にも聞いとくよ。ついて来たくないやつはついて来なくていいってな。結果は同じだけどな」

「セルバソン城に向かうこと自体が、国軍からの離反行動にもなり得る。命を落とすこともあり得る。それをちゃんと伝えて、それでも来てくれるやつがいればだ」

「お作法の方は古狸に任せておきな。命はまあ」

副隊長は、若年の指揮官にもう一度顔を向けると、

「落とすときはあんたを先に刺して道連れにするから、安心しろ」

頼もしささえ感じさせる食えない笑みを浮かべて見せた。

## ■司令室の攻防

レイルが司令室の窓から室内に向き直り、副官達と一緒に凶面を囲んでいたロルスン指揮官の名を呼んで、この城塞に詰めるイーグリア軍が取るべき戦術をはっきりと語った時。誇り高い指揮官はこれまででいちばん渋い表情で、レイルとリュウネの二人を見下ろしていた。

彼から見れば子供ほどの歳の少年が語る、ダーション側の決定的な油断。セルバソン城のイーグリア軍に抵抗力はないという相手方のその誤解を最大限に利用する作戦に、騎兵隊長は心中複雑なようだ。

「ロルスン様。出撃のご命令を。ダーション軍が距離を詰めてしまいます」

指揮官以上にレイル達の献策をただの差し出口と感じているらしき副官の一人が、少年の顔を閉口したような表情で見やりながら、そう促す。

ロルスンは彼の方へ目を向けて、「うむ」と一つうなずいてから、

「レイル＝エウリオン。献言すること自体は否定しない。しかし内容が突飛すぎるのはいただけない」

重々しく言葉を返してきた。ぐっと奥歯を噛む、レイル。

騎兵隊指揮官はそんな彼の顔をもう一度見てから、伝令を呼び寄せ、命令を下した。

「城門を開けてダーション軍に突撃せよ。速度を保って陣形の中央を突破。左翼から回ってもう一度城門に戻れ。攻撃指揮はグイトフィル副隊長が執る」

伝令と、指名された副官とが、敬礼をして司令室を辞していく。

「待ってください！」

「くどいぞ、レイル」

引き留めようと声を上げるレイルに、ロルスン指揮官は苛立った目を向けた。

ただでさえ数で圧倒的に劣る自分たちが無駄な削り合いで兵数も相手の油断も失ってしまえば、それでなくても薄い勝ち目が完全に消える。焦る気持ちは騎兵隊指揮官以上で、感情的になるべきではないと思いつつも、つい彼に向け返す目元に険がこもるレイル。

そんな彼に代わって、

「レイル。この人じゃ戦に勝てない」

隣で、リュウネが静かに、だがはっきりとそう口にした。部屋に残った数人の副官とロルスン指揮官当人とが、弾かれたように顔を向けて戦女神の端麗な面差しを睨みつける。

それでもリュウネは、動じた風など微塵もないまま、板金鎧を着込んだ歴戦の大男達の視線を凜と受け止めて言葉を続けた。

「どうすればレイルが下の騎兵隊を指揮できるようになるの？ この人を倒せばいい？」

「娘、何のつもりだ！」

携えた槍を軽く振ってロルスン指揮官に透徹した瞳を向ける彼女に、副官達が声を荒げる。

「……必要ないよ、リュウネ」

なだめるように、戦女神が手にする槍へそっと手のひらをかけて穂先を下げさせ、レイルは微笑んで見せた。リュウネの言葉で溜飲が下がった頭に、冷静な思考が戻ってくる。

リュウネが小さく首をかしげた。一つ、目を伏せるようにしてうなずいてから、ロルスン指揮

官の方へ向き直るレイル。

「指揮官。あなたの使命はチュテルナ王女殿下を守護することで間違いないですね」

場違いなほど落ち着いた声で、誠実な微笑みさえ浮かべながら問いかける。ロルスンは怪訝そうに眉を動かしながらも、

「いかにも」

と答えた。

「それは誰の命令でしょうか」

「私の上官だ。騎兵隊中隊長殿のご命令だ」

「指揮官殿は僕がザッツ＝コールトダイン部隊長からの命令書をお渡しした時、王命により僕が向かわされたと書いてあるとおっしゃいました」

「その通りだ」

「それでは」

レイルはにっこりと、年相応の無邪気な顔で笑った。

「僕はチュテルナ王女殿下を護衛するために、国王陛下の命によって遣わされた。国王陛下のご命令と中隊長閣下のご命令、優先するのはどちらでしょうか」

ぐっと、司令室の面々が言葉に詰まるのが分かった。

「……だ、だからと言って貴様にロルスン様配下の騎兵隊を指揮する権限などない！ 王命は自力で果たせ！」

副官の一人が、何かを払いのけるように腕を振って声を上げる。今度は穂先を彼に向けそうになるリューネの手元を軽く押さえたまま、

「ですから、自力で果たそうとしています。ロルスン指揮官殿には、ご協力願っているだけです。

僕が無事に王都に戻れば、指揮官殿からご協力が得られたかそうでないか、国王陛下にご報告する機会があるでしょう」

自分でも驚くほどにすらすらと、レイルは言葉を重ねた。ただ自分の手のひらに残る、涙を見せていたチュルリーの小さな肩の感触が、彼の背中を押していた。

守りたい。守ってあげなければならない。そのためには、ここで騎兵隊を無駄に損耗させるわけにはいかない。頑迷な指揮官の配下に置き続けることも。

自分達は騎兵隊が必要で、騎兵隊にも自分たちが必要だ。チュルリーを守りきり、無事に王都へ戻るためには。

ロルスン指揮官が、文字通り苦虫をかみつぶした顔でレイルを見据える。その目をまっすぐに見つめ返す、鳶色の瞳の少年。

「レイル。彼ら、城門を開けちゃうよ」

彼の隣を離れて窓から中庭の様子を確かめ、リューネが声をかけてきた。騎兵隊が無駄な突撃をかけてしまえば、勝機を失う。

レイルは彼女の方へ軽く視線を投げてから、

「よろしいですね。ロルスン指揮官」

焦る気持ちを押し殺して、問いかけた。副官達の目も彼に注がれる。

重厚な口元にぐっと力を込めて、騎兵隊隊長は言葉を探るようにしばし沈黙した後で、  
「……よかろう。ただし、この一度だけだ」

かすかにうなずきながら、答えた。

晴れやかに微笑んで、「ありがとうございます」と辞儀を返すレイル。そして、  
「リューネ。行こう」

声をかけて司令室を出ようとした彼を。

「レイル。間に合わない。こっち」

窓辺から、戦女神が呼びとめた。走り出そうとした足を止め、振り返る。駆け寄ると、開かれた城門の前で、指令を受けた副隊長が騎馬にまたがって騎兵隊を鼓舞しているのが見えた。今にも馬首を巡らせて攻撃を仕掛けんばかりだ。

「あの人を止める。レイルはここから飛んで」

「飛!?!」

当たり前のように言うリューネに、レイルは驚いて顔を向けた。紅玉色の瞳が、いつもと同じ穏やかさで彼を見ていた。

少しだけ違うのは、

「……レイルの信じる道を、レイル自身が貫いてくれてよかった」

小声でそう言って、微笑みをこぼしてくれたこと。

水晶の鐘の音がした。リューネが窓の外へ顔を向け、肩にしていたロングボウを引き絞る。矢はつがえられていない。その代わりに、戦女神の両手の間を一筋の淡い燐光が結んでいた。

「リューネ」

「行って。あとから受け止めてね」

声をかけたレイルに、リューネはもう一度透き通った瞳を向けてから、弓を放った。燐光の矢がかすかな赤い尾を引いて駆け抜ける。狙い過たず、それは城門前で騎乗槍を振り上げた副隊長の兜を直撃した。

石つぶてを受けたような甲高い音を残して、鞍上から転げ落ちる副隊長。

驚きのあまり窓から身を乗り出したレイルは、自分の背中へリューネが手を触れるのを感じた。振り返る。戦女神の顔は穏やかだった。

その表情に勇気づけられて、レイルは窓の外へ身を躍らせた。城塞の四階。まともに落ちれば怪我では済まないどころか、命さえ失いかねない高さ。

それでもレイルには恐怖心はなく、自分を包む空気の流れさえも分かるような感覚がした。地面までの残りの距離と自分の体勢から、どうすれば着地時の衝撃を最小限にしてすぐに次の行動に移れるか冷静に考えを巡らせる。

二階の天井の高さで、すぐ脇を流れていく壁面を蹴った。身体が空中で、スッと前に押し出される。狙い通り。中庭の方へずっとせり出した広大なテラスの端に手を触れた。ついた手を軸に、落下の勢いを殺しながら身体を半回転。

レイルが両足で軽やかに中庭へ着地した時、騎兵隊の全員が馬上から兜をこちらに向けていた。筒状のフルフェイスヘルムの奥に見える目が全て、啞然としたように見開かれている。

受け止めて。リューネの言葉を思い出す。レイルは自分が下りてきた窓を振り仰いだ。戦女神のしなやかな身体が宙を舞うのが見えた。

中庭に整列した騎兵隊の兵士達は、目の前で繰り広げられた光景が現実だと、にわかには理解できなかった。

訓示を垂れ、今まさに鬨の声を上げようと騎乗槍を天にかざした副隊長が飛来した燐光に打ち倒されて無様に鞍から落下し、今また城塞の最上階から少年が降ってきておよそ人間業とは思えない身のこなしで鮮やかに着地したのだ。

城壁の外へ迫っているダーション軍の存在さえ一瞬忘れてしまうようなその光景に彼らがあっけにとられたのも無理からぬところで、あまつさえ、

「レイルッ！」

さらにもう一人、優美な青の鎧に身を包み、槍と長弓を携えて腰には長剣を履いた小柄な人影までも窓から飛び降りてきた。

今度こそ惨劇を予感して思わず顔を背ける者さえいる中で。少年は窓から身を躍らせた重武装の人影をしっかりと抱き止めた。

とんでもない軽業をしてのけた二人が、にもかかわらず、何事もないような顔で騎兵隊達の方へ身体を向ける。誠実でまっすぐな眼差しと、凜とした端麗な容貌とが、馬上の彼らを見据えた。

出撃準備を整えた騎兵隊の目の前に降り立った、少年と少女。

崇高な何者かがそこに降り立った感覚が、騎兵隊全員の魂を打った。

誰からともなく、騎乗槍を胸の前に立て、あごを引くようにして頭を垂れる。

波紋が水面を広がるように。中庭に列を成した一〇〇に届くかという騎兵隊が、一斉に英雄と戦女神へ敬礼した。

レイルはわずかに腕を伸ばして、飛び降りてきたリューネの身体を胸元へ引き寄せた。力を込めて受け止めるというよりも、空中からそっと抱き寄せるような感覚。リューネの腕も、自然と軽くレイルの首筋に回された。

鎧と長ズボンの戦装束に身を包んでいても、彼女の身体のしなやかで柔らかな感触は伝わってきた。リューネと視線が合う。窓枠を越えた瞬間からずっとレイルだけに向けられ続けていた、紅玉色の瞳。

胸元に抱いた子猫を野に放すように、レイルはリューネを地面へ立たせてやった。少しだけ、戦女神が目を細めて微笑んだ気がした。

ほんの一瞬、お互いの目を見つめていてから、リューネと一緒に整列した騎兵隊の方へ向き直る。

意図した通り、彼らはあまりの事態に動きを止めてくれていた。全員がこちらへ顔を向けたまま、凍り付いたように動かない。全身が銀色に光る鉄板の奥に隠れているので、そこにいるのが人間ではなく、馬に乗せられた無数の甲冑だけなのではないかと思うほどだ。

ただ一人、リューネの放った燐光の矢に打ち倒された副隊長だけが、倒れていた地面から身を



起こそうとしていた。弩で打ち出した石つぶてを受けたかのように大きくへこんだ兜をおぼつかない手つきで脱ぎ捨てながら、何が起こったのかと辺りを見回す彼の方へ、一步、足を踏み出すレイル。

まるでそれが合図だったかのように。

騎兵隊全員が、馬上から敬礼を送ってきた。

## ■ダーション軍

---

「お館様、城門が開きました」

セルバソン城へと進軍中のダーション軍を率いる指揮官の下へ、側近が駆け寄ってきてそう報告した。「おお」と声をもらしながら、湖沼地帯に黒い偉容をそびえさせている城塞へ、手をかざして目をこらすダーション軍指揮官。

側近の言葉通り、セルバソン城の城門がゆっくりと開けられていくのが見える。指揮官は自然と口元に笑みが浮かぶのを抑えられなかった。

「ハッハ！」

吐き出すように笑い声を上げ、城塞を指さしながら周囲に顔を向ける。

「見る。やはり内通の通りだったではないか」

側近をはじめ、湖沼地帯に集まったダーション軍の副官達は感服したように頭を垂れた。

「セルバソン城にイーグリア王の異母妹が逗留。ベヒランドを警戒してダーションへの注意は薄く、警護の手勢は少数。しかもその中には近年我らダーションと通じている間者までいる。

これだけ条件が揃いながら、罨ではないかだの拙速は慎めだの言ってきた腰抜けどもに目に物見せてやれるな」

ダーション軍指揮官はにわかに上機嫌になって、今まで腹の底に押し込んでいた思いをぶちまける。

おべんちゃらとごますりが飛び交う中、

「お館様。次の手はいかがしましょう」

そばに控えている副官の一人が、控えめに問いかけた。

実際のところ、打てる手など限られている。内通者の情報を頭から信じ切っている指揮官は、「こちらから警戒心を見せては向こうも態度を硬化させる」と言って、攻城兵器も城壁越えのための用意も、何一つとして許さなかった。

この副官は、自分たちが巨大な城塞に押し寄せるアリになった気分だった。ひとまずは城門が開いたので指揮官の思惑通りに進んでいるように見えるが、かと言ってこちらとしてとれる手段が増えたわけではない。

「決まっている。このまま堂々と行進してセルバソン城に入城する。

古人曰く、吞舟の魚は支流に泳がず、細魚を追わずだ」

案の定というべきか、得意の絶頂といった風情で城塞の方へ顔を向けたまま、指揮官が答えてくる。

副官は黙って一礼して、気づかれないようにため息をついた。指揮官はさらに周囲を感服させようと教養をひけらかしたつもりなのかも知れないが、我田引水としか思えない。

この人では戦に勝てない。奇しくもリューネが口にしたのと同じことを、この副官もまた、胸の裡に抱かずにいられなかった。

## ■イーグリア軍出撃

リューネが中庭の石畳を蹴ってしなやかに走り出す。戦装束の少女はそのまま、主が転げ落ちて空になった副隊長の騎馬の鞍上へ、猫のような軽敏さで音もなく飛び乗った。

不思議そうに鼻面を向けてくる馬の首筋を優しくひとなでして落ち着かせ、リューネは鞍の上から騎兵隊の方へと顔を向ける。馬列の間を歩いて城門に向かうレイルに声をかけた。

「レイルは、馬に乗らない方が戦いやすいよね」

「うん」

ザレススでずっと繰り返していた一人きりの鍛錬に向かう時のような、あるいはそれ以上に気負いの抜けた穏やかさのある表情で、鶯色の瞳の少年がうなずきを返した。

ただでさえ大柄とは言えない彼の姿は、馬にまたがった騎兵隊の中では完全に埋もれてしまう。腰に下げているのは、特別に長尺なわけでも趣向が凝らされているわけでもない、ごく普通の長剣と短剣が一振りずつ。身を鎧うものはといえば、全身鎧の壁と騎乗槍の林の中では気休め程度にしか見えないようなブレストプレートだけ。楯さえも持っていない。

敵軍の前に身をさらしたとたん矢の雨と槍衾に引き裂かれそうなその出で立ち。

にもかかわらず、彼の足取りにはためらいがなく、不安もない。幼さの面影さえとどめた顔は、まっすぐに城門の外へ向けられたまま。

その姿は、見送る騎兵隊の全員に、自分たちが崇高な何かとともに戦うのだという感覚を抱かせずにはおかないものだった。

レイルは開かれた城門の前で足を止めた。

「ダーション軍、どう？」

馬上から問いかけてくるリューネに、

「そのままだね。進軍の速度も隊形も変わってないよ」

身を隠すでもなく外の様子を見て、答える。戦女神は満足そうに目を伏せてうなずいた。

それから、

「騎兵隊は中庭の左右両翼に分かれて待機。城外のダーション軍に騎影を確認されないで」

よく通る綺麗な声で、整列した騎兵隊に告げる。

「待て待て！ 娘、貴様何を言っている！」

副隊長がようやく衝撃を乗り越えて立ち上がり、鎧を掴んで詰め寄ってくる。が、リューネは彼を、馬上から槍の石突きであしらうように突き転がした。

石畳に尻餅をついたまま、怒りと困惑に染まる顔を向けてくる副隊長。

「命令するのはあなたじゃない。レイルだ」

彼を見下ろして言葉を向けるリューネの目には、冷厳とさえ言える光があった。

「……何を、馬鹿な」

「嘘じゃない。この隊の指揮はレイルが執る」

はっきりとそう言って、リューネがセルバソン城最上階の広い窓を槍の穂先で指ししめす。昨日まではチュテルナ王女殿下の居室で、今はロルスン指揮官が詰める司令室。その窓辺にあって中庭を見下ろしていたロルスンは、戦装束の少女が自分の方へ顔と切っ先とを向けたのを見ると

、何かを諦めたように目を閉じて、部屋の中へと姿を消してしまった。

指揮官が、戦場を手放した。その様子を目にした騎兵隊全員が、そう悟った。

「勝つためには誰に従うべきか、まだ分からない人は、いる？」

リューネの声は静かで、それだけに異論を許さない響きがあった。騎兵隊の誰もが彼女に顔を戻す。副隊長を含めた誰からも、一言もなかった。

鎧を鳴らし、再び、騎兵隊の中を敬礼の波が伝播していった。例えがたく気高い何かへの尊崇から自然とわき起こった最初の波とは違って、今度こそ、自らの指揮官と認めた対象への誓いの礼だった。

その波紋の中心にあるのは、ほっそりした身体には大きすぎるようにさえ映る軍馬にまたがり、青の戦装束を陽光に煌めかせた、美しい少女。その肌は何ものも汚し得ないと思えるような透き通る白。白銀を紡いで作った錦糸を思わせる髪が端麗な顔の周りを縁取り、騎兵隊に向けられた瞳は透徹した輝きさえ秘めた紅玉色。

それは、ただそこにいるだけで全軍に勝利を確信させるような、凛々しい戦女神の姿だった。

「リューネ」

城門の前から、レイルが彼女を呼んだ。戦場で英傑の名を口にしたというよりは、町中で幼友達に声をかけただけのような素朴さで。

リューネが彼の方に目を向けた。その時だけは戦女神の瞳から峻厳な光が消えて、柔らかな色が宿る。

「騎兵隊の指揮は、リューネに任せるよ」

場違いなほど穏やかな微笑みとともに、レイル。そして、無言のまま馬上で首をかしげた彼女に、

「正直言えば、指揮のやり方も戦術も、僕はリューネほどよく分からないしね」

今度は苦笑いで、そう続けた。

「レイルはどうするの？」

「僕は、自分の力を信じて戦うだけだよ」

問い返すリューネと、腰の長剣に軽く手をかけて答えるレイル。戦女神は彼に向かって小さく口元に笑みを浮かべると、「うん」とだけ応じた。

それから、表情を引き締めると整列した騎兵隊にもう一度顔を向け、凛として力強い声で、戦女神は命令を下した。

「騎兵隊は右翼と左翼に分ける。両翼はわたしの号令で騎馬に鞭を入れて城門を抜け、ダーション陣形の目前で左右に転進して背撃をかけて。

向こうの騎兵を前に追い立てて、進路をふさいでいる歩兵を踏みしだかせる。

両翼はそのまま前へ押しだし、騎兵と歩兵の境界まで入ったらもう一度左右へ転出。その後は相手の騎兵を包囲して殲滅しなさい」

一六に届くかどうかという年格好の少女が語るものとは思えない彼女の言葉は、だが、騎兵隊全員の胸に勝利への渴望をかき立てる響きがあった。

そこまで一度唇を閉ざし、居並んだ騎兵隊を見据えるリューネ。そして、誰もが手綱を握る

手に力を込めて自分へ顔を向けているのを見て取ってから、続けた。

「相手はこちらの一〇倍。一人でもためらって馬足を緩めれば、後ろに回る前に押しつぶされる。一人相手を討ちもらせば、味方がその一人に倒される。

相手より蹄一つ分でも速く騎馬を進め、相手より穂先一つ分でも果敢に槍を揮うことだけが、勝利につながることを忘れないで」

騎兵隊の兵士全員が、胸の前で騎乗槍を構え、三度敬礼した。

リュウネはうなずきで答え、槍で宙に線を引くと、そこから左右両翼に分かれるようにと全隊を促した。騎兵隊が馬具を鳴らしながら、中庭の左右奥へと隊列を潜ませる。

まるで昔からリュウネが指揮官だったかのようにスムーズなその動きを見やりながら、レイルは一度城門の前を離れ、リュウネの方へと歩み寄った。

「いよいよだね」

声をかける。戦女神の少女は身軽に鞍から下り、彼の隣に立った。そして、妙に合点のいったような表情でうなずきながら、一言。

「やっぱりここが落ち着く」

何をのんきな、と言いたくなるような言葉。

「戦女神は運命の英雄のそばで戦うものだからなのかな？」

「うーん……どうだろう。馬車でタータと一緒にいる時も落ち着いた」

その答えに、なぜとはなく苦笑いになりながら、そうですかと相づちを打つ、レイル。リュウネが城門の方へ顔を向けた。

「……出撃はいつ？」

「もうすぐ。彼らがわたしたちの出撃を見ても対応できない距離まで来てから」

レイルの問いかけに、いつもと同じ穏やかさでそう言うリュウネ。

「僕はどうしたらいい？ リュウネと一緒に走ろうか？」

尋ねると、彼女は顔をこちらへ向けて首を横に振った。

「レイルは城門のすぐ外。わたしたちの攻撃で、ダーション軍はこの城の方へ追いやられてくる。門は開けっ放しにするから、目の前が城壁の彼らにとって数少ない逃げ場がそこになる」

「……殺到してくるんだろうね」

「来るよ。だからレイルじゃないと防ぎきれない」

レイルはその言葉には答えずに、目を城門の外にやった。ダーション軍の姿が、ひとり一人の兵士の様子までが、もうはっきりと見える。

「……レイル？」

かすかに揺れる声で、リュウネが彼の名前を呼んだ。レイルは口元に微笑みを浮かべ、一度だけ軽く目を伏せてから、戦女神の顔をしっかりと見据えた。

「大丈夫」

うなずいて、決して大きくはないがはっきりとした声で告げるレイル。その瞳には、気負いと違う決意のこもった光。

「僕が抜かれたら、チュルリーまでの壁がなくなる。

誰もここを通さないよ」

リューネはその言葉に、安心したような小さな笑顔を浮かべた。

## ■湖水地帯攻防 1

ダーション軍から見たセルバソン城は、沈黙のままだった。城門を開け放ったきり、使者が旗を立てて駆けてくるでもなければ、歩兵が湧くように突撃してくるでもない。静穏とも不気味とも言える動きの無さだ。

その間にも進軍は続き、今や陣形の最前列と城壁までの距離は数百メートルとない。

いくら何でも近づきすぎではないか。この距離で何の動きもないのはかえっておかしい。前が歩兵で詰まっていることと騎兵が戦速に乗るまでには一定の助走を必要とすることを考えれば、せめて騎馬隊だけでもここで陣形を整えておくべきだ。

先に指揮官に手を問うた副官はそう考えて、

「お館様。騎兵隊は一度ここで止めてはいかがでしょうか」

半馬身ほど前を意気揚々と駒を進めていく主に声をかけた。

「何のためだ」

「セルバソン城に動きがなさ過ぎます。我々に降る気であれば、この距離まで近づけば使者を立てていて然るべきではないでしょうか」

「城門を開けたのだ。それ以上の言葉が必要か？」

「は。……しかし」

副官が言葉を重ねようとした時、

「おお？ ふん。見ろ。奇しくもお前の言う通りだ。使者が出てきたぞ」

ダーション軍指揮官は面白くもなさそうに城門の方を指さして見せた。顔を向けてみる副官。確かにセルバソン城の黒い城壁の前に、人影が見える。

「……少年、でしょうか？」

「そのようだな」

城門の外に一人だけ、馬にも乗らずに歩み出てきた人影は、その背格好からするとまだ成人も迎えていない少年のようだった。その容姿は軍役に就いているようには見えにくく、彼が一人だけ城壁の外に出てきた様は、湖沼地帯の平坦な土の上へ一つだけ人形が置き忘れられたかのようだ。

その少年の姿は、このような城塞の前を歩いているよりも、どこかの街角を歩いている方がよほど景色になじむ。実際、城主の言葉を伝えるために駆けだしてきたという風でもなく、家の近所を散歩しているだけかのような足取りだ。

それでも、

「着鎧して、帯剣もしております。使者ではないのでは」

「いい加減にしろ。臆病風に吹かれたか」

警句を発する副官に、指揮官は疎んじるような目を向けて一喝した。

「貴様は何か？ 栄えあるダーション軍が、たった一人の少年に怯えて、慌てて陣形を整えはじめたなどという醜聞を残したいのか？」

そう言われてしまっは、副官にも返す言葉はない。顔を伏せて、「ご容赦を」と呻くように口にするしかなかった。

せっかくの高揚した気分にあ水を差されて、不機嫌に鼻を鳴らす指揮官。

と、

「お館様。騎馬が出てきました！」

陣形の中央あたり、騎兵隊の最前列にいる物見が、振り向いて声を上げた。目を向ける指揮官

。

青い戦装束に身を包んだ端麗な少女が、騎馬を駆って馳せてくる。その手には槍を携え、肩には長弓をかけている。少年が後ろを振り返ったのが遠目にも分かった。少女の顔もまた、少年の方へ向けられている。

騎馬の少女が徒歩の少年を追い越す時、二人がともに微笑み交わしたように見えた。

「貴様の声が聞こえたのではないか？ 今度こそそれらしい使者が来たではないか」

からかうような言葉をかけてくる指揮官の見立てを、副官が固い声で否定する。

「違います。これは一一」

彼の言葉が終わらないうち。大地を揺らすような蹄の音とともに、セルバソン城の城門から、関の声も高らかにイーグリアの騎兵が突出してきた。

レイルは自分の両脇を駆け抜ける騎兵隊を、不思議なほど静かな気分で見送っていた。右手側を歩いていく一隊が右翼。左手側は左翼。今はあたかも四列縦隊でまっすぐ突っ込んでいるように見えるが、これがダーション軍の目前で二手に分かれて、獲物を捕らえるカマキリの腕のように敵陣の背後に回る。

風圧が髪をかき上げ、馬の毛並みが顔をかすめるような距離でも、レイルは落ち着いていた。馬体の筋肉の動き、馬具の跳ね方、そういったもの全てが今の自分には感じ取れた。

そうして、最後の一騎が土煙を上げながら駆けていくのを見送るレイル。隊列の先頭を走るリュウネの姿はもう動く山脈のような馬列の向こうになっていて、見えない。

戦女神本人が聞いたら見損なうかと怒るのかも知れないが、

「……リュウネが傷を負いませんように」

レイルは彼女の顔を思い浮かべながら、小さく天に祈った。

わき起こった関の声に、チュルリーは腰掛けたソファの上でびくりと身体を震わせた。

戦場に身を置いたことも、もちろん軍役に就いたこともない。戦の話を知るのは好きでも何でもなかったし、武人の類は基本的に粗野で嫌いだ。

そんな、戦争とは縁遠い彼女であっても。居室を揺るがす大音声が、戦の始まりを告げるものなのか戦勝を誇るものなのか、その違いははっきりと感じ取れた。

心臓が壊れそうなほどに拍動している。手足の先が冷たくて、のど元に緩く鎖を巻かれたような胸苦しさがあった。

「……レイル」

自分よりほんの少し年上なだけの、少年の顔が浮かんだ。護衛の騎士達よりずっと若く、身体も小さい。腰に下げていたのは王宮での儀礼用のものより頼りなく見える長剣だけ。身を守るも



のは、鎧ではなくその部品と言いたくなるような胸当てだけだった。

そんな拵えのレイルが、あの優しい微笑みがよく似合う木訥な顔で、戦場に立つ。その光景を想像したとたん、心臓を冷たい手で握りしめられたような気がした。

薄暗く窓もない居室の中、ソファに浅く腰を沈めて、何かにすがるように自分の細い肩を抱きしめるチュルリー。幼い王女殿下はそこに残るレイルの手のぬくもりを必死で呼び起こしながら、ただ無心に、彼の帰還だけを願った。

リューネは隊列の先頭を走りながら、鎧の上で膝を伸ばして立ち上がり、肩にしていた弓を外して矢をつがえると、引き絞った。狙うべき場所を探す、静かな紅い瞳。

ダーション軍の最前列に位置する歩兵は浮き足立っているが、横も後ろも密集隊形なので逃げ場がない。隊列はほとんど乱れていないまま、前が足を止めたので前後の距離がさらに詰まっている。

ここから射ても最後尾まで届く。瞬時にそう判断すると、リューネは弦を放った。天高く鋭い音の尾を引いて、矢が駆け上がっていく。その行く先を確かめて待つようなことはせず、すぐさま次の矢をつがえた。

両翼散開の合図を出すまでに、放てるのはあと三本。戦女神はそう計算すると、ほとんど同じところを狙って立て続けに弦を鳴らした。後ろに続く騎馬からも散発的に矢が放たれていく。

リューネは危なげなく弓を肩にかけ直すと、鞍に腰を戻し、槍を天に突き上げた。

「散開！」

後続に顔を向け、澄んだ声で命じながら槍を左右へと振った。自身も馬首を巡らせる。目の前に迫っていたダーション軍最前列が引きずられるように横に流れて見える急転進。騎馬は乗り手の手綱に応えようと、ほとんど身体を倒すようにして進路を変えた。

左右両翼に分かれて、人間でできた壁のようなダーション軍陣形の目と鼻の先を横切っていくイーグリア騎兵。よほど手の込んだ準備をしているか大型で重い武器を持っているかしないと、自分の横手からやってくる騎兵を止める手段は歩兵にはない。今このときのダーション歩兵も然りだ。

リューネは冷厳な眼差しで相手方の様子を見極めると、手にした槍を鋭く揮った。戦女神の槍さばきに馬体の速度が加わった一撃に、鎧を着込んだ男達の身体が木の葉のように宙を舞った。

ダーション軍最前列に悲鳴が響き、血しぶきが後列へ驟雨のように降りかかった。

「お館様！ 敵襲です！」

「見れば分かる！」

陣形中央の物見が張り上げた声に、苛立ちを込めて指揮官が言い返した。歯がみする。どうなっている。内通者はどうしたのだ。なぜ城門を開けたのに攻めて出てくる。

今さら言っても始まらない疑問と文句ばかりが彼の頭の中を巡っていた。

「向こうは寡兵です。歩兵が食い止めている間に騎兵をいったん散開させて助走をとり、こちらが速度で上回れば――」

「ならん！」

副官の献策に、ほとんど反射的に否定の言葉を口にする指揮官。そしてその勢いのまま腰の剣を抜き放つと、

「奴ら、まっすぐ中央を抜ける気ようだ。

中央を厚くして食い止めろ！ 相手は寡兵だ、押しつぶせ！」

切っ先を前につきだして勇ましく命じた。

しかし、すでに重装歩兵隊なみの密集隊形になってしまっている上にイーグリア騎兵が急迫してきて距離もない今、厚くしろと言われてもダーション兵は動きようがない。

それでも何とか隣の兵士と肩をくっつけ、馬体を寄せ合うようにして中央へと絞り込んだとたん。それを読んでいたかのように、イーグリア騎兵は速度を保ったまま鮮やかに左右へと分かれた。

直前に放たれた矢が、空気を裂く乾いた音を伴って飛来する。長弓や短弓の矢に板金鎧を貫くような威力はない。が、馬の毛皮であれば十分な深さまで突き立つ。

ダーション騎兵の幾人かが騎馬を射貫かれて落馬し、さらに悪いことに、そのうちの一頭が痛みあまり前にいた歩兵の列に躍り込んだ。軍馬の馬体は一頭で一〇〇〇キロ近い。

敵兵と一合も交えることなく、ただ味方の混乱のために背中を蹴り飛ばされ、頭を踏みしだかれた歩兵の苦鳴が痛々しかった。

副官は唇を噛んだ。完全にしてやられた。すでに最前列では金属がかみ合う高い音が響き、それ以上に、敵刃にかかる兵士達の悲鳴がこだましている。

ダーション兵は混乱し、まともな指揮はなされず、ほとんど立ち尽くしたまま個々に身を守ろうと右往左往しているだけだった。

この指揮官では挽回はおぼつかない。副官はそう思いながらも、主君を見捨てるわけにもいかなかった。

「お館様を陣形の中央へ！ 敵は回り込んでくるぞ！」

打開策を見出そうと忙しく辺りを見回す主がまたがっている騎馬の、その尻を思い切りひっぱたいて前へ走らせながら、副官は大声で命じた。

側近の一人が後に続き、指揮官を後列から陣形中央へとエスコートするのを見届けて、今度は左右を見ながら声を張り上げる。

「騎兵、中央後列。脇と前は捨てる、敵はそこには来ない！」

後ろだけを固めろ！ 一騎も通すな！」

副官自身、四方からの圧力を受けて隙間を失った陣形の中で、無理矢理馬首を巡らせて後ろを向く。その、目に。

「……速い」

それだけで戦意を削がれるような速度で突撃体勢に入ったイーグリア騎兵隊の姿が映り、思わず、諦念のにじむ呻き声が彼の口元から漏れた。

## ■湖水地帯攻防 2

先陣を切るリューネの視界が、不意に開けた。すぐ横をふさいでいたダーション軍の壁が途切れた瞬間だった。転進して相手陣形の後ろに回り込むのには成功。敵に与えた損害も、今のところ必要充分。あとは後続の損耗度合いだ。

そのまま大きく馬を走らせながら、リューネは槍を振るってまとわりついた血を飛ばし、後ろをふり返った。左翼に振り分けた五〇騎は、ほとんど脱落せずについてきていた。戦場の向こう側を見る。ほぼ同じタイミングで、右翼もダーションの陣形を回り込んだところだった。

第一関門は突破。戦女神は戦況をそう評した。

方向転換後の助走にちょうど距離だけダーション軍最後列から離れると、手綱を引いて馬首を返す。騎馬は涎を飛ばしながら、再びダーション兵のうごめく方向へ前足を向けた。力強い筋肉が大地に蹄を押しつけ、巨体が加速していく。左右両翼に分かれたイーグリア騎兵の隊列は、さながら二匹の蛇のようになめらかに向きを変え、ダーション軍へと迫った。

が、しかし。

「……思ったより反応がいい」

リューネは敵陣を視界に収めて、呟いた。ダーション軍の最後尾が、すでにこちらへ馬首を向けている。背撃に備えている相手騎兵隊の層はまだ薄い、それでも彼女の見込みよりも素早い対応を見せていた。

休むことなく鎧に立ち、槍を鞍と足首の間に差して器用に固定すると、再び長弓を構えるリューネ。狙うべき相手の姿は見えていた。

リューネの指から放たれた弦が矢柄を押し出し、重い矢じりを運ぶ飛箭は鼓膜を切るような鋭い音を後ろに残して戦場を貫いていく。

一呼吸ほどの間に二発。

しかし、その矢は標的に――陣形中央へ逃れようとする相手指揮官に届く前に、側についていた兵士の盾で受け止められた。

弓を戻して槍を手に取りながら、リューネは、少しだけ不満そうに唇をへの字に曲げた。

その間にも騎馬は泡を吹かんばかりの速度で走り、ダーション軍最後列が見る間に迫ってくる。リューネは雑念を払うように槍を一振りして、水平に握ったまま天に掲げた。

右翼に目をやって同じようにためらいなく突進しているのを確かめ、それから後続をふり返る。

「ここで雌雄が決まる！ 突き通って！」

手にした槍で大きく空に円を描いて、リューネが凜とした声を放った。騎馬に拍車をかける。

蹄が大地を打つ音と雄叫びが重なる中を、雷雲を貫く二尾の竜のように駆け抜けて、イーグリア騎兵隊はダーション軍最後列に突撃した。

ダーション軍副官は、イーグリア騎兵隊の先頭を走る少女が鎧の上に立ち、弓を引き絞るのを見た。並足で歩かせている時でさえ容易でないことを、駆け足を上回る最大戦速の最中でやっける、凜々しい戦装束の少女。

彼はその姿に、戦慄を超えて畏怖さえ覚えた。

少女が矢を放つ。彼も我を取り戻し、とっさに声を上げた。

「近衛！ 弓だ！」

副官の顔のすぐ横を矢柄がかすめるのと、近衛の者達が主君の背中に楯をさしかけるのとは、ほとんど同時だった。間一髪、矢じりが金属の薄板で補強した楯に突き立つ。

「……狙ってやっているのか……？」

およそ同じ人間にできることとは認めたくないような正確さで飛来した二条の矢に、副官は背筋が栗立つのを感じながら声を漏らした。

だが、戸惑っている時間はない。少女が槍を振り上げ、さらに騎馬に拍車を当てるのが見えた。

左右両翼からVの字型に、突っ込んでくるイーグリア騎兵。騎乗槍が陽光を弾いてきらめき、軍馬の馬体がそれ自体で破壊槌のような衝撃力を秘めて迫る。

対するこちらは最後尾の二、三列がようやく相手の方へ馬首を向けられたところ。だく足どころか助走をはじめられてさえいない。

この状況で、打撃力では勝負にならない。

瞬時にそう判断して、副官は再び声を張った。

「両翼、左右後方から来るぞ！ 自分に正対する相手だけ見ろ！」

突破力では勝てない！ 槍は下ろせ！ 楯を両手で構えろ！ この一撃を耐えれば勝機はある！」

彼の言葉が終わるやいなや。巨人がダーシヨンの陣に打ち込んだ楔のように、鋼でできた雪崩を思わせる衝撃を伴って、イーグリア騎兵が最後列に激突した。

武器や防具はおろか、馬が、人間が、高い金属音とともに宙を舞う。その圧力は副官のところまで届き、彼もまた懸命に鞍を足で挟み、落馬しないようにと鎧を踏みしめた。

「耐えろ！ 相手は寡兵だ、耐えれば止まる！」

怒濤のごとくイーグリア騎兵が駆け抜けていく度、溶岩流のただ中に取り残された砂山のよう、自分の両脇にいる兵士達が一騎また一騎と崩れていく中で、声を枯らして激励を続ける副官。その耳を、

「何をしている、前だ、前に押し出せ！」

度を失った主君の声が打った。はっとして振り返る。

抜き放った長剣を指示杖の代わりに振り回して、指揮官がわめいているのが見えた。

「敵は後ろだ！ 見る、前には誰もいない！ 城門までがら空きだ！ 今こそ進め！」

けしかけるように、長剣の切っ先を前へ前へと振りかざす。副官は歯がみしながら、精一杯の大声でそれを止めようとした。

「お館様、いけません！ 城門の奥には罠があるはずです！」

「黙れ！ セルバソン城のイーグリア兵はもう何人も残っていない！ もともと数はいないのだ！」

ありもしない危険に怯えてここに釘付けされていれば、それこそ相手の思うつぼ！」

指揮官はそう言って彼の言葉を退けると、「いざや、進め進め！」と再び号令を下した。歩兵がセルバソン城の方へと進み始める。指揮官とその近習たちの騎馬も、歩兵隊の背を追い立てるように続く。

騎兵の陣地を駆け抜けたイーグリア軍は、もう一度左右に散開しながらも、後ろからその一団に矢を射かけ、威圧してきた。

副官は思わず運命を呪う言葉を吐いてから、

「騎兵隊、反撃に移るぞ！ 続け！」

鞍の金具に掛けていた騎乗槍をとり、指示を下した。ダーション騎兵隊が動き出す。

イーグリア軍が駆け抜けて無人になった陣形後方に向けて馬足を進め、まずはまともに戦える速度を手に入れなければならない。副官は騎馬に拍車を掛け、イーグリア軍左翼の後ろを追うように馳せていった。

彼の後に続く騎馬は、およそ三〇〇。指揮官とともに城門に向かった騎馬がおよそ一五〇騎。

イーグリア軍最初の攻撃で、ダーション騎兵の約五〇騎が戦線から脱落していた。

## ■湖水地帯攻防 3

リューネは不満だった。考えていた以上にダーション軍の対応が良い。今の突撃で相手騎兵隊の四分の一を排除するつもりでいた。立ち尽くした状態の、馬首さえこちらに向けられていない相手なら可能だったはずの水準。

だが実際には、ダーション騎兵隊は賢明にも武器を手放して守りに徹し、イーグリア騎兵の穂先は並べられた楯をむなしく削っただけ。戦果は期待の半分にも届いていない。

ダーションが防御一徹だったのでこちらにも損耗はほとんどないが、状況はむしろ悪化していた。向こうも騎馬を走らせはじめて速度の優位は急速に消えつつあり、反面、数的不利はまったく解消していない。騎馬の疲労度の差は歴然。しかもこちらには、楯に阻まれて騎乗槍を折ってしまい、長剣を手をしている騎兵もいた。

目を転じ、セルバソン城城門の方へと進むダーション兵を確かめる。歩兵が四〇〇、騎兵が一五〇といったところ。散開の時に倒した数と混乱で自滅してくれた数とが、こちらはリューネの予想を上回っていた。

「うーん……どうしよう」

戦況を把握すると、状況からはふさわしくないような声で呟きをこぼすリューネ。

あれだけの数が迫ってきては、レイルでも持たせることができたとぶん数十分。騎兵まで一部が向こうに行ってしまったのが計算外だった。

できるだけ急いで彼の援護に行かなければいけない。でも残っている相手騎兵の数は予定を上回っている。

リューネは素早く頭の中で状況と戦果を計算し直すと、決断した。

まずは戦場の向かい側を走る右翼を見る。向こうもほぼ全騎が残っている。こちらと違って後尾をダーション騎兵に追われていない分、速度を落としてリューネの指示を待っていた。

頭上に槍を掲げ、水平に握った後、大きく円弧を描いて穂先を後ろのダーション騎兵隊列へ向ける。そのまま、ぐっと槍を胸の前に握った。

符牒が決めてあったわけではない。「速度を落とし、隊列を整え、回り込んで相手を横撃」。リューネの戦術が正しく伝わったかどうかを確かめる術はないが、向こうの先陣を走る騎馬が大きく頷いたのが見えた。

右翼が自分の思い描いたとおりに動いてくれると信じて、今度は後続の左翼を振り返る。

「後続！ ダーション軍を引きはがす！ ついてきて！」

戦女神は天高く槍を掲げて、声を上げた。後に続く左翼の騎兵が、よりいっそうの前傾姿勢を取った。リューネの手にする槍の穂先が、太陽を照り返して清流のような光を引きながら、すうっと前へと差し出される。

「チャージ！」

怒号と蹄の音の中でも清らかに通る、綺麗な声が、長く余韻を引いて突撃を告げた。まるでその響きに引っ張られるかのように、もはや限界と思われたイーグリア軍騎馬の足が速まる。

イーグリア軍にだけ強い追い風が吹いているかのように、追いつがるダーション軍騎兵との間隔が少しずつ開いていく。

後ろから放った矢でさえも追いつくことはないのではないかと思えるような速度で戦場を駆け抜ける、イーグリア騎兵。

その先頭に行く戦女神の目にも、全ての景色が暴風にさらわれるように後ろへ流れて見えた。鞍の下の馬体が発火しそうなほど熱を帯びているのが感じられる。今が闇夜であれば、戦場を馳せるイーグリア騎兵の隊列がオレンジの光に彩られて見えたのではないか。

その速度についてこられず、ダーション軍騎兵隊の怒号がじりじりと遠くなっていくのが分かった。

が、リューネの狙いは相手騎兵の騎乗槍から逃れることではない。この湖沼地帯に存在するあらゆるものが残映を残して行き過ぎる中、真正面にある獲物の姿だけがくっきりと視界に捉えられた。

戦女神が先頭を走るイーグリア軍左翼の進む先には、  
「――お館様、敵が――！」

セルバソン城へ行進するダーション軍騎兵の隊列。

自分がまたがる騎馬の鼻先がそこに触れようとした瞬間。戦女神は槍を揮った。

リューネ率いる五〇騎の騎兵隊は、およそ信じがたい速度のままダーション軍馬列に真横から激突。的確な判断を下す副官の声があり、楯の奥で身を固くしていられた先ほどとはまったく状況が違う。無防備な側面を衝かれたダーション軍騎兵は騎乗槍に貫かれ、馬体にはじき飛ばされ、押し倒される騎馬の下敷きになってさらに蹄で踏みしだかれた。

人間の身体と武具と、さらにはそれらの一部だったものが宙を飛び、大地を濡らし、その上を轟音と共にイーグリア騎兵が駆け抜けていく。

ダーション軍の一方的な損耗。急襲を受けたダーション騎兵一五〇騎の内の五〇騎以上が、なんの抵抗もできないままに蹴散らされた。

イーグリア軍左翼はそのまま敵隊列の後ろ半分を横切る形で、一度戦闘区域から抜けた。馬足を弛め、たった今駆け抜けてきたダーション軍陣形の方を振り返るリューネ。

彼女たちが突き抜けてきた場所だけ、流水に洗われたように騎影がなくなっていた。巨人が刷毛で地面に描いたような赤い道が、そこを横切っている。その後続は士気を失って馬を止めてしまい、前衛は早くセルバソン城内に逃げようと夢中で馬足を速めていた。騎馬の速度について行けるはずもない歩兵たちがそこここで突き飛ばされ、踏みつけられている。

残るダーション軍騎兵はあわせて四〇〇。リューネは戦況を把握すると、もう一度槍を天にかざした。

「チャージ！」

聞く者全てを、人間はおろか騎馬でさえも鼓舞する、戦女神の凜々しい声で。リューネは再び進軍を告げた。

ダーション軍副官は我が目の前で起こっていることが信じられなかった。あれだけの距離をあれだけの速度で走り続けたにもかかわらず、イーグリア軍騎兵の馬足が衰えない。

引き離されれば再び機動戦を仕掛けられると判断して懸命について行っているが、彼我の距離

は縮まるどころか引き離されつつあった。

先陣を軽装の少女が切っていることが奏効している。副官は心中でうめきを漏らした。馬は群れで暮らすので、前を走る仲間についていこうとする性質が強い。その先頭を、重荷が少なく体力を失いにくい騎馬が走っていれば、他の馬もつられて速く走るということは珍しいことではない。

が、肝心の乗り手がそんなに軽装で小柄であれば、普通は長く戦場を走ってられないはずだった。

……一体、何者なんだ、あの少女は。

副官はきつく奥歯を噛みながら、とにかく引き離されるまいと、前に行くイーグリア騎兵の隊列後尾だけを睨みながら拍車をかけ続ける。気を抜けば一瞬で置き去りにされそうな速度に、視野も狭まる。

と、視界の端に見慣れたものが触れた。常に自分の隣にあって、突進する方向にあるべきではないもの。

あれは、旗――？

「！ 後続、転進！」

それがなにを意味するのかを瞬時に理解して、副官は騎乗槍を水平にして頭上に掲げながら、後ろへ顔を向けて叫んだ。槍の穂先が示す方向へ手綱を引く。騎馬が少し速度を弛めながら進行方向を変えた。

顔を巡らせ、追っていたイーグリア騎兵が突っ込んでいく先を見る。やはり。

その先には、指揮官の旗を翻らせた友軍の隊列があった。イーグリア騎兵につられて危うく味方に突っ込むところだったと、冷や汗が吹き出る思いがした。

が、固いつばを飲むまもなく。

「副官、敵が――」

「突撃ィ！」

味方の声と、敵の号令とが重なって彼の耳に届いた。そちらを振り向く。

「……速い」

この戦場に立ってはや二度目の、諦念の滲む声。

急転進で馬足のゆるんだダーション軍騎兵隊の隊列に、イーグリア軍右翼五〇騎が突撃してきた。



## ■湖水地帯攻防 4

レイルは開かれた城門の外に立ったまま、戦況を見つめていた。五〇騎ずつの左右両翼が、まるで一对の意志ある獣のように伸びやかに躍動しながら戦場を駆け抜けている。

リューネはその先頭にあつて、突撃をかけると細身な身体は敵騎兵の中に埋もれて完全に見えなくなってしまった。それでも、彼女のいるであろう場所からは敵兵が切り飛ばされ、突き倒されていくのが分かる。そして相手の隊列の反対側から再び姿を見せるとき、戦女神は常に隊列の一番前に居続けた。

やがてダーション軍の陣形が崩れはじめる。最初は歩兵隊を前にして、次にその後ろから味方さえも突き飛ばすようにして、ダーション軍騎兵がこちらへ駆けてくるのが見えた。

レイルは静かに長剣を鞘払った。ザッツが託してくれた剣が、よく手入れされた刀身に太陽の光を集めて輝く。

深く息を吸いながら、できればこのままダーション軍が退いて欲しいと願った。もともと緊張関係にあったわけではないイーグリアとダーションだ。このまま退いて、何事も起こらなかったかのように元通りになってはくれないか、と。

が、それが甘いと言うにも甘すぎる願望であることは、こちらへ向かってくるダーション騎兵の姿が如実に語っていた。

気持ちを静めるように、目を閉じるレイル。

彼らはここに脅威がないと思っている。ここに逃げ込めば勝機があると考えている。逃げ場があるうちは、退却しようとは思ってくれない。

僕は、僕がここにいることの意味を、ダーション軍すべてに分からせなければいけない。それだけが、この戦いを収める道になる。

大きく、深く、レイルは息を吐いた。静かに目を開ける。今自分が背にしている城塞の最上階で、ソファに身を沈めたまま自分の戻りを待っているチュルリーのことが頭に浮かんだ。

幼い姫君の、細い肩。エメラルドの瞳。大粒の涙。生還を願ってくれた、言葉。

顔を上げた。ダーション軍の馬列から突出した一騎が、怒声を上げながら眼前に迫っていた。腰だめに構えられた騎乗槍の穂先がレイルの胸元を狙っている。

長剣を手にした少年は静かな眼差しのまま一歩踏み出して、大地を蹴った。その身体は軽やかに舞い上がり、騎乗槍の上を飛び越して、握った剣を一閃させた。響き渡る、板金鎧が切り裂かれる高い音。

レイルは間髪入れずに騎兵が手にしていた騎乗槍を奪い、戦場の奥に見えた一騎へ向けて、着地と同時に全身のばねを効かせてそれを投じた。

その、瞬きほどの一挙動の後に残されたもの。

それは、一撃で右肘から先を飛ばされたダーション騎兵の身体と、苦悶とともに乗り手が落馬したまま城門の奥に駆け込んでいく騎馬と、雷鳴を引くような勢いで飛来した騎乗槍に串刺しにされた軍馬の姿と、あまりの事態に誰からともなく足を止めたダーション軍だった。

城門の前に立っていた、軽装の少年。立ち向かってくるのが想像できるどころか、突進してくる騎馬隊から上手く身を躲すことができるとさえ思いにくかった彼が、鎧を着込んだ騎兵を一

撃の下に打ち倒した。あまつさえ、その騎兵が持っていた騎乗槍を掴んで投げつけ、大の男を容易になぎ倒す頑健な軍馬の胸板からしっぽまで、二本目の背骨でも通すかのようにして貫通させてしまったのだ。同じ騎乗槍をカタパルトで打ち出したとしても、こうはいかない。

動きの止まった戦場を見渡して、レイルはゆっくりと、明確に言葉を発した。

「退けば、追わない」

しかし、それに反して、

「何をしている、進め進め！」

動きの止まった隊列の後ろから、指揮官とおぼしき騎馬兵が長剣を振りかざして号令をかける

。

「ここで止まっても騎兵がやってくるぞ！ セルバソン城内に入ってしまうとこちらの勝ちだ！」

その声に押されて、ダーション軍が再び進撃を始めた。リューネが開戦ののろしを上げた時点で、すでにダーション軍最前列とセルバソン城城壁の距離は五〇〇メートル内外といったところ。歩兵を押しつけて前に出た騎兵約五〇騎は見る間にレイルの目前に迫り、その後ろから三〇〇を上回る歩兵が剣を抜き放って進軍してくる。

レイルは唇を引き結んで、肉薄してくるダーション騎兵を見据えた。退かないというのなら、退くまで押し返し続けるだけ。

そう心を決めて、レイルは長剣を揮った。

## ■湖水地帯攻防 5

リューネは三度目の突撃を終え、戦場を馬なりで遠巻きにしながらか、もう一度状況を把握しようとした。

三〇〇と一五〇に分かれたダーション騎兵のうち、小集団の方はリューネ達の攻撃で七〇騎前後まで数を減じた状態で、レイルの陣取る城門を突破しようと進撃している。歩兵三〇〇もその後を追っていて、騎兵の大集団の方はイーグリア軍騎兵隊の突撃を受け、残っているのは二五〇騎程度。

一方でイーグリア軍側の損耗は、一〇〇騎の騎兵のうち三〇騎がすでに脱落。特に敵騎兵大集団に攻撃を仕掛けた右翼の五〇騎は、速度の差と好機を逃さない機敏さとで善戦したもののさすがに六倍の数の差は大きく、突撃後に生き残ったのはわずか半分だった。

この湖沼地帯で戦意を持って動く者は、都合、ダーションが騎兵三二〇。歩兵三〇〇強。イーグリアは騎兵七〇と、レイルとリューネ。

敵の数は、開戦前にリューネが想定した数を下回る水準まで討ち減らすことができた。が、イーグリア側の損耗も大きく、しかも敵の指揮官はまだ健在だ。

戦女神の端正な顔に、険しい表情が刻まれた。戦況はイーグリア優位に進みつつある。とはいえ、決定的に好転したわけではない。このまま行けば、優勢に戦を進めたにもかかわらず、数の差で押しきられて終わってしまう。

それに――と、リューネは城門の前へ顔を向けた。たった一人でそこを守る少年の姿を捉えて、彼女の瞳が不安に曇る。

「レイル……」

かすかにとがめるような声で、リューネは思わず呟いていた。

「そんな戦い方をしていたら、駄目」

長剣で騎馬の足を断ちきり、落馬した騎兵から槍を奪うと、その柄をもう一頭の足下へ絡ませ、これも引き倒した。突撃速度のまま鞍から放り出され、地面に叩きつけられて昏倒するダーション兵。レイルはそのまま槍を手にして足を踏み出し、次の敵騎に打撃を繰り返す。相手が手にする槍の手元を鮮やかに穂先で切断。返す刃で、騎馬の鞍を止める革ベルトを断ち切った。用をなさなくなった短い棒を握ったまま、ダーション兵が鞍ごと地面に墜落する。

すぐ横に迫っていた別の騎兵には、先鋭な穂先ではなく石突きでの一撃を食らわせ、馬の上からはじき飛ばした。

次から次へと挑みかかってくるダーション兵と対峙しながら、だが、レイルには戦うほどに強くなる思いがあった。

僕は、殺さなくても、勝てる。殺さずに勝たなければいけない。

レイルの鬼神じみた戦いぶりの前に、ダーション軍は城門前のわずか数十メートルを進むことができずにいた。

足を折ったり乗り手が落馬したりで機敏な動きを失った騎馬が一頭一頭バラバラに歩き回り、その周りには、鞍上からたたき落とされて昏倒し、あるいは板金鎧ごとひどい手傷を受けて戦線

離脱した兵士が折り重なっている。その数はすでに五〇には届いているだろうか。

鞍から落とされても機敏に立ち上がった者や突き倒しただけで傷を負わせたわけではない相手もいたから、実際にレイルが相手にした数はこの倍に近い。

レイルは荒い息をつきながら、鳶色の瞳でダーション軍を見た。指揮官に鼓舞されて、彼らの進軍が止む気配はない。

しかも、城門に近づいた騎馬や兵士から行き当たりばつりに攻撃してきた先ほどまでと違い、攻め手に組織だったものが見え始めていた。

今もまた、真正面から突進してくるだけだった騎兵が、二騎、左右に大きく分けられると、馬足を合わせて両側から向かってくる。その手には、それぞれ騎乗槍と長剣。左右どちらにも逃げ場をなくし、前へ逃ればその後ろから長剣が襲い、後に下がればその分ダーション軍全体が城門の側へ押し出す。そうした意図が読み取れた。

馬体と槍と鋭い切っ先が迫る。レイルは山猫のような敏捷さで左へ動き、そして後ろへ下がった。ただし、彼らが想定したよりも遙かに小さく。

顔を叩く風圧を感じ、地面についた自分の足の横数ミリの所を蹄が駆け抜けていくのを見極めながら、手にした槍の柄を目の前を走る馬体に押しつける。

力を込めた。ダーション軍騎馬の進路が激流に押されたかのようにズれる。その先には、反対側から駆けてきたもう一騎の姿。

二騎兵の悲鳴に、馬体がぶつかる重い湿った音が重なった。余興で催される喜劇を見ているかのような、騎兵同士の正面衝突。

しかしそれを現実のものにして見せたのは、戦場にあっては小柄とさえ言っていよいよ、栗色の髪の少年だった。

騎馬がいなくなきながら自分の近くを離れ、衝撃で投げ出された騎兵が這いずって友軍の戦列へと逃げ戻っていくのを見送りながら。レイルは手にした槍と長剣を鋭く振った。

そして、繰り返した。

「退けば、追わない」

ダーション軍副官もまた戦況を見て、臍を噛む思いだった。

たかが一〇〇騎あまりの敵を相手に、自軍の損耗はすでに騎兵と歩兵をあわせて四〇〇に届こうかという勢いだ。交戦中のイーグリア軍全てを倒したとしても釣り合う損害規模ではない。

しかも、城門前に陣取った少年が尋常ではなかった。手強いとか堅強とか、そういう水準ではない。まったく次元の違う戦いぶりだ。いくら彼が、並んでは五人通れるかどうかという城門の前を主戦場にはしているとはいっても、三五〇対一というのはどちらに有利ということを語るのさえばかばかしい圧倒的な差のはずだ。それは五対一であっても同じこと。

にもかかわらず、その三五〇がたった一人の少年のために城門前に釘付けにされ、一騎一兵としてその内側に入っていくことができない。

副官自身で「城門の奥には罠が」と言ったが、実際にはその手前に、途方もない強兵が配されていたのだと思い知らされた。

しかしともかく、彼は自分にできることで戦況を有利に運ばせなければならない。

「残るは六、七〇騎だ！ 押し包め！」

声を張って兵士を鼓舞し、槍を振りかざしながら騎馬に拍車をかける。まずはイーグリア騎兵隊両翼のうち、二五騎あまりまで数を減らした小集団の方へ馬首を向けた。彼が引き連れるダーション騎兵は二五〇騎。一〇倍の戦力差に逃げ惑うかと思った相手は、しかし、

「大軍は脇が甘い！ 活路は死中にある！ 怯むな、突撃ィーッ！」

互いに声を上げ、激励を交わしながら、騎乗槍や長剣を振り立てて突っ込んできた。

確かにダーション軍の脇は甘かった。まさか反抗してくるとは想定しておらず、二五〇騎の陣形は漫然とした笹の葉型。前後に長くなった隊列は、二五騎という小勢をかえって捉えきれず、岩燕のように機敏に駆け回る相手を制圧するのにひどく手を焼かされた。

ようやくイーグリア騎兵小集団を鎮圧したとき、ダーション軍はまたしても脱落者の数を五〇も積み上げていた。

副官は、自分の油断が招いた思わぬ損耗に奥歯が割れるほど強く歯ぎしりしながら、それでもようやく、戦装束の少女が駆る騎馬の方へ顔を向けた。城門前の少年に加勢しようと、そちらに押し寄せているダーション歩兵の最後列へ突撃をかける、彼女が率いる一隊の姿が見える。

「向こうの進路を横撃する！ これで戦を終わらせるぞ！ 続けェーッ！」

声を枯らして後続に指令しながら、副官はもう一度騎馬を走らせた。

今日という日の払暁に、朝靄の向こうに浮かぶセルバソン城へ向けて行進を始めたとき。まさか数時間後にこのような死闘を演じることになるなどとは想像もしていなかった。

主君が、無防備な獲物がそこにあると信じて始めた戦は、出撃した全軍の少なくとも半分を損耗するという、吐き気のするような損害をもたらした。

だがなんにしても、始めてしまったものは終わらせなければいけない。そしてこれだけの痛手を被った以上、その結末は勝利でなければならない。

副官の後に、とうとう二〇〇騎、開戦当初の半分以下まで数を減じてしまった騎兵隊が、それでも高く関の声を上げながら続いてくれた。

「雁行！」

走りながら指示を飛ばす副官。隊列の中をその言葉が伝わっていき、騎馬隊が中央を先頭にした鳥の翼のように広がった。

連なって飛ぶ雁の群れのような陣形を取ったダーション騎兵隊が狙うのは、戦装束の少女が率いる一隊の横腹。

騎兵は攻撃の後にその場に立ち止まるといことができない。必ず駆け抜ける。その時に側面を衝くことができれば、いかな神速を誇る彼女の隊といえど逃れることはできないはず。

二〇〇騎のダーション軍は五〇騎のイーグリア騎兵を今度こそ討ち果たすべく、速度を上げた。

## ■湖水地帯攻防 6

リューネは迷いなく決断して、城門前に集結しているダーション軍の後列、先ほどの突撃で討ちもらした騎兵隊を標的に据えた。彼らの大半は前にいた歩兵を蹴散らしながらレイルの方へと駆けていたが、二〇騎ほどは歩兵を含めた隊列の後尾に残っている。そしてそこには、相手の指揮官の姿もあった。

もうこちらの手勢は残っていない。突撃をかけるのもあと一、二度が限度。その間にダーション軍指揮官を倒せなければ、状況は打破できない。

リューネは自分の後に従い続ける、五〇に満たない騎兵隊兵士を見た。この戦場で揮い続けた槍を、再び天に差し上げる。続く各騎も、おのおの得物を高くかかげた。

もはや言葉は要らない。もとより兵力の差は歴然。ここまで戦えたことがすでに奇跡の域だ。勝つために誰に従うべきか、分からない人はいる――？

右翼が一〇倍の敵騎兵に押しつぶされ、イーグリア軍唯一の部隊となった騎兵隊左翼の兵全員の脳裏に、リューネの言葉が甦った。誰の胸にも、もう迷いはない。

こちらへ向けられた全員が目が、無心に自分の号令を待つ者のそれになっているのを、リューネもまた感じ取った。

槍を前へと倒した。光の尾を引く、何十人となく敵を倒してなお輝きを鈍らせないその穂先。「チャージ！」

放たれる戦女神の号令もまた、耳にする者を惹きつけ、鼓舞するきらめきを失わなかった。

イーグリア軍騎兵隊の馬足が加速し、セルバソン城に迫るダーション軍の最後列へ横から突っ込んでいく。

リューネ達の狙いに気づいた指揮官とその周囲を固める騎兵たちが、歩兵の陣列の中に入っていき。戦女神はそれを追って進路を変えた。

ダーション歩兵を蹴散らし、撥ね飛ばしながら、標的へ急迫していくリューネ達。

あと少し。リューネは心の中でそう呟きながら、槍を握る手へかすかに力を込めた。ダーション軍指揮官の騎馬が穂先の届く距離まで来る。槍を揮う戦女神。

交錯。駆け抜けたリューネの手には重い手応えが残っていたが、しかし、彼女は柳眉を険しくしかめながら、鞍の上から後ろを振り向かずにいられなかった。

身を挺して指揮官を守ろうとする騎兵の壁に阻まれ、彼女の槍は指揮官の騎馬を屠るに留まっていた。もんどり打って倒れる軍馬と、投げ出されてダーション軍歩兵の間に転がる指揮官の姿とが目に映る。

それでも、馬足を止めて引き返すようなことはできない。ただ後続が仕留めてくれることを祈りながら、駆け抜けるしかない。

「……むう」

小さく声を漏らしながら、リューネは顔を前に戻した。と、紅玉色の瞳がその視界の端に、右翼を始末したダーション軍騎兵が迫ってくるのを捉える。

顔を向けた。二〇〇騎に届くかという相手騎兵隊が、横に広い陣形で突進してきていた。このまま行けば、城門前のダーション軍陣形を抜けたあたりで横撃を受ける。

進路を変えようにも、反対側はダーション軍歩兵隊とセルバソン城の城壁でふさがれている。この状態では減速もできない。そもそも騎兵は攻撃中に速度を落としていい兵種ではない。

戦女神は瞬時にすべきことを判断した。

後続へ顔を向け、ただ一言。

「走り勝って！」

言うやいなや、騎馬に拍車をかけ、速度を上げる。ダーション騎兵隊が自分たちに追いつく前に、彼らが迎撃地点とした場所を越えること。その単純な一点にしか、イーグリア騎兵五〇騎の活路はなかった。

騎馬が懸命に足を前に投げ、土を蹴りながら加速していく。あと一〇〇メートル、八〇メートル、五〇メートル—山津波のように迫ってくるダーション騎兵二〇〇騎の姿を横目に捉えながら、リューネはその迎撃陣を躲すまでの距離を頭の中で刻み続けた。

あと三〇メートル、二〇メートル、一〇メートル。

騎乗槍が伸ばした手で押しのけられそうなほどまで迫り、ダーション軍騎馬の鼻息が届くような距離。敵が上げる声と蹄の音は鯨波となって、リューネの頭上から降り注ぐばかりだった。

あと、五メートル。

リューネの身体を、真横から強い衝撃が襲った。そして、自分の視界が宙に浮き上がるのを感じた。

レイルの所からも、リューネ達を飲み込もうとするダーション騎兵隊の姿が見えた。猟犬の群れから逃れようとするキツネのように、リューネ以下イーグリア騎兵隊が伸びやかに馬足を速めながら、戦場を駆け抜けていく。その様子は、騎乗槍の牙を並べた獣の口と、その前を掠め過ぎる俊敏な獲物を思わせた。

「リューネ！」

自分自身、退けても退けても前進してくるダーション歩兵をまた押し返ししながら、戦女神の名前を呼ぶレイル。

だが、数にして四倍の相手に絶好の迎撃態勢を取らせたという現実は重かった。

イーグリア騎兵の隊列が、後尾から順に、ダーション兵馬の雪崩に飲まれるようにして打ち倒されていく。それは見る間にイーグリア騎兵隊の上を覆っていき、ついには、

「リューネエーッ！」

戦女神の青い戦装束が、雪崩の底に消えた。

レイルは、そうすることで少女の身を敵の騎兵から守れると願ってでもいるかのように、声を限りにリューネの名を叫んだ。彼女がダーション騎兵の陣形最左翼にかかって消えた場所へ向かいたい衝動を、懸命にこらえる。

いま僕が城門の前を離れれば、チュルリーを守る人間がいなくなる。

我知らず、視線が下がった。息は荒く、身体中が熱かったが、絶望したわけではない。ただ、胸に湧いた一つの眩きが、その意味するところの粘ついた重みが、彼の心を毒薬のように冒していた。

――もう、殺しはじめなければ、駄目だ。

アティアの顔が浮かんだ。いつも自分を信じて、励ましてくれた幼なじみの、明るくて屈託のない笑顔。

「……ごめんね、アティア」

レイルは深く息を吐いた。目の前に槍を振りかざした兵士が迫る。無造作に穂先をかわし、顔のすぐ脇で空を切った柄を、ドアノブでも握るかのようにつかんだ。

「僕は、君に笑ってもらえない人間になるのかも知れない」

頭から押し込むようにして足を踏み出し、槍を押し返す。本来の持ち主の身体が石突きに押されて宙を舞った。

あまりにあっけなく、あまりに造作もなく仲間が放り投げられたのを前にして、ダーション兵の足が止まる。数メートル前に立つ軽装の少年が向ける眼差しには、大軍を背にした大の男にさえ二の足を踏ませる透徹した光が宿っていた。

レイルは彼らが動きを止めたのを見て、もう一度だけ、願いを繰り返そうと思った。

「退けば、追わない」

静かにそう口にしながら、長剣の切っ先を下ろす。顔を見合わせる、ダーション軍歩兵達。いつの間にか、後尾からしきりと発破をかけていた指揮官の声も聞こえなくなっていた。

そして、誰もが帰趨を計りかねているような空白の中で。

激闘の繰り広げられた湖沼地帯に最終的な決着をもたらす一団が、南東に広がる樹林の中から姿を現した。

リューネは投げ出された土の上へ、勢いに逆らわずに転がって衝撃を受け流すと、ダーション軍騎兵の蹄にかからないようにと飛び退りながら身軽に立ち上がった。が、敵騎兵の馬列は、槍を突いて身構えた彼女から、数メートル離れたところを駆け抜けていく。

……あと、ほんの少しだったのに。

戦女神は槍を携えてダーション軍を見つめながら、胸の中で呟いた。

一馬身か、一馬身半ほど。その差が届かず、相手の陣形最左翼に引っかかった。細身なリューネはその衝撃で鞍から撥ね飛ばされ、反面、そのおかげで傷を負うことはなかった。騎馬に最後までまたがっていれば、今頃は間違いなく蹄の下だっただろう。

リューネは自分の拵えを確かめた。鎧に傷はない。肩にかけた弓も無事。槍も手放していない。長剣も腰に吊られている。身体にも、怪我はなし。

次いで、戦況を確認した。この湖沼地帯に残るダーション軍は、騎兵が二〇〇騎、歩兵が二〇〇人。対するイーグリアは、レイルとリューネの二人だけ。

状況を把握して、白銀の髪を軽くかき上げるリューネ。

ダーション軍騎兵隊はセルバソン城城壁近くまで駆け抜けてから、速度を落として転進し、リューネの立っている方へと馬首を巡らせてきた。その最前列に、槍を操って部隊を指揮する男性の姿が見える。その瞬間、全てが理解できた気がして、

「……そうか。あなただったんだ」

戦女神は無造作とも言える自然さで戦場に佇んだまま、呟いた。紅玉色の瞳が、捉えるべき獲



物をようやく見出して、凜とした輝きを宿す。

倒すべきは、あの指揮官ではなかった。この戦場で、ダーション軍の他の誰よりも正しく状況を理解し、的確に指揮をし、戦果を上げ、リューネ達を苦しめたのは、あの指揮官ではなかったのだ。

突進してくる騎兵に向かって足を踏み出す。槍を構える。二〇〇騎対リューネ一人。勝負にはならない。

それでも彼さえ倒せば、ダーション軍は退き下がる。

「レイルは、残れる」

リューネにとっては、それで充分だった。彼女の携えている槍は、そう長いものではない。しっかりと引きつけて揮う必要があった。焦れず慌てず、嵐をも受け止める柳木のように大地に足を付けて、ダーション軍副官を待ち受ける戦女神。

だが。肝心のその副官は、リューネのところまでまだ百メートルあまりを残した状態で、何を思ったか部隊を急停止させてしまった。

「？」

怪訝さに小さく首をかしげるリューネ。副官とそのそばにいる数騎とが、リューネのずっと後ろ、南東の方向を指さして何事か言葉を交わしている。

リューネも振り返ってみた。湖沼地帯に広がる樹林の足下から、武装した一団がセルバソン城に向けて行軍してくる姿が映る。

戦女神の目には、その先頭に行く騎馬兵の顔がはっきりと見えた。リューネはちょっとだけ、不機嫌になった。

「……ザッツ」

その名を口にする声に、少し険がこもる。

本当に、来るならもう少し早く来いっていうのに。

## ■湖水地帯攻防 7

ザッツはセルバソン城城壁前の様相を目にして、ぞくりと嫌な汗が浮かぶのを感じた。剣や槍を持って動いているのは、ダーション軍の兵士ばかり。イーグリアの軍装はほとんど目につかない。

レイル達も、もしや――そんな思いを振り払うように、彼は戦場へ向かって進む部隊に馬上から命じた。

「総員、長弓構え！ 狙いは城壁前ダーション騎兵隊！ 順風弱風、距離二〇〇！」

一〇日にわたる強行軍にも平然とついて来た頼もしい部下達が、号令に従って片膝立ちになった。背負っていた長弓を手にとって、一斉に引き絞る。並べられた矢じりは天を指し、鋭利な光を湛えながら放たれる時を待った。

ザッツはもう一度、標的に据えたダーション騎兵隊へ目をやった。新たに姿を見せた自分たちに、退くか攻め続けるかを迷って馬足が止まっている。

「放て！」

それを確認して、ザッツは語気鋭く声を上げた。

弦から放たれた矢柄がにわか雨のような音を立てて敵陣に降り注ぐ。

「楯も弓も持たねえでのこのご戦場に出てくるたあ愚の骨頂だ！

お前ら、ダーションの野猿どもに戦を教えてやれ！」

数にして四倍。イーグリア国軍ザッツ隊一〇〇人に対して戦場のダーション軍は四〇〇。それでも、副隊長の威勢のいい発破に活気づけられて、ザッツ隊の兵士達は間断ない矢じりの雨をダーション軍の上へ降り注がせた。

ダーション軍副官は南東の樹林を見据えながら、きつく奥歯を噛んだ。

そこから現れたイーグリアの援軍が、遠距離から飛箭の雨を浴びせてくる。対するこちらは、イーグリア騎兵隊最初の突撃をしのいだ際に楯を壊された騎兵が多く、歩兵の大半も楯を持っていない。

板金鎧に当たっては神経をかきむしる音を残す矢じりの嵐の中で、副官は戦場へ、友軍の状況を確認めようと目を走らせた。

ダーション軍は突然現れた敵の援軍に士気を奪われ、さらに、降りかかる矢に当たって次々倒されていく。頭を抱えてただうづくまるだけの者や、剣も槍も放り出して亡骸を矢避けにしている者も出ている。もはや訓練された兵士や隊の体をなしていない。

彼は、忸怩たる胸の裡で悟った。

……もはや、これ以上の抵抗は無意味だ。

これ以上セルバソン城攻略に固執すれば、本当に全滅する。そう判断を下したあとの行動は、素早かった。

「退却一！ 退却しろ！ 退却一！」

精一杯声を張りながら、槍を天にかざして小さな円を何度も描き、自身、騎馬を北西へ――ダーション国境の奥へと走らせはじめる。

右に左に顔を向け、馬を走らせながら退却の言葉を友軍に繰り返す。

ダーション軍兵士達は、副官の指令に一瞬顔を見合わせてから、じりじりと後退を始めた。「退却しろ！ 退却だ！ 急げ、無駄死にしたいか！」

戦場を駆けながら、声を限りに退却指示を出し続ける副官。ダーション軍兵士達の足が次第に速くなった。南東のザッツ隊や目の前のレイルに向けていた身体を国境の方へ向け直し、顔も前を向き、後ずさっていたのが背を向けて走り出す。

副官は一人でも早く弓の射程外に逃れるように、ひたすらに退却を促し続けた。と、「貴様、何を指示している！」

誰かが彼の騎馬の鎧にすがりついた。目をやってみる。落馬した際の泥汚れにまみれた指揮官が、そこにいた。目が血走っていて、険しい形相で副官をにらみ据えている。

「お館様！ ご無事で」

「馬鹿者！ 何がご無事だ！ 何を指示している！」

「退却です、お館様。この戦は、我らの負けです」

努めて冷静に、主君へそう告げる副官。だが頑迷な指揮官はその言葉に耳を貸そうとはしなかった。

「よく見ろ臆病者め！ 相手の援軍はたかだか一〇〇人いるかどうかだ！」

「士気の下がりきった兵士と意気軒昂な兵士とでは、数の比較になりません。

兵装の準備も足りない。食料の備えもしていない。

例え彼らを制圧しても、セルバソン城を二日と抑えておけません」

彼のまたがる馬の足下にも、何本もの矢が突き立つ中で、何とか主君に納得してもらおうと言葉を重ねる。

「黙れ！ このままおめおめ帰れる一一」

だだをこねるように首を振った指揮官の言葉が、不意に苦鳴の中へ途切れた。馬体へもたれるようによろける。副官の目に、主君の肩口、鎧の隙間に突き刺さった矢が映った。

「お館様！ もはやお分かりでしょう、お早く！」

言って、彼の鎧を両手で掴むと、渾身の力を込めて鞍の上へ引き上げる。呻きながら、指揮官も自分から鞍の取っ手を掴み、身体を乗せた。

矢傷を受けたことで、よい意味で心が折れてくれたか。副官は、ともかくも主君の身柄を戦場から確保できたことに安堵しながら、手綱を取って騎馬に拍車を当てた。

軍馬は力強い一蹴りとともに、二人を乗せて戦場を離れるべく、足を速めていく。あたりを見渡した。兵士達の撤退の状況もよい。ダーション軍が退いていくのを見たせいか、それとも矢も尽きてきたのか、イーグリアからの攻撃も淡泊になっている。

どうにか、これ以上の損耗とお館様の一大事だけは、避けられる。

副官がそう思って、一つ息をついた時。真後ろから鉄球が直撃したかのような衝撃を兜に受け、彼の意識が一瞬飛んだ。

手綱が手から離れる。下半身に力が入らず、鞍を足で押さえていられない。鎧は主君に譲ってあった。世界が傾ぎ、自分の身体が馬の背から滑り落ちるのが分かる。

ダーション軍副官は落馬した。矢傷を受けた主君は意識を失っているのか、馬の首にもたれたまま。

副官はただ、ぐらぐらと揺れる景色の中で、遠ざかっていく騎馬の後ろ姿を見送ることしかできなかった。

リューネは味方の矢に当たらないようにと、セルバソン城城壁の方へ身を退いた。レイルの姿を探そうとして、城門の方へ顔を向ける。が、馬に乗っていればともかく、自分の足で地上に降りているときでは、リューネの背丈だとダーション軍の向こう側は見えなかった。

口元に少し力がこもり、戦女神は城門の方へ一歩足を進める。と、その耳に、退却を指示するダーション軍副官の声が届いた。

足を止め、振り返るリューネ。騎馬を操り、降りしきる矢の雨の中で退却指示を飛ばしながら走っていく彼の姿が、浮き足立ったダーション軍歩兵隊の向こうに見えた。

リューネは走り出していた。身を低くかがめ、彼の騎馬が駆けていくのと方向を合わせて、山猫のような敏捷さで。周りにいるダーション兵はもはや戦意を失っていて、戦女神の行く手を遮ろうという者はない。やがて飛箭の驟雨も弱まってきた。

が、いくら何でも速度に乗り始めた騎馬と少女の足とでは勝負にならない。泥を飛ばして北西の国境へ消えようとする彼の騎馬に、リューネはそれ以上の接近を諦め、代わりに弓を手に取った。

弓に体重をかけてたわませると、弦を一巡り、手早く巻き増す。立ち上がり、引き絞った。戦装束の凜とした少女の手元には、矢柄はない。代わりに、あのほの赤い燐光が一条、生まれていた。

狙いを定める。一拍と間を置かず、戦女神の細い指が、巻き増されて張力の高まった弦を放った。

赤い光が一条の閃光になって、空気を引き裂くような音を残しながら真っ直ぐに戦場を駆け抜ける。

リューネが放った光の矢は、ダーション軍副官の兜を直撃した。

リューネの操る赤い光条には、矢じりと違って貫通力がない。が、それよりも遙かに重い分銅が激突したような衝撃力がある。同じ弓で撃っても普通の矢の倍ほどの速度に達するが、真っ直ぐにしか飛ばない上に速度が落ちると消えるので、長弓の利点である曲射はできない。

使いどころは限られるが、今このときに関してはそれが奏効した。

副官の身体が鞍の上からずり落ち、湖沼地帯の浅い水たまりに落ちて小さな水しぶきが上がった。それを確かめて、静かに弓を下ろすリューネ。

それから彼女は槍を手に、ゆっくりと彼の方へと歩みを進めた。

そうして、一〇〇歩ほどの距離を詰めて、リューネが眼下に副官の姿を収めたとき。戦女神とレイルを苦しめ続けたダーションの有能な部隊指揮者は、濡れた砂を掴みながら、打撃と落馬の衝撃から立ち上がろうともがいていた。

いくら下が柔らかい土だとはいえ、ほとんど受け身もとれずに首から仰向けに落ちたのだ。何分間かはまともに立てたものではない。

リューネは彼を、紅玉色の瞳で見下ろしながら、静謐ささえ湛える仕草で、携えていた槍を構えた。

副官がどうにか膝立ちになって、彼女を見上げる。こちらへ向けられた土に汚れた顔には、恐怖というよりも崇敬に近いような表情。言葉はなく、ただ眼差しだけが行き交う。

その光景は敵を前にした兵士のものではなく、戦女神と彼女に拝跪する敬虔な信徒の図を思わせる厳粛な色彩があった。

リューネは静かな眼差しで彼を見つめ返しながら、小さく唇を開いた。

「ごめんなさい」

手にした槍の鋭鋒が、陽射しの中で光の弧を描いた。

「……あなただけは、帰してあげるわけにいかないの」

## ■それぞれの再会

次々と撤退していくダーション軍兵士の姿を見て、レイルは大きく息を吐きながら剣を下ろした。手にしていた槍を傍らの地面に突き刺して、南東の援軍を仰ぎ見る。

勝ち鬨を上げ、悠々とセルバソン城に向かって行進してくる彼らの姿が目映った。その先頭に、見知った男性の姿が見える。

驚きもあったが、樹林の向こうから現れたのがイーグリアの軍勢だと分かった時に、真っ先に思い浮かんだのは彼のことだった。

自分は至急で王都に戻らなければいけないとの、レイルに命令を下した時の言葉。それが増援を率いて自分を助けに来るためのものだったことを、レイルははっきりと理解した。

「……ザッツさん」

小声で呼びかけたのが、聞こえたわけでもないだろうが。背の高い暫定上官が、こちらを見て足を止め、それから小走りになって近づいてくる。

ほっとしたのと同時に、

「とりあえず、ザッツさんには言いたいことが腐るほどありますよ」

城門前に立ったまま、彼に向かって浮かべる微笑みが、我ながらちょっとだけ引きつるのが分かった。

リューネが槍を片手に城門の前までやってきた時。彼女が守護する少年は、褐色の髪の暫定上官と話をしているところだった。

「ザッツ……」

足を止めて、小さくその名前を口にする戦女神。彼はレイルの肩に軽く手を置き、労いの言葉をかけながらも、少し責められてたじろいでいるようだった。

見上げているレイルの表情がちょっとだけ怒っていて、その視線を受けるザッツの目元はちょっとだけ申し訳なさそうな苦笑いになっている。

送っている視線に気がついたのか、レイルがこっちへ顔を向けた。目が合う。靄がひいたように晴れやかな表情になって、

「リューネ。無事だったんだね」

にっこりとほほえみかけてくれる、鳶色の瞳の少年。リューネは無言でうなずきながら、彼に近寄った。

「お前も、怪我はないのか？」

ザッツが顔を向けて問いかけてくる。リューネはちらりと視線を投げただけで答えは返さないまま、レイルの隣に立つと、穏和な眼差しを自分に向けている少年の肩を掴んだ。

少し驚いたように、「リューネ？」と声にするレイル。

戦女神は彼の鳶色の目をまっすぐに見つめ、

「レイル。あんな戦い方は、駄目」

引き結んでいた唇を開くと、固い声でそう言った。

「え……？」

虚を衝かれて、レイルが問い返す。リューネはじっと眼差しを据えたまま。唇にはきゅっと力がこもっていた。

やがて彼は、戦女神の言葉と瞳が伝えようとしていることを理解したようで、「……ごめん」

リューネの細い腕にそっと手を添えながら、小さく口を開いた。その表情には、ちょっと困ったような、でも優しい微笑み。

レイルが伝えたいことをちゃんと理解してくれたのが分かった。同時に、でもそれをすぐには聞き届けてもくれなさそうなのも伝わってきた。

納得いかない。彼が運命の英雄なら、彼の死はリューネにとっての人界での活動の終わりでもある。レイルの生命は、彼一人のものではない。もっと真摯に受け止めてくれなかったら、彼女も困る。

柳の眉を少しだけしかめながらリューネは、だけど、自分に触れるレイルの手のひらが伝えてくれる温かさに絆されて、それ以上言葉を重ねることができなかった。

レイルは、抗議するような視線を向けてくるリューネに、もう一度微笑みかけた。

戦女神は端正な面立ちに少し不釣り合いなあどけなさで唇をとがらせ、

「むー……」

肩に手をかけたまま唸っている。

彼女が自分を心配してくれていることも、殺す気でかかってくる相手を手加減してあしらってばかりいれば命がいくつあっても足りないことも、当然レイルにも分かっていた。

——でも、それを簡単に受け入れてしまったら、僕はきっとアティアのところへ帰れなくなる。

それ以上なにも言わずに、まっすぐリューネの瞳を見つめ返すレイル。やがてリューネは渋々といった表情で、肩を掴んでいた手を放してくれた。

つい、彼女に向けた笑顔が深くなる。戦女神は少しすねたように一步下がると、添えていたレイルの手をぎゅっと掴んでから、引き離れた。

## ■約束と祝福

---

衝立で仕切られた続きの間でソファに腰を下ろしたまま、チュルリーは司令室になっている部屋のドアがゆっくりと開けられる音を聞いた。華奢な肩に震えが走る。

外から聞こえてきた戦の音――蹄が土を蹴立てる音、鎧と鎧、剣と剣がぶつかる高い金属音、怒号、悲鳴、そして、石造りの壁さえも貫いて耳に届いた、澄み渡る響きの死の号令――そうしたものが全て終息し、やがて戦の終わりを告げる歓呼の声とその小さな耳朵を揺さぶったのが、もう何十分も前のこと。

それがイーグリアの勝利を告げるものなのかダーションの勝利を宣するものなのかは、分からなかった。

確かめるのは簡単だ。ソファを立ち、衝立を回り込んで、司令室の大きな窓から下を眺めてみればいい。

でもそれをすると、見てはいけないものを見せられてしまうのではないかという恐怖が、チュルリーの幼い身体を縛り付けていた。

司令室に詰めていたロルスン部隊長以下の副官達が検分のために出て行ってからも、だいぶ時間が経っているはずだ。

そして今。司令室のドアの音がした。聞き違いではない。重いきしみを上げながら、頑丈な木組みの扉が開かれていくのが分かる。

敵将が来たにしては動きが穏やかだ。でも味方が戦勝の報を持ってきたのなら、もっと嬉々とした声が聞こえてきていいのではないか――煩悶とした思いばかりが脳裏を駆け巡り、ソファを立つことができない。顔を上げることも。気づかぬうちに祈るように組み合わせていた両手に額を押しつけて、どうにか勇気を奮い起こそうとする。

静かな足取りが、司令室の中を横切ってくるのが聞こえた。もとはチュルリーの居室だったその部屋の、入り口から見ると右奥に、この続きの間への出入り口がある。足音は、扉がなく衝立で仕切られているだけのそこへ向かって、迷いなく向かってきていた。話し声もなく、どうやら一人のようだ。

チュルリーはきつく目をつぶった。

もしここに敵が来たのなら、私はもう助からない。それに、もしここに敵が来るようなら、きっとあいつは――

「……チュルリー？」

うなだれた頭の上から、声がかげられた。肩に触れる優しい体温を感じた。

全身の血液が一気に熱を持って駆け巡りはじめ、凍り付いていたものが一息に溶けたように、チュルリーは顔を上げた。

願っていた通りの顔が、その視線の先にあった。少し驚いたような、でも最後に自分の前を離れた時に見せてくれたのと同じ、柔らかな微笑みで。

その人は自分が腰を下ろしているソファの前に片膝をつき、右肩にそっと手を当てて、こっちを見つめていた。

名前を呼びたかったのに、声が出なかった。自分の祈りが通じたことを確かめたくて、気がつ



けば、目の前にひざまずく少年の首筋に抱きついていた。

夢でも幻でもない、確かな手応えとぬくもりが返ってくる。

「チュルリー!?」

心底面食らった、レイルの声。それが自分のすぐそばで、吐息が触れるほどの距離で感じられることが、信じられないぐらいに嬉しかった。

と、そこまでは、百歩譲って事実だと認めてやってもいい。

あの時の、続きの間での出来事を思い返す度に、チュテルナ王女殿下はそう自分に言い聞かせていた。

聞けば、一〇倍の敵軍を押し返せたのはリューネの揮った果敢な指揮によるところが大きく、セルバソン城城壁の中に敵兵が一步として足跡を印せなかったのは、レイルが城門をたった一人で死守したからだというのではないか。

だとすれば、それだけの功ある英雄に王族として祝福の抱擁を与えるのは、まあ、過ぎた荣誉だとはいっても、特別の恩賜としてあり得ないではない。

だが、その先は絶対になかった。

レイルは、彼自身赤くなりながら「誰にも言わないから大丈夫」と取り繕っていたが、言う言わない以前にそんなことは起きなかったのだ。

あのとき、驚いてわたしの名前を口にしようとしたレイルの言葉。それが、「殿下」までちゃんと付ける前に途切れたのは、ああ、唇がふさがれたせいだなどということは、絶対に絶対に、ない。

「……チュルリー。唇痛いの？」

「ッ!? な、何でだ」

「このあいだからずっと触ってるから」

「さ、触ってない！ 痛くもない！

あと、殿下を付けろというに！」

チュルリーは、気づかないうちに口元をなでていた指を慌てて膝の上に戻し、リューネの異論をふさぐようにして言葉が続けながら窓の外へ顔を向けた。

ダーション国境の湖沼地帯の光景が、陽光の中、静かに佇んでいる。

越境してきたダーション軍との死闘から、今日で三日。戦闘の傷跡は大きく、ロールスン指揮官の報告では、イーグリア国軍の戦死者は五〇人を数え、負傷者もほぼ同数、まともに活動できる者は事実上、援軍に馳せ付けた歩兵隊以外にいないという。

彼らはなんだか、何をするにも「これも演習ですから」と言って意味ありげに笑っているそうだ。ロールスンはそれが面白くないらしく苦り切っていたが、チュルリーには彼らの考えることがよく分からない。

今彼女にはっきりと分かっているのは、

「……それで、レイルはどこへ行ったのだ。

あいつに護衛された記憶が、わたしにはついぞないぞ」

司令室から自分の居室へと再度様変わりしたこの部屋に、鳶色の瞳の少年がいないということ。

「レイルは、ザッツ達と一緒に戦後処理だよ」

チュルリーの苛立ちへ、律儀に答える戦女神。王女殿下は窓枠に肘をつき、ぶすったれた表情で中庭を見下ろした。忙しく立ち働く人々の姿が目に入る。

負傷兵の手当、捕虜の収監と監護、壊れた武具の修繕に、人馬双方の飼養。王都への連絡と、国王陛下や国軍との要求と指示のやりとり。

やるべきことはそれこそ無数にあり、兵士達だけではなく、城内の世話をしていた平民もかり出されている。何の血が騒ぐのか知らないが侍従長まで、置物じみた容貌に似合わずに、城内で裏方の指揮を執っていた。

対してチュテルナ王女殿下には、王都から何の要求も指示もやってきていない。王都へ戻るようにと促す勅使が来るでもなければ、無粋無聊を慰めるべく貴族や王族達が伺候してくるでもない。

意図があって留め置かれているのか、ただ単に忘れられているのか。

「……あるいは、見限られているのかも知れない」

窓の外を見たまま、思いが呟きになった。この先もう、王族として王都に戻ることもなければ、曲がりなりにも国王の異母妹に列する貴人としてイーグリアの政に関与することもないのかも知れない。

それならそれでいい、とも思う自分に、チュルリーは我ながら少し意外な感を抱いた。

チュテルナ＝リュウレイオー＝エリミュエステアリ王女殿下。御年一五。まだ身を焦がすような野心を覚える歳でも、背筋を貫く義務感を抱くような歳でもなかった。

ただ、

「……あ、レイルッ！ あいつ、あんなところで何を遊んでいる！」

「あれは乗馬の練習をしてるんだよ」

簡明だが困難な約束を果たしてくれた少年の、その姿を目で追いながら過ごすことのできる時間が、心地よかった。

## ■作戦の精算

イーグリア王都、白亜の断崖。

つい先日、自分の主君と仕事上でしか顔を合わせずにいると貴重な蔵書に穴が空きかねない事態が起きると学んだディトリットは、以後暇を見つけてはフーエルリートのご機嫌伺いに顔を出すようになっていた。

貴族や將軍連はもとより、王族に数えられる人々ですらこうしたことに精を出すのを不思議に思っていたが、我が身に降りかかってみればなるほど重要なのだと納得できる。

たいていは国王陛下の方が忙しくて、一言二言言葉を交わしただけで深く辞儀をして立ち去る程度だが、時折は「いいところに来た」と言ってフーエルリートの遊興に誘われた。そしてそうした時に、他愛なくも重要な意見の交換が行われることも少なくなかった。

今も二人、フーエルリートの居室でチェス盤を挟んで向き合っている。傍らには香り高い茶が豪華な茶器とともに供されていて、どう考えても役割を分担しすぎだと思うお側付きの人間達が、国王の世話をする機会を虎視眈々と待ち構えている。

何から何まで自分でやるのが当たり前で育ったディトリットには落ち着かなかったが、王族の中の王族として育ったフーエルリートには、慣れを乗り越えて当然の状況のようだ。

「ダーションだが」

盤面を見下ろして次の手を考えていたディトリットへ、思い出したように、向かいからフーエルリートが言葉をかけてきた。わずかに顔を上げて、そちらを見る。

「その後目立った動きを見せようとはしていないな」

幸いにしてと言うべきではなくて、目論見通りと言うべきなのだろうが。国王という地位にあるにしては若い主君は、世間話でもしているかのような素っ気なさで、そう続けてきた。

「今この時期に表立ってイーグリアと事を構えるのが得策だと思えるほど愚かな国であれば、もっと早くに制圧できています」

同じような淡泊さで、ディトリット。ようやく手が決まって、駒を一つ動かした。その所作と容姿の全てが、悪魔が人間を魅了するために作った人形のようだ。

「……国境の西に対しては、内通者からの報を装った偽情報を流して、セルバソン城へ反イーグリア派を向かわせることに成功した」

あまり間を置かず一手を返しながらか、国王陛下も言葉を向けて来る。

「偽情報ではありません。出所を偽っただけで、内容は真実ですよ」

かすかな微笑みを浮かべながら、几帳面にただす。二つ年上の主君は小さく肩をすくめて盤面から目を外すと顔をこちらに向け、

「国境の東に対しては、ダーションの時ならぬ動きを――あ、正確に――広めることで、度肝を抜かれた国内の同国内通者達を一網打尽にできた」

腕組みをしながら、続けた。盤面を見たまま、うなずきで答えるディトリット。

「その上で、あのやけにそそる身体の女学者が力説しているだけで未確認だった英雄と戦女神の力も、確認できた。

お前の言うチュテルナの新しい使い道というのは、こっちの方か」

「……首肯するのがためられるお言葉が混じっていましたが、後段に関してはご明察の通りです」

伶俐な容貌からやや咎めるような視線を向けながら、ディトリットは答えた。

「しかし、そのためにセルバソン城を失うところだったな」

動じた風もなく、責めるという口調でもなく、フーエルリート。黒髪の青年は盤面に顔を戻し、一手を投じる。

「あの城塞は、今はイーグリアの砦ですが、かつてはダーションのものだった時代もあります。取ったり取られたり。それが国境の城塞の宿命です」

「淡泊な考え方だな。取られていれば、取り返すのに一手間だったぞ」

すぐさま返ってくる、全イーグリアを統べる主君の妙手。

「ご心配には及びません。内通で手に入れた要害を内通なしで保つのは、できない以前に非常な精神的困難を伴うのです」

ディトリットは大理石のチェス盤を睨んだまま、口調は穏やかに、そう答えた。

「肝要なのは、内通者を一掃することです。内通の結果を防いでも内通者が残るのでは意味がありません。内通の結果は残っても内通者さえ残らなければ、それでいいのです」

静かに言い切って、選び抜いた一手を盤面に放つディトリット。

フーエルリートは腕組みのまま渋面になった。信任篤い顧問の青年が、顔を上げてくる。エメラルドと漆黒の、目が合った。

やがてイーグリア国王は自分の駒を指先で掴み、

「……それだけの策謀を上手く運ぶのに、どうしてチェスはこう下手なんだ、お前」

投げやりな口調で「チェックメイト」と告げた。

「それで」

フーエルリートは茶の香味を楽しみながら、勝負のついた盤面を未だに納得いかない顔で見つめているディトリットに声をかけた。

「チュテルナはどうする。ずっとセルバソン城に置いておくのか？」

「いえ。状況が落ち着き次第、王都に呼び戻します」

「いつだ、それは」

「王女殿下の逗留があまりに見え透いた誘い水だったと思われぬ程度——ですから、一月ほどでしょうか」

「もっと早くていいぞ」

主君の言葉に、顧問の青年が顔を向けてくる。フーエルリートはいたずらっぽい笑みを浮かべ、言葉を続けた。

「受け入れの準備は滞りない。ダーションの赤っ恥は、お前が出向いて捕虜を帰してやればいーだろう。

それに——」

茶器を傾げる彼の口元が、楽しそうに笑った。

「――一〇倍の大軍を押し返した二人には、やらせたいことがたくさんある」

ちょうど同じ頃の、セルバソン城。中庭で乗馬の練習をしていたレイルへ、同じく鞍にまたがったザッツが思い出したように声をかけてきた。

「考えてみれば、レイル。お前はイーグリアの北の端に近いところから国土の半分よりも南まで下って、それからまた北西に戻ったことになるな」

「……そうなんですか？」

拙いなりに手綱を操って馬首を並べながら、曖昧な口調で問い返すレイル。口にしている内容自体は分かるが、彼の言わんとしていることが、もう一つつかめない。自分が大陸の地図など頭に入れて行動したことがないことに、今さらレイルは気づいた。

いつもの、弟を見る兄の表情になって、

「やたら遠回りして、ザレスス近くに戻ってきたってことだ。ここからあの町まで、馬を飛ばせば一日とかからない」

そう告げるザッツ。レイルは思わず手綱を握る手に力を込めながら、城門の方を振り返った。今は片側の扉だけが開かれている。自分が馬に乗ったまま通ろうとしても、止められることはないだろう。

母親や、町の人たちや――アティアの顔が思い浮かんだ。信じていると言ってくれた幼なじみの、涙が光る笑顔。

「……そうですね」

城門に顔を向けたまま、レイルの口元から呟きもれた。それから、視線を背の高い暫定上官へと戻す。

兄のように慕う彼が、寛容な眼差しでこちらを見つめていた。自分の中にある気持ちを確かめて、晴れやかな表情が広がるのを感じながら、レイルは答えた。

「必要としてくれる人たちの力になれば、いつか必ず帰ります」

その言葉に、誇らしげに微笑んでくれるザッツ。それから、普段のあの軽妙な表情を浮かべると、

「伝説の終章が、英雄はそのまま家に帰りました。で終わらなくてよかったぞ」

言いながら、後ろをしてみるようにと指をさす。振り返ったレイルの目に、槍を携えた戦女神と、彼女のマントをかぶった小柄な人影とが歩み寄って来るのが映った。フードを頭からかけているが、誰なのかは背格好ですぐ分かる。

「お前がこのままザレススに帰ってたら、俺はあのどっちに殺されてた」

レイルにだけ聞こえるぐらいの大きさの、おどけるようなザッツの口調に、思わず苦笑いが浮かんだ。

「レイルー」

顔を向けたのに気がついたのか、手にした槍を軽く振りながら、綺麗な声を張ってくるリュ―ネ。

「チュルリーと一緒に乗馬したいって」

「んなっ!？」

当たり前のような口調の戦女神に、妙な声を上げたのは小柄なマントの人影。

「違う、貴様、話を作るな！」

彼女は横合いからリュウネの肩を掴むようにして、食ってかかる。フードの端から、すらりと高い鼻筋と抜けるように白い肌が見えていた。

「えー。言ってたよ、チュルリー」

「あんなにおぼつかない手綱さばきで、いざというときに私を乗せて走れるのかと言ったんだ！」

「だから、今試してみればいいんだよ」

凜とした戦装束の少女は何でもないことのようにそう言って、チュルリーの背中を押した。よろめくように前へ出る王女殿下の頭からフードが外れ、金色の髪をきちんと結い上げた愛らしい面差しがあらわになる。

顔を上げたチュルリー殿下の、エメラルドの瞳が、馬上の少年を捉えた。気恥ずかしさと困惑と、拒まれることへの不安とで、緑玉色の輝きが揺れている。

レイルは少し困ったような笑顔を浮かべてから、

「なんとか走らせることができるようになってきました。乗ってみますか？」

自分を見上げるいとけない姫君へ、手を差し出した。